
めだかボックス ~ From despair to hope ~

じーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックス 〈From despair to hope〉

【Nコード】

N8354X

【作者名】

じーく

【あらすじ】

少年は幸福だった・・・

幸せで・・・毎日が光で満ちていた。

だが・・・それは一瞬で奪われた・・・

心を一気にへし折られたんだ。

もう・・・彼には何も残らないのか・・・？

絶望だけが彼の心を支配する・・・

- そんな苦痛な毎日だったが・・・ある時真っ白な空間で目覚めて・・・

Prologue (前書き)

好きな漫画の1つです・・・
ちよこつと書いてみたら・・・

結構創作意欲が出てしまいました・・・
他の作品もこの作品もガンバリマスので 暖かい目をお願いします
苦笑

Prologue

僕は・・・好きだった女性がいた・・・

幼いころから知っていて・・・共に遊び笑い涙を流し・・・

何をするのにも一緒だった。

それは歳をとっても変わらないものだった。

そして・・・僕たちは・・・幼馴染の関係から恋人になったんだ・
・

家族はみんな「やっぱりな!」とか「おそーい!」とか言って冷やかしてはいたが、

とても暖かい目で見ていてくれた。

こんなに幸せな事ってあるのだろうか・・・?あっているのだろうか?
か?

そこまで考えてしまつほどに・・・ 幸せだったんだ・・・

そんな日にはもう・・・

二度と戻れない・・・・・・・・・・・・・・・・

They are all the beginnings for
om here・・・・・・・・・・
《ここから 全ては始まった・・・》

「ん・・・・・・・・ じじは・・・・・・・・？」

目が覚めると・・・・・・・・ ここは何も無い空間。

唯・・・・ 言葉で表現すると、真っ白で何も無い空間。

地面があるのかも分からない、実際に立っているのかも分からない。

「あ……あれ？体が……」

自分の姿が…… 無いのだ。

「よう……」

そこへ…… 1人の男が近付いてきた。

「……だれ？」

慌てるわけでもなく……警戒するわけでもない。

唯……乾いた言葉で話す。

もう何の感情も籠っていない。

全てどうでもいいかの様な……

そんな声だ。

「……なるほどなあ…… お前……んな事があつたのか……
そりゃあ 心の1つや2つ壊れちまっても不思議じゃないな人間
つてのは脆いからな……」

目を見ただけで・・・その男は全てを理解したようだ・・・

「だからなんなの？ 君は・・・誰？ それにここは？」

気になるセリフはあった・・・「人間つてのは脆い」・・・だ。

だが・・・一瞬だけ考えたが、直ぐに考えるのを止め、いつもの表情に戻る。

「お前みたいな人間・・・オレは沢山見てきた。大体は同じなんだけどな・・・違うところがある。人は・・・死んじまったら・・・その魂は浄化され・・・全て忘れるんだ。だが・・・お前さんは・・・死しても尚・・・覚えてるんだな。」

ああ・・・やっぱりそうか、

男の話聞き、理解した。

《僕は死んだのだと・・・》

「理解したようだな・・・」

また目を見て感じ取ったのか、男はそう呟いた。

「はい・・・もうどうでもいいです。僕を・・・早く連れて行ってください・・・もう何も・・・残ってませんから・・・」

そう呟いた。

男は本当に・・・心の底からそう言っていると感じていた。

「・・・ふふふ オレはおまえに興味が湧いたぜえ。」

男からは意外な言葉が帰ってくる。

「興味・・・？」

「そう・・・興味・・・だ。変な意味じゃないぜ。さっきも言ったが、ここに来る奴らはほぼ全員・・・記憶なんか全部消えている。当然だ。ここは所謂体と魂が離れ・・・浄化されたものがここにくるんだ。だが、お前さんは魂となっても・・・その深い悲しみを忘れていない・・・忘れられてない。異常なまてにな。」

ということらしい・・・

僕は結局何が言いたいのがよく分からなかった。

その次に出てきた言葉に更に驚いた。

「お前・・・もう一度・・・違う人生を歩んでみないか？」

所謂・・・生まれ変わりという奴だろう・・・か？

「いえ・・・僕は疲れきってます・・・生まれ変わらなくてもいいんです・・・このまま消えてい来たいんです・・・」

その提案を拒否した。

すると

「今のお前は絶望のどん底だろ？」

また脈絡もあまり無い話が始まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして・・・ 生きたいとも思えない・・・なぜなら 絶望だから。魂が歪んでえしまうほどに・・・」

回答を聞く前に・・・男は続けた。

「そんなお前に凶報だ・・・ お前はそのままだと悠久の時・・・ 早い話このままだと、これから永遠にその苦悩を味わう事になる」

ピクン！！

その言葉に強く反応した・・・

この苦しみが永遠に・・・？

信じられないといった感じだ。

「信じられないと思うが、間違いない。それが証拠に・・・見る。」

そう言っつて男が手を翳した先を見てみると・・・

それは・・・見たことあるような・・・無いような・・・そんなとても・・・デカイ町だ。

「これは・・・？」

見たことあるような気がするけど・・・

疑問だった。

疑問に思ふことなど・・・何かかなり久しぶりのような気がする・・・

「見たことある・・・よな？ 当然だ。ここはお前が暮らしていた場所。ただ・・・100年後になるがな・・・」

「ひゃっ・・・100年・・・？」

「ああそつだ・・・ほら、町の空に日付がふつてあるだろう？どんな技術かは興味ないんで知らんが、日付が2114年になってんだろ？」

男が指した方を凝視する・・・

間違いない・・・日付は大体100年後だ。

仕掛けにしては凄すぎる。

自分の体が見えないのにこの場にいる変な感覚もそつだし、

トリックで出来る事ではなかった。

「信じるか・・・？いや信じざるをえないだろうな。そう・・・お前さんが死んでもう100年になる。それでも・・・お前は記憶を保持しているそれも鮮明にな。」

確かにそうだった。

あの・・・大切なものを失った痛みは・・・まだ心にズキリッと傷を抉るように健在だ、

「時と共に風化する・・・なんて次元じゃねえんだお前の場合。だからお前に興味を持ったんだよ。人に興味を持つなんて、何千年ぶりかなあ・・・？」

途方もない事を言っている・・・

何千年って・・・

「こんな苦痛ずっと受けるなんて・・・嫌じゃねえか？お前さんもさ。」

そう言い再び近付いてきた。

「・・・・・・・・・・」

沈黙・・・

「今回は迷ってんな。」

この人に隠し事は無理なんだろう。

確かに僕は迷っている。

迷うなんて・・・凄く久しぶりのような気がする。

「1つ・・・教えてください。」

聞きたい事があったんだ。

「ん？なんだ？」

「唯の興味本位名だけで・・・貴方は僕にこんなに気にかけてくれているんですか？他に理由は無いんですか？」

確かにもっともな疑問だ。

唯のお人よしって感じはしない。

「まあ そう感じても無理ねえな・・・ まあマジで興味が湧いたつてのはマジなんだ、そして・・・もう1つ」

そう言つて男は穏やかな顔になる。

「さつき何千年ぶりかつて言つたけどあれは実は嘘・・・だったな 実はお前さんより早めに来たお嬢さんが、お前のことを頼むつて言つててさ。」

ドクンッ・・・

心臓などもう無いはずなのに・・・胸が高鳴つたような感覚がした。

「私は大丈夫だから・・・貴方に生きている間に幸せをたくさん貰つたからつて・・・ でも・・・お前の性格を完全に知り尽くしているからかな・・・ お前がここまで追い詰められるのも読めてた

みたいなんだわ。全く・・・こんな人間にほとんど同時に2人にあえるとはな・・・」

オレにとつたら1000年なんてあつという間だ、

転寝したら・・・1000年たってたなんてざらだし。

「・・・か・・・かのじよが・・・？」

涙なんかでないはずなのに・・・泣いている感覚が今度はしていた。

「そつだ・・・お前がここでこれ以上しよげていると彼女・・・うばれないみたいなんだわ。お前さんの心の傷を完全に癒して・・・もう一回天寿を全うしないと、今のような魂の牢獄に閉じ込められたまんまになるんだぜ。そんなのは嫌だろ？」

・・・

「まあ　そういうことだ。生まれ変わらしてやることはできないが・・・別の二次元へ転生してやる事はできるんだわ。そつちなら何とかな・・・　実在しない思いの世界だから干渉しやすいんだ。」

二次元・・・世界・・・か・・・

「彼女が好きだった世界にじげんが合ったよな・・・確か。」

何かを思い出していた。

「・・・たしか・・・あれは【めだかボックス】だった・・・　正

しすぎる主人公に惹かれて・・・何度も一緒に・・・立ち読みしたり・・・してたっけ・・・」

昔を思い出すように・・・そう呟いた。

どこことなく・・・彼女と主人公は似てたんだよなあ・・・

決して折れない心とか・・・人望があったりとか・・・正しすぎるような感じもさ・・・さすがに漫画的なパラメーターはないけど。

「・・・そいつで決定でいいか？」

また・・・心読まれちゃった。

「うん・・・彼女との・・・思い出の漫画だからね・・・今の僕は・・・まだ立ち直れそうにない・・・1人でずっといたって絶対に考え込んで・・・どうでもいって気持ちになってくる・・・なら・・・彼女が・・・会えなくてもそう言ってくれてたのなら・・・もう一度・・・頑張ってみるよ。僕」

力強く・・・頷いた。

先ほどまでとは・・・比べ物にならないほど・・・生氣は戻っている感じた。死者なのにそんな感じがする・・・

「へへ・・・見違えるほどになったじゃねえか。さっきと比べてな。よしそつちでもう一回頑張ってみな。まあ破天荒で無茶苦茶な登場人物に振り回されるかもしれんがな。頑張つて来いよ。」

そう言つと・・・

白い空間が一面光りだした。

「うわぁ・・・なんかキレイだね・・・ あ、そう言えば」

男は思い出したように・・・

話す。

「あの世界は 確か 異能・・・ アブノーマル 異常とか過負荷とか・・・ 後・・・
なんだっけ？ まあいいや・・・そんなのがあったと思うん
だけど・・・ そんな能力者みたいなのになつたりするの？ 僕も」

男は手を掲げながら言う。

「ああ・・・ ああいう世界はそいつの環境やら性質で能力を持つ
みたいなんだわ。詳しい事は分からないが、間違いなくお前さんは
スキル・ホルダー能力保持者になつてるだろう。後、今は見る影も無くなつてるお前
さんの身体能力だけど、思いの強さで強くも弱くもなるようになつ
てるからな、 しっかり頑張れよ！」

なるほど・・・ 思いの強さか・・・

「確かに今じゃ見る影もないはずだよね・・・ 想つてた大切な人
を失つちやつたんだからさ。」

苦笑する・・・

でも 以前ほど落ち込んではいないみたいだ。

Prologue (後書き)

ちよつと長くなっちゃいましたね・・・
とりあえず・・・

読んでくれた方！ありがとうございます！！

さあ！幸せになるぞ！

苦笑

第1箱 「犬や猫じゃないんだからさあ・・・」 (前書き)

よろしく願います!!

第1箱 「犬や猫じゃないんだからさあ・・・」

あれ・・・

ここは？

「さっきの人は・・・？ いない・・・」

辺りを見渡しても・・・いなかった。

それにさっきの場所と違って、なんだか現実味があるところに来て
って感じた。

体もちゃんとある・・・

「転生？そっか・・・転生したんだ・・・僕・・・あつという間だったな・・・」

そう理解し、改めて周りを確認する。

そこは・・・なにやら狭い箱の中・・・

触ってみると・・・

「これってダンボール箱？」

そうダンボール箱の中だ。

たしかに【めだかボックス】って名前だったけど・・・

ダンボールかあ・・・

っと考えていたら・・・

一枚の紙が置かれていたことに気付いた。

《名前は劉一です。可愛がってあげてください・・・》

の一言・・・

「犬や猫じゃないんだから・・・それに・・・僕・・・スッゴい小さくなってる」

あきれてしまっていた。

それに、まさかこんなに若返るとは・・・ まあまだ10代だったけどね・・・

体が小さいといろいろと不憫な事がありそうだなあ・・・

でも、

「もっと大きな不幸を背負っていたし・・・ 何とも思わないや、これくらいじゃ・・・」

ショックな事などない。

うん・・・普通だ。

まあ それがこの世界で言う・・・《異常》とも取れるのだろうけど。

そして。

記憶を・・・懸命に辿ってみると、

記憶が段々と脳裏に浮かび上がってきた。

ちゃんと、この世界の住人として転生できているようだ。

どうやら生みの親は、僕の異常さに気付いて恐ろしくなり捨てたと
言う事だろう。

人は理解できない者に恐怖する・・・

それは、親とて例外ではなかった。

生まれてきて・・・

教えてもない事を知っている・身体能力が異常に高い。

初めは天才と喜んでいたが・・・それが徐々に恐怖に変わって行っ
たのだろう。

冷静に分析できる・・・

「これが僕の異常性・・・なのかな？ 瞬時に全て理解できる事・・・
・・・？ 記憶力とか・・・？ んー・・・わかんないな・・・」

こちらではあるのか分からないが・・・

サヴァン症候群に類するものなのかな？と思った・・・

「まあ・・・いいや・・・考えていても分からないしね・・・」

そう言いつと考えるのをやめた。

幸いな事に気温は低い気がするが、雨は降っていない。

そのため、

暫くその【ボックス】の中でじっと座っていた。

そして。

数十分後・・・

人が声を掛けてきた。

「あれ！！何これ！！！！ ええ！！子供が・・・ 男のコが・・・
！！！！」

女のコだ。

女のゴが僕と同じくらいのゴと手を繋いでいた。

兄弟かな？

「ちょっと！！！！ 僕！どうしたの？」

慌てたように聞いてきた。

「僕は・・・捨てられたみたいなんです。」

涙を流すわけでもなく、淡々とした表情で答えた。

その事に少なからず動揺したみたいだ。

捨てられた事をしっかりと理解しているのにこの表情・・・

2〜3歳のゴが・・・

これは放っておけないわね・・・

「そ・・・そつか・・・ よっし！ 君！私たちと一緒に来なさい！
！ こんなところにいると風邪を引いちゃうしね。」

そう言つと・・・手を差し出された。

少し戸惑つたが・・・

手を握つた。

ギュツ・・・

暖かい手だ・・・

ずっと・・・この温もりを・・・忘れていたよつな気がする。

人の温もりを。

すると、自然と涙が零れ落ちていた。

表情はそのままなのだが・・・

握ってくれた女の口はちょっと驚いていたが、

直ぐに笑顔に戻つた。

「・・・よし！すぐそこが私が勤めている病院よ。もうちょっとでつくからね。」

そして軽く涙を拭ってもらった。

「後の口は善吉って言うんだ。仲良くしてあげてね。」

ぜん・・・きち・・・？

そうか・・・この口が、

「うん。よろしくね。善吉くん 僕の名前は劉一だよ。」

そう言って手を差し出す・・・

「うん！・・・よろしくね！りゅうくん！」

迷いなく握ってくれた。

そして・・・この世界に入って彼が・・・

最初の・・・

友達になったんだ。

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」（前書き）

よろしくお願ひします!!

さあ・・・例の子ども達にあっちやいます。

遭遇率100%でした・・・ 苦笑

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」

暫く歩いていくと、

かなり大きめの病院が見えてきた・・・

ん？ 総合病院かな？

「さあ！ここよ！私が勤めている病院！」

そう言い、病院の中へ入った。

本当に・・・心療外科医なんだね・・・

見た目幼い姿なのに・・・僕もそうだけども・・・

そうしているうちに、託児室が見えてきた。

「さあーで、私はこれから仕事があるからさ！ 善吉ちゃんはこの
で遊んでいてね！」

瞳さんはそう言った。

実を言つと……この人が善吉君の母親らしい……

下手をすると僕と同じくらいの体格に近いのに……正直な感想です。

「つてあれ？　僕は??？」

善吉ちゃんはってことは？

「ああ！りゅういちくんはちょっとだけ一緒に来てくれるかしら？」
瞳さんが笑いながらそう言う。

善吉は寂しそうにしていたが。

直ぐに戻ってくるよと、伝えると嬉しそうに頷いて戻ってくるまで
遊具のパズルをして遊んでる！っと言い部屋へ入った。

「ちあー！いきましょー！」

そう言つと再び手を繋ぎ、託児室を後にした。

「あー！　そうだ・・・この時間も他に患者がいたんだ・・・」

瞳さんはしまった！ツといった表情でこちらを見る。

「あ！大丈夫ですよ！　僕、待ってます。　だから割り込みとかなんてしませんので　他の患者さんを優先させてください。」

表情を読み取ったようにそう答えた。

「そっ・・・そう！　ゴメンね！！直ぐに済むからね。」

瞳は・・・彼の異常性に驚きながらも直ぐに笑顔に戻り診察室へと向かった。

瞳
s i d e

「彼・・・いや　本当に2歳児なのかな・・・？　私が言うのもなん

「ただど……」

自分の容姿もねえ……

つて考えていた 苦笑

でも2歳児とは思えない程……

すっかりといろんなことを理解している……

万能タイプの異常能力かしら……??

暫く考えていたが……

「まあ……彼の事もただ今はそのどころじゃないもんね。」

そう……ここは異常と呼ばれる人たちが集まる病院……

言い方は悪いが……あまり1人の事だけを考えて入られないのだ。

だが……

「いよっし！ 今日もがんばっちゃおう！」

ぐつと力を入れた。

彼女は・・・1人1人に真剣に向き合っている。

当然という人もいるだろうが。

異常性をもった子供に真剣に向き合う事は生易しい事ではないのだ・
・

彼女も異常といわれていた子供の1人だった故も・・・あるのかも
しれない・・・

s i d e o u t

イスに座り・・・

前をじつと見て・・・

全く姿勢を崩さずに劉一は順番を待っていた。そこに・・・

1人の子供が近付いてきた・・・

女のコだった。

「おい！ 隣はあいておるか？」

初対面だったのだがそんなことは関係ない！といった感じだった。

「うん！大丈夫。僕1人だったから、いいよ。」

「そうか すまないな。」

彼女は笑顔を見せ座った。

「凄く・・・嬉しそうだね 君。」

女のこの顔が笑顔（わくわくした感じかな？）だった為 好奇心から話しかけていた。

「む！顔に出ていたか そうなのだ。もしかしたら自分が分からなかった事を教えてくれるかもしれないな。それでちょっぴりわくわくしていたんだ。」

「そうなんだ。」

なんだか・・・彼女の笑顔は素敵だと思った・・・

率直な感想なただけど。

理由はよく分からなかったけど・・・

彼女と・・・話していると・・・

1つ隣にいた男の子が近付いてきた。

「『まつたく』 『なんのためだなんて』 『みんな大人の癖に』 『
的外れだよねえ』」

男の口はそう言つと・・・僕と女の口の前に立つた。

「『人間は無意味に生まれて』 『無関係に生きて』 『無価値に死ぬ
のに決まつてるのにさ』 『君達もそう思うだろう?』 『えーつと
めだかちゃんにりゅういちくん?』」

そう彼が言つと・・・

めだかは 楽しそうな表情から一変した。

「・・・」

僕は黙っていた。

多分・・・ちよつと前までの僕なら賛同していたかもしれない。

「『あれ・・・?君はそう思わないのかい?』 『絶望しているよう
に見えたけど?』」

くまがわ みそぎ・・・

彼の名札にはそう書かれていた。

「そうだね・・・多分ちよつと前の僕なら・・・君の考え方に賛同
したと思うよ。」

そう言う。

「『ってことは……今は違うんだね？』」

「うん。」

そう言うともみそぎは笑った。

「『うーん ちょっと遅かったんだね。僕は』 『もうちょっと早く君に合いたかったよ』 『でも、めだかちゃんは……？君もいつばいい人を終わらせてきたんだよね？』 『彼は残念だけど君はそれでいいと思うよ。』 『何をしてもいいんだ。』」

そう言う……

「球磨川くーん 五番検査室に入ってくれろ？」

ナースのお姉さんから呼び出しが合った。

「『だって 世界には目標なんてなくて……人生には目的なんてないんだから』 『後りゆういちくん、僕に賛同できるのだったら』 『いつでも待ってるよ』 『じゃあまたね。』」

そう言うとき彼は大きなぬいぐるみと共に、

検査室へと入っていった。

「君……大丈夫かい？」

めだかはまだ考え事をしているのか表情は硬く……何も言わな

った。

恐らくは聞えていないのだろう。

自分にも・・・闇がある・・・

その耐性があるからこそ 彼の話しをそのまま聞けたのである。

常人なら・・・いや常人じゃなくても・・・彼のマイナス面を受け
たなら、心から動揺してしまうだろう。

いや・・・めだかの場合は・・・動揺というよりは・・・

彼の意見・・・を正しいと思ってしまったのだろう・・・

次に彼女も呼ばれ・・・

そのまま会話の1つもなく・・・

姿を消した。

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」（後書き）

ありがとうございました！

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう？・・・けど救われたんだね。

よろしく願いします！

めだかボックスに関しては・・・
ちよつと短めに書いてます。

長く作るの特にオリジナル話は難しいですから・・・
でもガンバリマス！！

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう??・・・けど救われたんだね。」

そして暫く待ち・・・

「劉くん！ 二番検査室に入ってくれるかな？」

自分の番が来たようだ。

「はい。わかりました。」

そう言い、検査室へと入っていった。

相手は、瞳先生じゃなかったが、とりあえず。

いろいろと問診をしたりテストをしたり・・・

それは何時間にも及んだ。

疲れてはいないが・・・

「善吉君を待たせちゃったな・・・」

急いで託児室の方へと向かった。

そして中に入ると・・・

善吉は何やら座り込んで考え事をしていた。

「善吉君ゴメンね。遅くなって」

後ろから声を掛ける。

「あっ！りゅうくん！んーん！大丈夫だよ！」

こつちを向くと笑顔で答えてくれた。

「何をしてるの？」

善吉に近付き問いかけると・・・

「これがどうやっても解けなくてね・・・」

すこし残念そうな顔をする・・・

それは知恵の輪だった。

聊か2歳児には・・・いや幼児向けの知育玩具とはいえないと思っ
た。

「ああ・・・それは難しそうだね。善吉君は説いてあげたら嬉しい
？それとも最後まで自分の力でやり遂げたい？」

およそ幼児に言う幼児の言葉ではなかったが・・・

そう聞いてみた。

「えー！どつやっても解けないんだ！解いてくれた方がうれしいよ！」

善吉は迷わずそう答える。

「そっか、じゃあ貸してごらん。」

そつやって知恵の輪を受け取る。

そして解こうとした時、

テレビに目を向けてしまった。

託児室にはあまり似合わない内容の話した。

それを見ると……

カシャン……………

知恵の輪を落としてしまった。

「りゅ……りゅくん？どつしたの？？」

驚いて善吉も近付いてくる。

「あ……あれ？ おかしいね。僕どつしたんだろつ……」

涙が・・・次々出てきた。

それはテレビの内容のせいだ。

ある幸せの家族が・・・

突然不幸な事故にあい・・・

夫のみを残し、皆世界してしまうと言う・・・

なんでこのような内容の話が流されているのかは理解できない。

幼児には難しすぎる内容だろう。

だけど・・・

「りゅうくん！どこか痛いのか？大丈夫なの？？」

善吉も目に涙を浮かべながら心配してくれていた、

「善吉君・・・僕・・・とっても悲しい事があったんだ・・・」

幼児に話すことではない。そして幼児が話すような内容ではない。

明らかに傍から見れば異常だったが、そんなのは関係なく話す。

「大切な・・・ものをなくしちゃってね・・・ もう戻ってこないんだ・・・ もう・・・何もかも・・・終わりのような感じがするん・・・だ・・・」

涙を流していた。

「りゅうくん・・・」

善吉も・・・幼いなりに必死に慰めようとしてくれていた。

「彼がいったこと・・・正しかったのかな・・・？ この世に意味なんてないんだ・・・こんなに悲しいんだ・・・」

そう呟く。

「まってよ！意味なんてないことないさ！」

善吉が叫ぶ。

「え？」

声量に驚いて善吉の方を向く。

「確かに・・・りゅうくんは悲しい事があつたんだよね・・・でも・・・それでも意味ないなんてことないよ！」

そう言い切る。

「なら・・・なんで僕は・・・こんなに悲しい気持ちになるのかな・・・ 苦しい気持ちに・・・」

劉一は・・・顔を俯いた。

「僕は君に会えて嬉しかったよ！！お友達が増えたしね！意味がないなんて事は無いよ！君が・・・辛いのは・・・僕には分からないけど。それは、君はこれからきつと幸せになる為に！今があるんだと思うよ！そうだよ！きつと！きつと！今のことが吹き飛んじやうような幸せが君を待ってるからだよ！」

・・・善吉の明るい・・・無邪気な笑顔は・・・

僕の心を溶かしてくれるようだ・・・

そつと・・・優しく・・・包み込むように・・・

「・・・ありがとう・・・善吉君・・・僕は・・・君と友達になれたことが・・・幸せだよ。」

心からそう思えたのだ。

そして善吉が頭を撫でてくれた。

不思議と・・・心が落ち着くような・・・

そんな感じがしていた。

暫くして

「さー！仕事終わったわ。善吉くん！りゅーくん！帰るよー！」
善吉と遊んでいると・・・

瞳さんが帰ってきた。

「お疲れ様です！」「おかえりー！！！」

善吉と劉一がそれぞれ言う。

「うん！ただいまあー！じゃあ 帰ろっか。」

そう言う・・・そのまま2人と手を繋ぐ。

「え・・・っと 僕は??？」

「ん？りゅーくんも一緒にね。」

笑顔でそう答えた。

その言葉を聞いて善吉は喜ぶ。

でも僕は・・・

「？」迷惑・・・じゃないですか？

そう答えた。

すると・・・

「こぉーらー!」

瞳さんが軽く拳を作り頭を小突いた。

「子どもがなーに遠慮してるのよ!大丈夫!1人になんてさせるわけないでしょ?一緒に帰りましょ?」

そう言う・・・とても優しい笑顔で。

「そーだよ!!!りゅーくん!」

善吉も同様に優しい笑顔だった。

「あ・・・ありがとございま・・・す・・・」

本日・・・

3度目の涙。

涙は嫌なものだとずっと思っていたけれど。

認識を改めよう・・・

そう感じた。

この涙は・・・

そう、

幸せの証なのだと感じた。

その日、3人は善吉 瞳 劉一の順で・・・

仲良く手を繋ぎ帰宅した。

・・・

外から見ると・・・

親子にはみえないだろうーな・・・
苦笑

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう?・・・けど救われたんだね。

ありがとうございました!

第4箱 「めだかちゃんが始まった」 (前書き)

よろしくお願ひします!!

第4箱 「めだかちゃんが始まった」

劉一は・・・

暫く人吉家にご厄介になっていた。

善吉も友達がお泊りに来た！って感じで喜んでいる。

久しぶりに感じた・・・

家庭というものの暖かさだ・・・。

そして・・・病院の方は指示があった為 毎日のように通院した。

異常と言うことをストレートには言わないが、

劉一はそのことをしっかりと理解していると感じたのだろう。

しかし、僕の異常性を見ても、年齢的にも暫くは通院した方が良くと瞳さんが・・・瞳先生が判断したのだろう。

そうとは言わなかったけれど、大体想像がつく。

「病院は別に全然苦じゃないけど・・・同じような検査がどんどん続くのはさすがに嫌気が出てしまうなあ・・・動物じゃないんだし・・・」

そう思っていた。

その日はもう検査はすみ・・・善吉が待っている託児室の方へと向かっていた。

その道中。

周囲が急に騒がしくなってきた。

「おい！！ 13番 黒神めだかはどこに行った！？ 探せ！！！」

「まだそんなに遠くに行っていないはずだ！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうやら誰かが逃げ出したみたいだ。

「黒神・・・めだかつて・・・ああこの間のあのコか・・・あの
みそぎくんと話をしてから表情が凄く硬くなっちゃってちよっと心
配してただけど・・・こんな事になっちゃったなんて。みそぎ
くんも退院してるみたいだし、」

心配だったけど、

とりあえず、搜索の方は先生方に任せ。

善吉を待たせている為、先に託児室の方へ向かった。

でも・・・

「帰りが遅いと心配かけちゃうから、善吉くんに説明してから、ち
よっと僕も探してみようかな。めだかちゃんを。　　とと・・・
ついた！」

そう言う間に託児室へと着き中へ入ると・・・

「む・・・？」

女のコがいた・・・

と言っか・・・　入ったと同時に、睨まれちゃった・・・　グスン・

・

つて・・・

「あ！君は・・・」

中にいたのはめだかだった。

彼女は知恵の輪を解いていた。

入ってきたのが僕だと確認すると再び知恵の輪解きに戻った。

すると直ぐに知恵の輪を解いて見せた。

「ほら解けたぞ。」

そのまま善吉に渡す。

「うわあっ！すごいねきみ！りゅうくんにかとけないって思ったのに！！きみもすごいや！！ありがとうっ！！」

善吉は喜んでいた。

「・・・礼には及ばない 私にとっては取るに足らないことだ。」

そう言っていたためだかの目は・・・

やはりあの時と同じだ・・・

「あっ！！りゅうくん！お帰りー！！」

善吉はめだかに解いてもらった事がよっぽど嬉しかったのか、弾けるまでの笑顔だった。

「うん！ただいま！それで めだかちゃんも、こんにちは。」

善吉に一言いい・・・そしてめだかにも挨拶した。

「ふむ・・・」

「あははは！」

めだかは愛想なくこちらを向いただけで、善吉は笑っていた。

すると善吉は何やらパズルを取り出し、

「さっきの続きでさっ！これも解いてみて！！」

めだかにパズルを差し出した。

すると・・・めだかは無言で受け取り・・・先ほどの知恵の輪より遙かに早く解く。

「わあああ！！！！すっ！！いやっ！！じゃあこれ！！！！」

善吉はさらに・・・ルービックキューブ・IQパズル・・・etc

と出して行く。

めだかはさらりさらりと解いていく。

「すごいね！君！」

ここにある知育玩具はあきらかに対象年齢が高いものだ・・・

それをあっさりと解いていくめだかを見ながらそういった。

「すごくなかない。」

唯その一言だけ言い、

パズル解きに戻る・・・

そのそっけなさに寂しさを僅かに覚えたが・・・

それを吹き飛ばすくらい、善吉はハイテンションだった。

.....

数分たって・・・

この部屋にあった全てのパズルを解き終わった。

善吉はハイテンション！！

ピョンピョン飛び回っていた。

「あははは！転んじゃうよ？善吉くん！..！」

そう言ったが・・・

やっぱり止まらない。

「君はすっごくいやー！..すごくすごくすけうー！..すっごくすけうー！..す」

凄い！その言葉のみ！

もー僕のテンションも上がったっちゃうよ・・・ 苦笑

めだかは・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・さきほども言ったがすごくなんかいい それにすごくたつて 何にもならない 私が生きている事に 私が生まれてきた事に 何の意味もないのだから、」

そう言った。

「それは違うよ！」

つい・・・声が大きくなってしまった。

君は・・・僕の・・・大切な人が憧れた存在だったから・・・そんな風に言わないで欲しかったし、やっぱり聞きたくなかった。

それに・・・

あの時の顔の方が今の顔よりずっと素敵だ。

めだかは突然の大声に一瞬だけ驚き、直ぐに表情を戻し こちらを見た。

「意味の無いことなんて無いよ！ねえ善吉君・・・」

すぐに善吉へと話を繋いだ。

善吉に言った訳は・・・

ほんのちょっと前まで・・・僕も世界なんて意味の無いもの・・・

こんなに苦しいのなら・・・と、

そう思っていたのだ。

そんな僕より善吉の声の方がきつと彼女の心に届くだろう・・・そう感じたんだ。

「うん！僕もこの世に意味のないことなんてないと思うけど？」

そうはつきり答えてくれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ だったら 私に教えるがよいお前たち、私は一体何のために生まれてきた？」

ため息交じりでめだかが言った。

「・・・わからないかな？君と善吉君は初めてあつたんだよね？」

そう善吉に聞く。

「うん」

「初対面の相手を・・・僕の初めての友達をこんなに笑顔にしてくれる君だもん！」

僕がそう言つと善吉が続けた。

「うん！きつときみは みんなを幸せにする為に生まれたんだよ！！ それにきつとりゆうくんも幸せにしてくれるよ！！」

笑顔で・・・今日一番の笑顔でそう答えた。

「！！！！！！」

めだかの表情が一気に変わる・・・

先ほどの表情が嘘の様だ・・・

「善吉君・・・」

僕も表情が変わつたと感じた。

それに・・・覚えててくれたんだね・・・

自然と・・・その場にいた全員・・・笑顔になっていた。

そして・・・めだかは。

「私は見知らぬ他人を幸せにする為に・・・生まれてきたんだ・・・」

そう自分に言い聞かせるように呟いていた。

今日この瞬間から・・・

箱庭学園 生徒会長 黒神めだか に繋がる人生がスタートしたの
だった。

第4箱 「めだかちゃんが始まった」(後書き)

ありがとうございました！

第5箱 「2歳児にはちょっときついよお・・・」(前書き)

よろしく願いします!!

子供の時既にめだかちゃん知識の量は完成してたんだそうですね・
・

一般常識は分かってないみたいでしたが、遊園地とか野球とか・・・
苦笑

さてさて・・・この物語ではどうなるのか・・・

わかりません！ 苦笑

では!!

第5箱 「2歳児にはちょっときついよぉ・・・」

その後・・・暫くの間・・・

3人で遊んでいた。

めだかの表情はとても柔らかく・・・素晴らしかった。

時間がたつのを忘れるくらい・・・楽しい時間だった。

話をしてみると、今度入園が決まっている幼稚園が同じらしい。

その事に善吉は大喜び！

僕も笑っていた。

そしてめだかも同様に・・・笑っていた。

子供らしい笑顔だ。

暫くして、何かをして遊ぼう！とめだかが言い出した。

でもこの部屋の遊戯は全てめだかが制覇してしまったので・・・

めだかがどこからかオセロゲームを持ってきた。

「よし！劉一 私と勝負をするぞ！」

ビシッ！！ 凜ッ っと指を突きつけられた・・・ちよつと怖かったけど・・・苦笑

「良いよお！」

笑顔で承諾。

そしてオセロゲームがスタートした！

善吉はワクワク！って感じで見ている。

「ふむ。先攻後攻を決めるぞ。」

そう言ってじゃんけんをしようとする・・・が。

「めだかちゃん。僕白が好きなんだ！だから後攻で・・・ダメかな？」

そう言つと・・・

「む・・・ふむ。それならば構わないぞ！」

軽く承諾してくれた。

「ありがとうー！じゃあ・・・勝負！」

そう言って白熱したオセロゲームがスタートした・・・

・・・
・・・
・・・

「もう一度だ！」

めだかの声が響いた・・・

「ええつと・・・ また・・・？」

めだかちゃん・・・

6回目だよ・・・

「劉ー！貴様はすごい！私に凄いつてくれたが、貴様も凄いつぞ！だからもう一度だ！」

・・・何がだからなんだろう・・・ 苦笑

そう・・・ゲームに勝ってしまったのが始まりだった。

再戦に次ぐ再戦・・・

気がつけば6回戦・・・

僕の4勝2敗の戦績だ。

いやっ！ 違う。

僕が2回目の勝利の次からワザとめだかちゃんに勝ちを譲ったって
いたのがばれてしまつて・・・

それがめだかに更に火をつけたようだ・・・

「情けは無用だ！私は全力の貴様と戦いたい！」

そう言つて・・・気がつけば更に1勝・・・

そして6回戦が終了。

めだかは徐々に打つ手の鋭さを上げていく・・・

即ち 同じような手は二度通用しない。

回を重ねるごとにさらに白熱していく！！

だけど・・・

善吉はもうオネム状態に・・・

実際僕も眠い・・・

白熱したって・・・基本は2歳児の体だし・・・

ウトウトしてると・・・

「さあ！貴様の番だぞ！」

たたき起こされ・・・まではしないけど起こされる・・・

「はあ・・・い。」

さて・・・ここまできたらちょっと、しんどくなってきた・・・な・・・

でも万全じゃないとまためだかちゃんに言われるし・・・集中集中・・・

「あ！！」

そうだ！いい事、思いついた！

ワザと負けようとしたらめだかは分かっ
てしまっけど。

これなら・・・きっとバレないよね？

「ん？どうした？」

劉一の表情が変わった為めだかが聞いてみると・・・

「えへへ・・・いや、なんでもないよ！ほら、めだかちゃんの番だよ！」

不敵な顔をしてめだかに言った。

「ふふふ・・・望むところだ！」

その表情にめだかは喜び・・・

試合が再スタートする・・・

・・・

・・・

・・・

どちらも引かぬ接戦・・・

そして・・・

めだか・・・ 34個 劉一 30個

めだかの勝利だ。

「ふ・・・やっと貴様に勝てたな！」

「ははは！そうだね。」

めだかが喜んでいと・・・

「ここから声がしたんだな！！！」

「はいッ！！他の患者さんが言っていました！」

部屋の外が慌しくなってきた

「む・・・そうだったな・・・忘れていた。私は逃げていたんだ。まだ貴様のほうが勝率高かったのだが仕方あるまい・・・」

そう言うと立ち上がり劉一と善吉の方を向いた。

「今日は楽しかったぞ！劉一に善吉！では またな！」

善吉は眠ってしまったが・・・とりあえず僕は笑顔で手を振った。

そう言っつてめだかは手を上げ先生たちのほうへ向かった。

いろいろと注意を受けていたが彼らと遊んでいたと説明し、

とりあえず医者達は納得した。

如何に異常性アブノーマルがあつても子供・・・

遊びたいと言う気持ちは止められないだろう。

めだかは最後にもう一度世話になった劉一と善吉に礼を言おうと振り向くと・・・

「・・・・・・・・！！あれは・・・・・・・・」

めだかは・・・驚愕した。

その表情は初めて見る顔だった。

オセロゲームのボードを遠くから見てみると・・・

それは・・・その配置はある模様になっていた。

近くにいたから気付かなかつたのだろう。

それに白熱していた事もあるだろう。

それは・・・

「ははは・・・ オセロでパンダを作っていたのかい？」

「ふふふ・・・ かわいいわね！」

普段のめだかと違って、子どもらしいめだかを見てその場にいた大人たちは微笑んでいた。

そうオセロ盤を遠くから見ると一目瞭然だ。

模様がパンダのようになっていた。

めだかはというと・・・

「誘導されてたのだな・・・それに私は全く気付いてなかったのか・・・」

そう呟いていた。

そして、部屋の方を振り向いてみると・・・

善吉が眠っている劉一為一人片付けをしていた。

そして目があつ。

すると・・・

ニコツ・・・

笑顔でめだかを見つめた。

どうやらこの勝負の意図をめだかが理解したことに気付いたようだ。

その証拠にオセロ盤だけは片付けてなかった。

「ふふふ・・・劉一・・・面白いな・・・やはり。」

めだかも笑った。

不思議と・・・悔しさとかは全くなかった。

めだかは・・・超えるべき男が現れた事に純粹に喜んでいた。

単純なオセロゲームに過ぎないと傍からはそう思うかもしれない。

しかしそんな単純な遊びであっても、自分より上にいる者などにあつたことは無い。

そう・・・これまでは大人でさえそんな人に合つてなどはいなかったからだ。

自分より上の男が現れるなど...

心踊らないわけが無い。

それに私に「生きる意味」を教えてくれた善吉・・・
自分にとって かけがえのない者達との出会い・・・

「これからも楽しみにしておるぞ。 劉一！それに善吉もな！」

そう言つて託児室から出て行つた。

・・・
・・・

「最後の笑顔が何か怖いような気がしたけど・・・ 大丈夫だよね・・・
仕掛けは分かつてもらえたみたいだけど・・・」

最後の笑顔・・・

それにちよつと寒気が・・・ 走るような・・・

そんな感じが・・・

「ふああ・・・ むにゃ・・・ あ あれ・・・？めだかちゃんは
？」

そこで善吉が目を覚ました。

「あ！おはよ 善吉君、めだかちゃんなら帰つて行つたよ。看護婦
さん達に呼ばれてさ。」

「そーなんだ・・・寝なきゃよかったよ・・・」

善吉はちよつと残念そうにしていた。

「幼稚園も一緒なんだし、また合えるさ！」

落ち込んでいる善吉を慰める。

すると、直ぐに元気になった。

あれだけハイテンションだったからかな？ 苦笑

でも・・・うん。元気が一番だね。

そして・・・

「2人ともー 帰るよ!!！」

瞳先生が迎えに来た。

「あーはい！」

「うん。」

2人は託児室をでた。

第5箱 「2歳児にはちょっときついよ」・・・「(後書き)

ありがとうございました!!

第6箱 「えっと・・・ 説明会があるんじゃない・・・」 (前書き)

ちよつとこの話は長いですー!!

話を中々切れなかつたので・・・ 苦笑

話と話の区切りはやっぱり難しい・・・

作者はとりあえず先に書いてあとで区切るから・・・ 苦笑

とりあえず・・・ ガンバリマス!よろしくです!

第6箱 「えっと・・・説明会があるんじゃない・・・」

帰宅途中。

「今日託児室にめだかちゃんが来ていたってホントなの?？」

瞳さんが2人に聞いていた。

「うん！ほんとだよ！」 「はい。」

2人同時に答える。

「そつか・・・いい友達ができたんだね。」

瞳さんは笑っていた。

善吉も笑顔だった。

それに凄くご機嫌なのか、辺りを走り回ったり飛び跳ねたりしていた。

「あははは・・・ まだあんなに元気だ、善吉君。 そっか、善吉君眠ってたんだっただね。 僕とめだかちゃんと勝負してた時にさ。」

僕は笑いながら善吉を見ていた。

生憎ちょっと疲れているため・・・ 善吉のようにはしゃいだりするの。 今はちょっとねえ・・・

「え??劉君!ちょっとまって、貴方めだかちゃんと何かしてたの?」

瞳さんが驚きながら聞いてきた。

「え?あ・・・はい。 めだかちゃんとずっとオセロゲームをしてましたよ。」

ちょっと驚いたが、直ぐに素の表情に戻り話した。

「へ・・・へえー でき!結果はどうだったのかしら??」

なんだか瞳さんの笑顔がぎこちないな・・・

「えーっと・・・ 僕の4勝3敗だったかな??あ・・・ 最後のはめだかちゃんがどう思ってるか分からないけど・・・ ちよっと仕掛けをしたから!」

笑いながらそう答えた。

瞳 side

仕掛けをした・・・？それに・・・あの、めだかちゃんに・・・勝った！？

瞳さんはめだかの状態がすっかり最初の頃と変わってしまったことが不審に思っていたが・・・

何故変わったのかは 劉一の言葉ではっきりとした。

めだかはこの病院に来る前・・・

異常な程の成長スピード、そして知識の量・・・

もはや博士号を持つ科学者でさえ凌駕するほどの知識をもっていたのだ。

当然周りの大人たちは天才だともてはやした。

そして何人もめだかの知識を頼り・・・そして、頼った者の殆どがが挫折していたのだ。

当然だろう。

自分のためまぬ努力の末に培ってきた結晶・・・

それが生まれて僅か1年やそこらの幼い子どもに遅れをとってしまったのだから……

築き上げ来た物が……足元から崩れていくような感覚になったの
だろう……

そんな彼女めだかを見た時……

言っていたのが。

「人間は無意味に生まれて無関係に生きて無価値に死ぬ 世界には
目標なんか無い人生に目的なんて無いそうであろう……？」

冷めたような目でそういい続けるのだった。

何日間か瞳が問診したが、それが変わる事はなかった。

それが今日まさに変わったのだ。

そのきっかけは……

side out

「君だったんだね……」

瞳さんがそう悟ったように言う。

「え???何がですか??」

当然何のことか分かってない劉一はキョトンとしていた。

「いーえ!なーんでもないわよん　これから善吉君をよろしくね!」

最後には瞳さんは弾けんばかりの笑顔だった。

「???　もちろんですよ!　大切な友達なんですから!」

劉一はよく分かってなかったが。

最後の部分はよく分かった・・・

だからもちろんだと言った。

瞳さんは笑顔だった・・・

ただ・・・

何かぎこちない感じがしていたのだけど・・・

それは、めだかちゃんと勝負をしたと言う前から感じていた。

(何かあったのかと思っただけ・・・　大丈夫だよな???)

その表情に少し不安を覚えていたのだけど・・・

とりあえず、ひとまず安心をし、家へと向かっていった。

.....

数日して・・・場所は、

【箱庭幼稚園】

そして今日は箱庭幼稚園入園式！

とりあえず僕には親はもういない為、瞳さんが親代わりとして出席してくれていた。

案の定めだかも行っていた通り、同じ幼稚園だった。

そして園長先生の話しも終わり。

入園式は何事もなく終わった。

が・・・その後大変だったんだよね・・・

「ふむ・・・やっと来たか、」

教室に入ると・・・

めだかがいた。

「あ！めだかちゃん！おはよー！」

善吉は走ってめだかの元へと向かう。

「やあ！めだかちゃん。おはよう。」

少し遅れて劉一もめだかの元へと向かった。

「ふむ。おはよう2人と。以前は世話になったな。」

めだかがそう言うけど・・・

世話？

「ん？？ああ！病院の託児室でのことだね？いいよそんなの！楽しかったし！ねえ 善吉君。」

笑いながら答えた。

「うん！僕も楽しかったよ！！」

善吉も同様のようだった。

「それについて劉一！貴様に話がある。」

めだかは劉一にビシッ！！ 凜ッ っと指を突きつけた。

「え……っと…… 何かな？？」

恐る恐る聞き返すと……

めだかが何やら取り出した。

「貴様にオセロゲームは完全に完敗してしまっただからな、次はこれで勝負だ！！」

そう言っ取り出したのは将棋盤。

それもかなり立派な……

「ええっと…… もーちよつとで 幼稚園の説明会……始まるよ??めだかちゃん、その後……「ダメだ！！」……はい。」

どうやらあの日以来、

僕はめだかにターゲットにされたみたいだ。

とりあえず・・・

一度言い出したらめだかはぜんっぜん曲げないから・・・

「では私が玉将だ。貴様より下だからな。」

そう言っつて将棋の準備をしていった。

僕がルール知ってるかどうか分かってるのかな？？

「ええっと・・・ ルール」はもちろん知っておるな？」うん・・・
知ってる。」

それは絶対事項だったようだ。

後で聞いたんだけど・・・

「私に勝っているのだから私が知っていて貴様が知らない事などないであろう？」という理由みたいなんだ・・・

いやあ・・・勝ったのつてオセロだし・・・

知識はちよつと関係ないつて思つてた・・・

これはちよつとだけ後の話である。

で・・・

とりあえず・・・

平手戦配置をして、玉であるめだか側からスタートした。

「ではゆくぞ！以前のようには情けはかけるなよ？」

言われなくても・・・

何やら殺気みたいなのが発してるし・・・

クラスのみんなも最初はバラバラで遊んでいたのだが・・・

尋常じゃない気配をさっちし、皆消極的になっていた、苦笑

流石に泣き出したりするコはいなかったけどね。

「うん。お手柔らかに頼むよ。」

そう言い。

序盤戦がスタートした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして対局98手目・・・

「王手・・・詰みだね」

そう静かに宣言したのは・・・

劉一だ。

「くっ・・・」

めだかは暫く答えなかったが・・・

「ふ・・・ははははは！ そのようだね。ここからの反撃はもう不可能だね。私の負けだ。」

負けたのに何か清々しいといった様子だね・・・

「あ・・・はははは・・・ 僕も楽しかったよ。接戦だったしね。」

そう2人で笑い合ってた。

他の園児達はと言うと・・・

善吉以外は外で遊んでいた。

教室の雰囲気ギリギリしてたせいだろう・・・

そして幼稚園の先生達・・・保護者達は固唾を呑んで対局を見守っていた。

名人戦を見るかのように・・・

今日は確か説明会があって・・・いろいろな話をしてくれるんじゃないかったっけ??

って言うてみたかったけど。

こんな雰囲気を作った張本人だからそれはやめた。

そして・・・

長い長い入園式の日幼稚園は終わりを告げ・・・

なかった!!!

「では、もう一局だな!」

めだかのこの一言で・・・

「・・・・・・・・え?」

一回じゃなかったんだ・・・って思ってたけど。

諦めて、もう一度打つ事になった。

.....

戦績で言うと.....

その日の勝負は劉一の5勝4敗だった。

「はぁ.....そろそろ帰るわよ？りゅうくん、めだかちゃん？」

瞳さんがその声を掛けてくれなかったらどこまで続いた事やら.....

「むう.....そうか もうこんな時間が、ふむ 楽しかったぞ。ではまたな。」

めだかはかなり名残惜しそうにしていたが.....

顔をニヤつかせながら立ち上がる。

(やはり.....私の目に狂いは無いな。奴こそ私の目標.....超えるべき男だ！)

対局を振り返ると.....

徐々にはあるがめだかが勝っていった。

・・・が。

結局は劉一の後塵を拝してしまう。

最終的に見ると 私が負けてしまう結果になる。

いつ私は奴を超えられるのか・・・

それが楽しみでしかたないのだ。

そう言っつてめだかは立ち上がり父親らしき人に連れられ・・・

リムジンで帰っていった・・・

「リムジン・・・初めて生で見たかも・・・」

と言っつて苦笑いする。

「やっぱり りゅうくんとめだかちゃんはずっしりやーどどど遊
びかわかないけど、伝わってくるよー!」

善吉は笑顔だった。

悪いけど・・・

「あははは・・・僕は結構疲れたりしてるけどね・・・」

つと歯切れの悪い言葉を残す。

「そりゃあね、あのめだかちゃんとあそこまでやっちゃうんだから。」

瞳さんも感心を通り超して半ば呆れてるって感じだった。

「やっぱりりゅうくんは凄いね、善吉君の言ってる通り。」

瞳さんまで褒め倒してくる・・・

流石に照れそうになっちゃったよ・・・

「でもめだかちゃんも凄いですよ。一度見せた戦法は全く通じないんですから・・・あのまま続けてたら・・・最終的に僕が負けていたと思いますね。今日は勝ち逃げできたってところですね。」

そう言ってウインクした。

（確かにめだかちゃんの観察力ならば即座に順応していくんだけど・・・そのめだかちゃんに負けないほど能力が向上していくんだもの。貴方の方がめだかちゃんより何枚か上手ってことは間違いないと思うわよ？こう言っても多分はぐらかすと思うけどね）

瞳は笑っていた。

これほどの異常者アブノーマルは今だ見た事が無い。

いや・・・

1人例外がいたわね。

でも・・・異常アブノーマル・・・ いやそれ以上のそれ以下の・・・

わからない何かだ。

そう・・・私の初めての挫折を・・・味わせてくれた・・・コ・・・

瞳は直ぐに頭を振った。

今は過去の事より 現在いまを見つめなければならぬからだ。

それにしても・・・

今日は驚いてばかりだね・・・

それにめだかを見てても十分驚いたのにそれ以上だということも今日改めて分かった。

私に特に深く関わってるこのコとめだかちゃんを・・・ちゃんと見

守らなきゃね・・・

それが私の・・・心療外科医としての最後の仕事・・・だから。

第6箱 「えっと・・・説明会があるんじゃない・・・」(後書き)

ありがとうございました!!

第7箱 「みんなで仲良く鬼ごっこ」・・・のはずだよな・・・?」(前書き)

よろしくお願いします!!

めだかに勝てるのかな

第7箱 「みんなで仲良く鬼ごっこ」・・・のはずだよな・・・?」

今日も一日!がんばろうーってことぞ!

僕と善吉君は幼稚園にいます。

とりあえず・・・

病院ではオセロ、

幼稚園の初日は将棋、

今度は何が来るんだろう・・・?

って考えてました。

なぜなら・・・

めだかちゃんが凄く笑顔だったからです。

そう 勝負をする前の・・・ 苦笑

そして次はなんと!!

鬼ごっこ!!

・・・え？

室内から突然お外で元気よく遊ぼうと言う事になったみたいです。

理由は、

「ねー 僕も遊びたいよ!」

っと善吉が言ったところから始まりました。

それで、園内の運動場を使った鬼ごっこ大会?が開催されました。

ワッッ!! パフパフパフッ・・・!!

.....

.....

.....

「で・・・なんでこうなったのかなあ？めだかちゃん？」

僕はため息をつきながらめだかちゃんに聞く。

「ふむ・・・他のメンバーは皆私が捕えているからな！後は劉一、貴様だけだ！貴様相手にあのルールでは私が不利のようだったな！これならば公平であろう！」　凜ッ！！

らしいです・・・

最初から思い出そう。

ええっと・・・

確か参加者は10人ほどで・・・この幼稚園の運動場・・・幼稚園の運動場なのにサッカーグラウンドぐらいの広さが合ってる・・・いくら遊び隊盛りの園児でも流石に広すぎるから、鬼を複数決めよとか、範囲を絞ってやろうよ！とか、様々な意見が子供たちから出まして・・・

そこで、めだかちゃんが・・・

「鬼なら私がやる。何処へなりと逃げるが良い！そして、制限などつけなくても良いぞ？」凜ッ！

って言い出したのが始まりだった。

みんな鬼はあまりやりたくなかったんだね？

みんな喜んでたし、何より何処へ行っても良いというめだかちゃんルールに更にヒートアップしたみたいだ。

「めだかちゃん・・・？いいの??ここ だーいぶ広いよ??」

善吉はちょっと心配そうに言うが。

「ふッ・・・望むところといったところだ。私は誰からの挑戦も受けて立つし、制約なんてみみっちい事は言わないぞ？」

唯の鬼ごっこのはずなのに・・・

何やら雲行きが・・・

めだかちゃん・・・さっきから僕の方を見てるし・・・

(これは早々に捕まった方が・・・「劉一ッ!」

ビクッ!!

「・・・良からぬ事を考えてはいないよな??」

あ・・・あれ?

声に出たのかな??

「え……つと、僕？何も言っていないよ……？ねえ 善吉君？」

直ぐ側に善吉がいた為、確認の意味も込めて聞いてみた。

「え？ うん！りゅう君何にも言っていないよ！」

善吉は笑顔で答えてくれた……

(うん！何も言っていないみたいだね！)

安心していると……

「……話を聞いてなかったのか？良からぬ事を考えてはいないよな？つと聞いておるのだ。」

めだかはジト目で見ている……

(うっ…… 頭の中読めるの？めだかちゃん……)

とりあえず……

ズルで捕まるのは認めてくれないみたいだ……

僕に関しては……全力でとくぎを刺されてしまった……

何で僕??

「ふむ 準備も整ったようだな？ふむ・・・そうだルールを追加するぞ！」

めだかが何やら思いついたのか、話した。

「休み時間は丁度今から10分ある・・・あの時計で5分間逃げ切ったらお前たちの勝ち！そしてそれまでに1人でも私が捕まえられなかったらお前たちの勝ちでどうだ？」

めだかが宣言した。

周りはルールを理解していて・・・

次のめだかの言葉に更にヒートアップした。

「もし・・・お前たちが勝ったのなら、この間のようなお菓子を前たちにやるうではないか！」 凜ッ！

以前・・・

入学祝？めだかのスポンサーであるお菓子会社が幼稚園に送ってきてくれていたのだ。

当然みんな喜んでいた。

歯はしっかり磨いてね？と先生に言われていたけど。

「「「「「わー！ー！ー！い！！やたー！ー！ー！！」「「「「「

歓声が上がる・・・

「めだかちゃん！ほんとだね？嘘ついたらヤダよ！」
みんな同じだった。

「ふむ・・・この私に二言は無い！・・・私から逃げ切れたらの話
しだからな・・・」

不敵に笑う・・・

ここにいるみんなはまだめだかとの付き合いが短い為か・・・

勝ちをあんまり疑ってなかったんだね・・・

まあ何はともあれ・・・

「りゅうくん！がんばろうね！お菓子 お菓子」

善吉も他の園児と同じように喜んでいた。

「そうだね・・・とりあえずがんばるよ・・・ちゃんと監視の目
も厳しいみたいだね。」

劉一は苦笑していた・・・

「よし・・・では準備も出来たな？では・・・逃げるがいい！」
凜ッ！

めだかの号令?と共に、

第一回箱庭幼稚園鬼ごっこ大会《仮名》がスタートした。

幼稚園の運動場とは思えないほどの広さの運動場を・・・

逃げる逃げる園児達・・・

傍から見れば無邪気に走り回る楽しそうな子供たちんだけど・・・

「ふん！」

めだかが何やら力を入れるような声を出すと。

「うわッ!」「ええ!」「うそだー!」

一気に3人捕まっちゃったみたいです・・・

(・・・善吉君 めだかちゃんって足に何かついてるのかな?)

小声で一緒に逃げている善吉に聞く。

「あははは！めだかちゃんすっごいや！」

善吉は相変わらず能天気で笑っている。

だってまだまだ始まったばかりだしね・・・

とか何とかしてるうちに・・・

更に4人が捕まり・・・

残り3人！

所要時間・・・0.5分？

1人あたり大体4秒も掛かってないな・・・

鬼ごっこは、障害物（ブランコ・すべり台）を中心に円を書くように逃げていると相手が疲れるとかしないと捕まる事は無いと思うんですけど・・・

めだかちゃんにはそう言った常識はあまり通じないみたいです。

相手の動きを観察して・・・目の動きを観察して・・・筋肉の収縮具合おも観察して・・・

次の動きを予測・・・そしてまるで瞬間移動のような動き・・・

気付いたら前にいた！ってみんな言ってるよ・・・

って・・・ やりすぎだよ・・・

「ほんとにすっごくすごいや！めだかちゃん！」

善吉君・・・

仮にも仲間がどんどん鬼に捕まっていってるのだからもうちょっと危機感を・・・

まあ遊びだからね・・・

でもお菓子掛かってるって事忘れたのかな？あんなに嬉しそうだったのに。

まあ僕はあまり甘いものが好きって訳じゃないからどっちでもいいんだけどね。

唯手を抜いたら怒られる・・・

「善吉君！このままだと僕たちもあつという間に捕まっちゃうからここは分かれて逃げよう！」

固まっついてはいい的だからね。

そう善吉に提案すると。

笑顔でOK!ツとってくれた。

「めだかちゃんは凄いけど!僕だってがんばるよ!! りゅう君もがんばってね!」

そう言って二手に分かれた。

「よっし・・・これで多少は時間が・・・」

っていつてるうちに・・・

「よし!捕まえたぞ!!善吉!」

「うわあっ!」

めだかと善吉の声・・・

振り返ってみると・・・

その言葉どおり、善吉が捕まっていた。

「うひゃああ・・・ 凄いね! めだかちゃんはやっぱり!」

善吉はちょっと悔しそうにしていたが。

直ぐにもとの調子に戻った。

「ふ・・・では 最後だ!ゆくぞ?劉!」

笑顔が凄くまぶしいよ？

……めだかちゃん……

第7箱 「みんなで仲良く鬼ごっこ……のはずだよね……?」(後書き)

後編に続くって所ですかね? 笑

ありがとうございました!!

第8箱 「ええ！まさかの延長戦なの・・・？」 (前書き)

よろしくお願いします！！

さあ頑張って！りゅুকん！！

第8箱 「ええ！まさかの延長戦なの・・・？」

めだかちゃんは、まるで肉食獣の様な鋭い目をしていて・・・

何か怖い・・・ 苦笑

結構めだかちゃんと距離があつたけど・・・はつきり見えたね。

足に力を溜めてる・・・

そして、

一気に距離を詰めてきた！！

擬音をつけるとすれば・・・

ギョーン！！！！！！

かな？

とりあえず・・・

「たあー!!」

声と同時に地面を蹴り。

めだかが伸ばしていた右手に触れないように後方へ捻りをくわえながらジャンプし回避した！

「何ッ！」

めだかは今日初めて驚きの顔をした。

「危ない危ない・・・ 早いねーめだかちゃん。」

劉一はにこやかに笑っている。

めだかは確かに触れたと錯覚するぐらい完璧な不意のつき方だったのだが・・・

回避された。

めだかは・・・

(やはり 流石 劉一だ。身体能力も私を抜くのか？面白いな！)

めだかは凄ーい・・・

笑顔だった。

「ふう・・・(捻りを入れたのはめだかちゃんを視界から逃がさないようにする為だったけど・・・ちよつと派手だったね・・・周りの視線が何か恥ずかしい・・・)」

大人^{せんせい}たちはと言うと・・・

将棋戦の時と同様・・・

何やらスポーツを観戦するようなノリで見ている。

もー何しても驚かない！って感じだね・・・

先生達は・・・ 苦笑

「・・・では行くぞ！ 最近になり少しばかりやっておる剣道の技を見せてやるっ・・・」

そう言いつと・・・

タツ タツ タツ タツ タツ タツ タツ
タツ タツ！

でたー！！ 忍法分身の術！！

つて・・・

「ええええ！増えた！！剣道なの？？これ？？」

これには流石に驚いたよ・・・

いや普通驚くね。流石じゃなくてもさ・・・

驚いたけど・・・

ちよつと燃えてきたね！

負けないよッ！

「よーし！なら全員のめだかちゃんから逃げて見せるよー！」

そう言つと・・・僕も駆け出した。

バツ！！

めだかが胴体を狙って飛びついてきたら・・・

イナバウワー！で回避！

バツ！！！！

肩にタッチを狙ってきたら・・・

体を捻ってスカぶり回避！

バババババツ！！！！！！

分身のめだかちゃんみんなが一斉に僕を狙ってきたら・・・

ハイジャンプで回避！

その時、めだかちゃん同士がぶつかってるみたいな錯覚に陥っちゃったよ・・・

激しい攻防は暫く続き・・・

残り15秒！

「はあはあ・・・」

「くう・・・」

2人とも疲れていた・・・当然だと思っけどね・・・

「時間も時間だ・・・これで決着だ！劉一！」

「うん！」

めだかが最後に選んだ手段は・・・

最初に使っていた瞬間移動だ！！

でもさつきより断然早いような気がする・・・

これって・・・黒神ファントム簡易版・・・？

でも！

「よし！これで最後だ！負けないよッ！っって わああ！！！」

逃げようとしたんだけど・・・

劉一は足元を滑らせてしまいバランスを崩してしまっていた。

「よし！もらったぞ！劉一！」

それを見ためだかが抱きつくように飛び掛ってくるが・・・

スカッ・・・

「何ッ！」

その両手は空を切った。

なぜなら・・・

つるッ!!

「え!?!」

劉一はバランスを崩しただけでなく。

ドテッ……!

地面に倒れてしまったからだ。

めだかはダイビングヘッドをするように劉一に飛び掛ったのが仇となり……

その両手は何も掴むことなく、劉一を飛び越えてしまったのだ。

その瞬間。

~~~~~

セットしていたタイムアップの音楽が響いた……

つまり！

「やったー！りゅういち君が勝ったー！」 「わあーい！お菓子だー」 「ばんざーいばんざーいー！」

後ろから歓声上がる・・・

「いたたた・・・ 鼻打っちゃったよ・・・（涙）・・・  
ん？あれ？ そっか終わったんだ・・・ 何かすんごく長い5分だ  
ったよ・・・」

周りの歓声を聞き、TIME UP したのだと確認。

めだかちゃんのところへ行き。

「あはは・・・最後は危なかったよ・・・ さすがめだかちゃんだ  
ね！」

そう笑いながらめだかに言う。

「ふふふふ・・・そうだな！だが劉ー！貴様も流石だ！」

めだかも笑っていた。

頭脳だけじゃなく、身体能力でも超えるべき男だと分かってしまったためだ、

文武の全てを……

同等……それ以上……

嬉しいかぎりだ！ 対等の者もいなかったのに……な。

これでは顔が破顔せずにはいられない！らしい……

「では、勝者の皆に約束の物を配るとしよう。後劉一！話があるから幼稚園が終わっても帰るで無いぞ？」

めだかはこのでもかって言うくらい笑顔を見せながら言う……

ちょっとこわいよお……

「う……うん……いいよー！」

引きつった笑みになったのは仕方なかったと思いたいね…… 苦笑

今日の僕は幼稚園内のヒーローになった。

その名も・・・

【鬼じっじマン！】

さすが・・・園児達・・・ まあ僕も園児なんだけどね。 苦笑

んで・・・ めだかちゃんと約束の時・・・

「よし！来たな！では はじめるぞ？」

めだかちゃんがなにやら言い出した・・・

何も説明受けてないけど・・・

「ええつと・・・何をかな？」

恐る恐る聞くと・・・

「何って・・・先ほどの続きだ。」

・・・え???

ええっと・・・もう一度考えてみよっと・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・先ほど？

って言うと・・・・・・・・・・・・・・・・？

・・・・・・・・・・・・・・・・鬼じじい？

えー！ー！また！ー！

初めへ戻る・・・・・・・・・・・・・・・・（第7箱参照！）

「ええ！！なんで僕だけ？・・・・・・・・なんでこうなったのかな？  
めだかちゃん？」

そう言うと・・・

「ふむ・・・他のメンバーは皆私が捕えているからな！後は劉一、  
貴様だけだ！貴様相手にあのルールでは私がいかに不利のよ  
うだったのな！これならば公平であろう！」 凜ッ！！

だそつです・・・

悲しい事に・・・

瞳先生は今日は遅れてくるようで・・・

止めてくれる人がいないなあ・・・

善吉は他の友達とお菓子を幸せそうに頬張ってるし・・・

「ではゆくぞー!」

「うっひゃああ!」

こうして・・・鬼ごっこは始まり・・・

そして、

計1時間5分もの全力鬼ごっこは終了を次げた・・・

もちろん最終的に止めてくれたのは瞳先生・・・

助かりましたよ………

「つかれたよ……」

「今回は引き分けだな？ 私の2勝2敗でな！」

めだかちゃんは凄く満足してて、

とても可愛らしい笑顔だったので。

まあとりあえず、この笑顔を見れたからヨシと……

「ちょっと……割に合わないかも……」

疲労具合から考えたらね……

「む？？なにがだ？」

「なんでもないよッ！！」

慌てていい……

長い長い1日が終わった。



第8箱 「ええ！まさかの延長戦なの・・・？」（後書き）

長いでしょうね・・・ 1時間ぶっ通しは・・・

ガキの使いやあらへんでの罰ゲーム

【24時間耐久鬼ごっこ】以上に疲れると思うなあ・・・ 苦笑

ありがとうございました！！

第9箱 「私の家に来るが良いぞッ！」 凍ッ！（前書き）

よろしくお願いします!!

ちよっと短い話ですが・・・ 苦笑

タイトルはもちろんめだかちゃんセリフです。

リニューアルしてみました!

劉君目線ばかりじゃ 飽きちゃいそうだったので 苦笑

第9箱 「私のお家に来るが良いぞッ！」

凜ッ！

はぁ・・・

毎日毎日めだかちゃんに勝負を挑まれてて大変だなぁ・・・

って考えてる2歳児の劉一です・・・

頭脳戦では精神力を・・・

体力戦ではもちろん体力を・・・

本当に・・・疲れたなぁ・・・肩がこりそう・・・って、

本当に2歳児の言葉じゃないね。

とりあえず・・・

殆ど引き分けって言うのが中途半端なような気がするけど・・・

戦い終わった後のお礼を言うめだかちゃん的笑顔はほんとに可愛い  
なぁ・・・って感じてます。

これの究極版が後の真骨頂その？「ツンデレ」である……。

って言うのは後の話しです。

この1、2ヶ月は主に僕とめだかちゃんとの対決が殆どメインでした……

大変だったのは言うまでも無く……

ある程度それが落ち着いてきた頃、

(恒例行事にならなかったのが良かった……)

「今度の日曜日、家に遊びに来るが良いぞッ！」 凜ッ！

っと誘われた。

善吉は当然喜んでいて……

「うん！僕めだかちゃん家遊びに行きたいよ！」

大賛成だった。

「そっか〜 ええっと僕h「当然劉一も来るよなッ？」……うん。

言い切る前に……

もう参加は絶対事項みたいなんです。

僕と善吉君は………というか多分僕かな？絶対事項って言うのは……

「うむ！では明日はちょうど休みの日だ。迎えに行くから家で待機していてくれ！」

めだかは凄く嬉しそうに笑っていた。

（そんなに嬉しかったのかな？ねえ 善吉君？）

嬉しそうに歩いていくめだかを見ながら善吉に小声で話す。

（何言ってるのさ、りゅう君！りゅう君の事が好きだからに決まってるじゃん！）

っとキツパリ善吉は言い切った。

いつもニコニコ、思ってる事とハッキリ伝える善吉が小声になって話していた事は多少驚いたけど……

「えええ！まつさかー！僕毎日のように痛めつけられてるんだよ？」

つい大声になってしまった…… 苦笑

「む？何か言ったか？」

その声に気付き（当然だけど）めだかが振り向いた。

「いつ いや！なんでもないよ？なんでもないなんでもない……」  
手をぶんぶん振りながら答えた。

「??? まあ良い。ではまた明日な、2人とも。」

そう言い、めだかは迎えに来たリムジンに乗り込んだ。

明日は……アレに乗るのかな？

ん……緊張するね。乗った事無いし！ 苦笑

それはともかく……

「もー りゆう君！びっくりするじゃんか！突然あんなに大声出して……」

善吉はムスツツとした表情でこちらを見ている。

「ええ！だって善吉君が突然あんな事いうんだもん……」

「えー？りゆう君の事、めだかちゃんが好きだと思っよ？ 第一僕  
だってりゆう君の事だーい好きなんだし…… りゆう君は違うの  
……?」

善吉はちょっと辛そうにしながら聞いていた。

.....なるほど.....

そう言う好きね・・・

いけないいけない・・・

頭の中じゃ僕・・・歳が結構いつてるけど（100歳以上かな？  
？ 100年って言うってたし・・・苦笑）

今は2歳児なんだった・・・

「あっ・・・ゴメンゴメン！！ 僕も好きだよ！2人の事！！」  
慌てて肯定した。

「そっか！よかった！！ 驚かせないでよ りゅう君！ 明日は  
楽しみなんだから！」

善吉は直ぐに笑顔に戻った。

「めだかちゃんのお家はもの凄く大きいらしいよ！りゅう君！！で  
ね.....」

笑顔で更に会話は弾む。

瞳さんを待つ時間は。

「めだかちゃん家へ」の話題中心になった。

善吉は楽しみで楽しみで仕方ない！！といった様子だ。

まあ・・・

「あははは、僕も楽しみだよ！さすがにめだかちゃんの家でバトルをしたりとか・・・無いよね？それだけがちょっと不安なんだ・・・」

最後の方になると・・・

徐々に声のトーンが下がってゆく。

「えー！あんなに楽しそうに遊んでいるのに？」

善吉はキョトンって感じた。

あのような非現実なバトルを楽しんでいるんですか？善吉君。

身体能力のおかげで、めだかちゃんと渡り合っではいるけど、

ちよつとでも、「もういいや・・・」って思ったらめだかちゃんにくぎを刺されるんだよ？

常に全力で！！って・・・

流石に「遊び」の次元じゃないと思うんだな・・・僕はあ・・・



「・・・善吉君もいずれ分かると思うよ？ アレが楽しい事かどうかはね。」

そう未来予測のように言うと・・・

「そっか！何か楽しみだよ！！」

笑っていた。

そう・・・金色の髪に負けないほどにキラキラと・・・

あわよくば・・・

ずーっとこの笑顔でめだかちゃんと一緒に付き合ってもらいたいです・・・

もちろん僕ともね。

「う・・・うん！だいじょーぶ！すぐだよ！きっと・・・ね。」

・・・

僕がこの世界にいることによって、多少は原作と変わったりすると  
思うけど・・・

めだかちゃんに振り回される様子の善吉君の未来は何故か鮮明に見  
えた気がしたね・・・

そこには僕も混じってるかも・・・

とか何とか考えながら。

瞳さんが迎えに来てくれた為、

その日の幼稚園は終了した。

明日の事を楽しみにして。

もちろん！瞳おかめさん には了解を得てますよ！

子供の外出だから当然でしょう！

さて・・・ 明日はどうなるのかなあ・・・

楽しみだけど不安もあり・・・

五分五分って感じだった



第9箱 「私の家に来るが良いぞッ！」

凍ッ！（後書き）

ありがとうございました！

さて・・・次はめだかちゃんの家GO！  
スツゴいデカイ家へ・・・

どんな事が待ちうけているのかなあ・・・？

わかりません！！ 苦笑

ガンバリマス！

第10箱 「ゆ・・・夢の中まで？」 (前書き)

よろしくおねがいしますー!!

第10箱 「ゆ……夢の中まで？」

日付が変わり……

こっは、

【人吉家】

「ふあああ……もう……食べれない……よ……  
Z  
Z

「ちよっ……めだか……ちや……やりすぎ……  
Z  
Z

善吉・劉一それぞれ夢の中で楽しそう……

……??どっちは楽しそうというより……苦しうって感  
じがする。

夢の中にまで……入っているみたいなんだね……めだかち

やんは。 苦笑

劉一の夢 side

「よし！ もう一度勝負だ！！今日はジークンドーの指南を受けた！それを見てくれ！！」

めだかは構えだした。

「ええええ！！ またやるの？？つて さっきはムエタイだって言ったのに・・・ いったいどれだけ習ってるのさ・・・」

ちよつと疲れながら・・・驚きながら・・・そう答える。

夢も現実も変わらないな・・・苦笑

「ふふふ・・・ 見せてきたのはほんの一部だ！まだまだあるぞ？」

不敵に笑う・・・

「そんな事実・・・ 知らなきゃよかったかも・・・」

苦笑いしてしまうのは無理ないだろう・・・

「では・・・行くぞ！！」 凜ッ！

「へっつー!!」

めだかが構えだした為、劉一も慌てて臨戦態勢を取っていると・・・

「む・・・??」

めだかが急に後ろを見て止まっていた。

「???ん? どーしたの?めだかちゃん?」

勝負の寸前に止まってしまつという、らしくない行動にちよつと驚きながら聞くと・・・

「・・・ふむ。今日はここまでだな。では劉一!今日は楽しみにしておるぞ。善吉にもよろしくと伝えておいてくれ!」

そう言つと・・・

めだかは後ろを向いて歩き出し・・・視界から消えた。

「あれ・・・?消えちゃった・・・まあめだかちゃんだしそんなには驚かないけどね。」

笑いながらそう言つと・・・

「あははは そうだねえ。めだかちゃんだしねえ 僕もそう思つぜ。」



突然背後から声が聞えてきた。

「え？ あれ？ 君は？？」

驚きながら後ろを見ると……

女のコが立っていた。

歳は…… 同じくらいかなあ？

長い髪を靡かせながら立っていた。

それに風景がいつの間にか変わっていた。

これは……学校の教室……かな？

「やあやあ驚かせて悪いね。劉一君 君とめだかちゃんのバトル・もつと見ていたかったけど 僕も君に会いたかったんだ。だからそれに免じて驚かせたのは許してくれないかい？」

笑いながら……そう言った。

「許すも許さないも何も無いよ！別に後ろから声を掛けられたからって 僕は怒ったりしないしね。ええつと……君は僕の名前は知ってるみたいだけど。僕は君のこと知らない……名前はなんていうのかな？」

僕も・・・つられて笑いながら話す。

「あはははッ！悪い悪い！言ってなかったね。僕は安心院なじみっ  
て言うんだぜ。で、親しみを込めて君には安心院あんしんいんさんって呼んでほ  
しいな。」

「あんしんいんさん・・・ あはは！何するにも安心できそうだ。  
うん！わかったよ。安心院さん！よろしく。」

笑いながら手を差し出した。

「へえ・・・やっぱり君は変わってるね。」

さつきまで普通に笑顔だったのに 何故か目を細めだした。

「え・・・？どうしたの・・・？ 握手は嫌いなのかな？安心院さ  
ん。」

ちよつと驚きながらそう聞くと。

「いや、嫌いなわけじゃないぜ？ただ君は君の夢の中に知らないか  
わいい女のコがきて話しているって言うのに何も驚かないのかい？  
驚かせることが好きな僕にとってはちよつぴり傷つくんだぜ？」

「いや・・・そういわれてもね・・・ 確かにちよつとは驚いたけ  
ど・・・ 傷つくほどだったの？」

互いに苦笑しあっていた。

「で・・・ 僕に何かようがあるのかな？安心院さん？」

笑いながら聞く。

「ああ！話がちょっとそれちゃってたね。君に会いに来た理由はね。  
・・・」

笑うのをやめた安心院は真顔になり・・・

「僕と付き合ってくれないかい？」

つと一言！

・・・ええつと、

付き・・・合っ・・・？

・・・ま・・・まあ 僕は2歳児だ、

ここはわからない振りを・・・

「ん？ええつと・・・何に付き合ったらいいのかなあ？安心院さん。

「  
顔が引きつっちゃったよ・・・

「んー？君分かってて慌けていないかい？ また傷ついちゃうぜ？  
こう見えても僕は純粹ジュニアなんだ。」

ちよつとムスツとしながら答える。

このコはめだかちゃんと同じで嘘を見破ってしまつんだね・・・

「・・・あ・・・はははは・・・ごめんなさい・・・でも、付き合つて言つたつて・・・僕2歳児だよ・・・？ 早くないかな？」

今回は真面目に答える。

「ははっ 愛に年齢としなんて関係あるのかな？」

こりゃまた定番なセリフを・・・言っちゃうね。

「つてまあ とりあえず冗談はおいといて・・・ でもまあ 8割がたは本当だから覚えておいてくれよ。」

8割の冗談つて・・・なんだろう？

ほぼ本当つてことだね・・・ 苦笑

「君に興味が湧いたんだ。君はいつたい何なのかなつ？つてね。」  
笑いながら答える。

「なんなの？つて言われてもね・・・僕は劉一！今は人吉家にお世話になつてるから人吉劉一・・・かな？ それ以上は・・・ちよつとわかんないな・・・」

苦笑しながら答える。

「またまた 恍けちゃって・・僕はいろんな異常者も過負荷も見てきたけど 君ぐらいなんだぜ？ 僕のささやかなスキルの1つ輪廻タシス解析で解析れないなんてさ。」

・・・・・？

首をかしげていると・・・

「ははは。分からない振りはもういいよ？ 劉一君、君は良く分かっているはずだ、異常アフノーマルについても過負荷マイナスについても、君について根本的なことは解析わからないけど、大体の事は解析わかるんだぜ？ 恍けた振りっとかさ。」

なるほど・・・

やっぱり さすがは安心院さん、恍けたくらいじゃ誤魔化しできないんだね。

「はは・・・ うん 分かったよ。答えられる事には答えるよ。僕の出生や正体については・・唯の2歳児アフノーマル・・の異常者アフノーマルつて事で納得してくれないかな？ 僕はこの世界いまを楽しみたいんだ。あまり思い出したくも無いって事もあるんだ。」

苦笑しながらも 真剣に答えた。

「ふうん・・・ それは本当みたいだね・・・ だけど残念だ、君のこともつとよく知れたかったんだけどね。不思議だよ。君の事を解析みれば解析みるほど、わかんなくなっちゃうだよ・・・ まあいいや、今日は君と話せただけでも良かったからね。」

最初こそ難しそうな顔をしていたけど・・・ 最後には笑いながら言っていた。

「君とは又いつか直接会いに来るよ。その時付き合ってくれるかどうか、答えを聞かせてくれよ?」

笑いながら話す・・・

「2歳児にはまだまだ早い内容だと思っけど・・・とりあえずうん。考えておくよ安心院さん。」

苦笑・・・

「ははっ 僕は結構真剣なんだけどなあ・・・ まあ きっと会うことになるからその時改めて君に聞くとするよ。」

そう言っつと、教室の入り口のドアが勝手に開いた。

「そこから出れば夢から覚める、今日はめだかちゃんの家遊びに行くんだろ? まあさっきみたいなの繰り返すと思うけど、楽しんでおいでよ。劉一くん」

「いや・・・もうちょっとほかの事で楽しみたいんだけど・・・ バトルばっかじゃちょっとね・・・」

さすがにやれやれって感じだね。

「まあ そう言っつてやるなよ。 君ぐらいなものなんだ、めだかちゃん渡り合える同い年なんてさ、いや同い年に限らず君ぐらいな

んだぜ？」

安心院は座っていた机から立ち上がりながらそう答える。

「そうだとしてもね・・・さすがに毎日ね、疲れちゃうんだよ？  
安心院さん・・・」

首を左右に振りながら答えた。

「はははっ 君はさっきこの世界を楽しみたいッ って言ってたじ  
ゃん。 その疲れだつて楽しみの1つじゃないのかな？」

ううっ！そーかもしれないけどさ・・・

「はあ・・・ そうだね」

疲れながらも楽しんでいる事に気付かれてたんだ・・・

そりゃそうだ。安心院さんだもん・・・

「はははは！凶星だね。君も楽しんでるのにそれを隠そうとするな  
んでシャイなんだな？ めだかちゃんにちよつと妬げちゃうな。

まあいいや、そろそろいきなよ。寝坊しちゃうぜ。」

うう・・・引き止めたの安心院さんなのに・・・ まあ いいや・・・

「・・・うう じゃ、じゃあ！安心院さん！！また いつかッ！！」

恥ずかしくなった為慌てて教室を飛び出した。

.....

「あははは 思ってたよりウブなんだなあ 劉くんって・・・」  
1人残った安心院は笑っていた。

「今の時代はいい時代だ。球磨川くんにめだかちゃん。そして劉くん。いろんなサンプルと出会えてね・・・」

笑っている顔が・・・ちょっと不気味だ・・・

「大体めだかちゃんと球磨川くんは解析かるんだけど・・・ 劉くんだけが解析からないんだよな まあ 彼もきつと箱庭学園に来ると思うし、その時不知火くんも目をつけると思うから、その時ゆつくりと調べてみればいいや・・・」

そう言つと・・・

安心院も出入り口のほうへ向かった。

「次に会つのを楽しみにしてるからね？ 劉くん。」

そう微笑みながら・・・教室から出て行き、この空間が消えてなくなつた。





第10箱 「ゆ・・・夢の中まで？」 (後書き)

ありがとうございました！

第11箱 「これに乗るの初めてだよ・・・」(前書き)

よろしくお願ひします!..!

第11箱 「これに乗るの初めてだよ・・・」

時刻は午前6時・・・

「ふあああ・・・ むにゃむにゃ・・・ ん？夢か・・・変な夢  
だったなあ・・・」

確か・・・

めだかちゃんと夢の中までバトルをして・・・

その後・・・

「・・・？なんだっけ？誰かと話してたような・・・」

むむむつと腕を組みながら考えても分からない。

「夢ってそんなもんだよね・・・ めだかちゃんとのバトルは強烈  
だし、毎日のようにしてたから強く印象に残ったのかな・・・ あ  
んまりうれしくないけど・・・」

頭を掻きながら苦笑していると・・・

「むにゃ・・・ あ・・・りゅーくん・・・ おは・・・よう・・・

善吉も目が覚めたようだ。

「あつ！おはよう、善吉君。ゴメンね起こしちゃった？ まだ6時くらいでちよつと早いんだけど。」

謝りながらいうと、善吉は眠そうな顔をしながらも笑い。

「いいよお・・・ だって・・・今日はめだかちゃん家に遊びに行くんだもん・・・ 早く起きてないと・・・」

そう言うとき・・・ 必死に体を起こそうとする。

とりあえず手を貸してあげ、2人で洗面所で顔を洗う事にした。

「あらあら、本当に楽しみなのね。こんなに早くに起きるなんてぞ。」

瞳さんも起きており、いつもは起こさないと起きられない善吉まで起きていて少し驚いていた。

「だって～ めだかちゃんの家に行くの楽しみなんだもん！」

「あははは まあ 僕も楽しみですね！不安はありますが・・・」

2人でそう答えた。

「あははっ 劉くんの不安はわからないでもないけど、めだかちゃんとしっかりね？もちろん善吉くんもね」

笑いながら・・・そして朝食を済ませた。

暫くすると・・・

《ピンポーン》

呼び鈴が鳴った。

「あらあら？ 2人ともめだかちゃん来たかもよ？」

テレビの前で座っていた2人にそう言う・・・

一目散に飛び出したのが善吉だ。

「わぁーい!!」

そう言って玄関へ直行！

「善吉君 転ぶよ!!」

慌てて劉一も向かう。

「しっかりね！ ケガだけには注意して！ 行ってらっしゃーい!!」

瞳さんがそう言う。

「わかりました！いつてきます！」

善吉はもう先に行ってしまった為聞いていなかったが とりあえず、僕は止まって瞳さんに返事をかえした。

「む……遅いぞ？劉ー！善吉は直ぐに出てきたというのに。」

玄関を出ると……めだかがムスツツとした表情で立っていた。

「あはは……ゴメンゴメン。瞳さんにちゃんと遊びに行く事を伝えてたから遅れちゃった。」

軽く謝罪をすると直ぐにめだかは笑顔になった。

「ふむ……それならば仕方が無いな。よし！では揃った事だし行くぞ！」

そう言ってめだかは歩き出した。

あれ……？<sup>クルマ</sup>車来てないけど、歩いていくのかな？

「めだかちゃん、歩いて行くのかな？」

とりあえず聞いてみた。

仲良く散歩！見たいな感じでいやではなかったけど、善吉も楽しそ

うだしね。

でも・・・車で幼稚園に来るくらいだから・・・遠いんじゃないかな？

「心配なくていいぞ。もう見えてくる。」

???

何がでしょう？

「ここだ！」

そう言って指差した場所は、

広めの空き地。

いつもなら子供たちでサッカーをやったり野球をやったりと遊び場になっていただろう。

いつもならだけど・・・

なにやらデカイ・・・すっごくでかい・・・

へりが止まってる・・・

ええっ！マジですか???

「ええつと・・・まさかこれ？」



これって・・・所謂 軍用ヘリ？

なんでこんなのあるのさ？

「ふむ！今日はたくさん遊びたいからな！こちらの方が早く家につけるのだ！」 凜ッ！

なるほどね・・・

「わーい！ヘリコプターだ！！」

善吉君・・・

君が乗り込もうとしてるのは ソ連の軍用ヘリMi-24D・・・

ハインドDって呼ばれてるゴツイ ヘリなんだよ・・・？

って言ってもわかんないか・・・

「あ・・・はははは・・・ めだかちゃんの家には軍隊でもいるのかな？」

苦笑いしながら聞くのも仕方ないだろう・・・

「さすが劉一だな、軍用ヘリだと一目でわかったか。」

・・・

褒められても嬉しくないよ

そんなのでさあ・・・

それより軍事基地に直行するのかが心配なんだよ・・・

「ふむ、これは黒神家の私財で購入したものだ、家は日本で有数の財団らしいからな。」

なるほど・・・へえー ソ連から購入したんだ・・・ 通販？

なら民間用のへりでもよかったんじゃないかなあ・・・

なーんで軍用のへり？

んで 幼児の頼みで動かせてもらえるものなのかなあ・・・

遊びにいくの一言で？

親バカなのかなあ??

うん・・・もうツッコムのやめよう・・・

「うん、わかったよ・・・ んじゃあ今日はよろしくね?」

「ふむ!では 乗るがいい。」

「わあーい!わあーい!」

一目散にへりに向かう善吉君と苦笑しながら後に続く劉一君・・・

そして、凜ッ!と笑っているめだかちゃん・・・どうだ?つと言

わんばかりに。

3人はヘリコプターに乗り、黒神家へと向かった!!

いやはやへりに乗るなんてもちろん初めての経験ですから・・・

飛んでる時は ちよつと怖かったけどね？

善吉はずつとはしゃいでました

彼を見ているところちも楽しい雰囲気になる！

めだかちゃんも同様のようだった。

・・・でも、

へりの中で まさか着くまでにまたゲームをするとは思わなかった  
けどね・・・

暫く・・・

30分くらい？かな？

フライトすると・・・

なにやら開けた場所に着いた。

ぽつんと一軒だけあって・・・周りは柵みたいなので囲まれてるなあゝあの家・・・

ええっと・・・このへりの高度結構あるよ？

それなのにあの大きさって事は・・・

「ついたぞ！あそこが私の家だ！」

そう言っ指差した場所はもちろん先ほど僕が行っていた場所だ・・・

おお！へりポートまで！！

「わあー！大きいねえ！！鬼ごっこやかくれんぼなんて簡単に来そうだあ！！」

更にテンション向上！

「あはは・・・あんなとこでしたらいつまでも終わりそうに無いけどね？かくれんぼなんか特に・・・広すぎるから・・・」

苦笑。

でも・・・めだかなら捕まえれそうだね・・・

そうやってバカ話をやってる間に・・・

到着ならぬ着陸した。

「あはは・・・ここからさらに車で移動するんだ・・・」

着陸した感想はそこだった。

上から見たら屋敷らしき建物も見えたんだけど・・・

降りてみたら・・・

と・・・とおい・・・

「では・・・めだかお嬢様・・・そしてお友達の皆様も・・・」

執事っぽいだんでいーな おじさまが優雅にお辞儀をしながら車クルマの  
ドアを開けてくれた。

「うむ！」

その一言。

堂に入ってる？っていうのかなあ・・・

子供なのに違和感が無いよ・・・ 苦笑

「わーい！次はお車だー！！早くのろろー！りゅつくん！」

善吉君はやっぱりハイテンション！腕を引つ張ってきた。

「ははは！うん！行こう。めだかちゃんも！」

ぎゅっ……

空いたほうの手でめだかの手を握った。

柔らかな手だな……

この手があんなに強力なんて信じられないなあ……

「！！……あ ああ……／／」

めだかはなにやら顔を赤らめながら一緒に駆け出した。

そして3人は車クルマに乗り込み…… 屋敷へと向かった。

第11箱 「これに乗るの初めてだよ・・・」 (後書き)

めだかちゃんがりゆうくんに恋心をもってしまったかも・・・

さてどうしようかなあ・・・あんまり得意じゃないから・・・ 苦笑

では ありがとうございました！

第12箱 「わぁー！！！！・・・誰？」（前書き）

こちらも遅くなりましたが・・・  
ごめんなさい！

めだかボックスのじじ作品はたくさんあって・・・ 内容が似てい  
くかもです・・・ そこは申し訳ありません・・・  
幼少時エピソードは外せない場面とかあるので・・・ く〇らちや  
んとか動〇の話とか変体の話とか・・・ 苦笑

温かい目をお願いします・・・ ペコリ



第12箱 「わぁー！！！！！！誰？」

「・・・広すぎだと思っね・・・」

言葉にでちゃったよ・・・ 苦笑

暫くして屋敷が見えてきて・・・

「・・・」

「わぁー！おっきやつ！！ 僕のお家よりずーずーと！！」

善吉は凄く喜んでた。

・・・帰ってそう言うこと言わないでね？善吉君・・・

きつと瞳さんがっかりするから・・・

そう思わずにいられない劉一だった・・・

「ま・・・まあ それにしても・・・ほんとに大きいね」  
坪くらいい・・・？」  
500

んで敷地は山2、3個分くらい？

「大した事はないさ！無駄に広いだけだ！」

そうは言ってもねえ・・・

めだかは胸を張ってそう言った。

家の前で車を止め・・・

「では、お嬢様、お友達の皆様もどうぞ・・・」

ドアを開けてくれた。

出てみると・・・

「「「「めだかお嬢様！お帰りなさいませ！ お友達の皆様も！いらっしゃいませ！」「「「「

・・・

これは・・・メイドと言うヤツかな？

TVの中でしか見たこと無いけど・・・

「わぁ！」

さすがに善吉も驚いたようだ。

結構な人数で音量で・・・ハモったしね。

「ええつと・・・メイドさん・・・かな？めだかちゃん？」

確認するように聞いたら・・・

「うむ！家で雇っておる家政婦さん達だ！いつも世話になっておる  
！」

ハッキリ答えてくれた。

実在するんだね

こんなお家・・・

「とりあえず！家に入るがいい！私の部屋で遊ぼう！」

そう言つてめだかは家のでかい！おおきい！扉に手をかけた。

「お城みたいだね？りゅうくん！すごいや！！！」

「うん。こんなお家実在したんだねえ・・・」

めだかちゃんが扉を開けてくれたその時！

「やあやあ！愛しのめだかちゃん！！おかえり！！！！！」

ダイビングヘッド！！！！

誰??? って思うまもなく・・・

「ふんッ!!!」

ドカンッ!!

めだかちゃんの右フックが直撃!!

アレ痛いんだよなあ・・・

って思ってたら・・・

僕の方に飛んできた。

って!

「えええ!!!」「わあああ!!!」

ドッガラッ! ガッシャーン!

纏れ合いながら倒れる・・・

とりあえず・・・

突然登場してきた誰かを受け止めたまでは良かったんだけど・・・

さすがはめだかちゃんのパンチ！

受け止めきれず・・・受け止めたまま倒れちゃった。

「！！・・・」

・・・？

めだかちゃん？それってセリフなの？

怒りのボルテージが上がっていくようなセリフ？を発しながら、こちらを睨みつけていた。

「・・・ううう」

善吉は圧倒されてさっきまでのテンションが失せ萎縮してる・・・

当然かな？

「ええつと・・・めだ・・・かちゃん？」

恐る恐る声を掛けるけど・・・

おさまる気配なし。

「ああ！！めだかちゃん！僕が君とは違う人を抱きしめてるのに嫉妬してるんだね？かわいいなあ！！もう！大丈夫！僕が愛しているのは君だ ドカーンッ！ げふうー！！！」

黒神ローリングソバット炸裂！！

メキヨ！！！！

屋敷にめり込んじゃった……

「行くぞ！！！」

「う……うん……」

「めだかちゃん怖い……」

何事も無かったように めだかは奥へと……

執事さんや家政婦さん達は微笑んでるだけ……

これって恒例行事？なの？

驚きながらも……

まるで迷路のような屋敷の中を案内されめだかちゃんの部屋へと向かった。

あの人だいじょうぶかなあ……

案内の途中……ちらちら後ろを見ていたのに気がついたのか

「どうかしたか？」

めだかが足を止め聞いてきた。

「い．．．いや あの人大丈夫かなってさ。」

嘘じゃないよ？

だって 家にめり込んでたもん。

心配するじゃん普通。

「心配するな！」

あれ．．．？

「いつもの事だ。」

「いつもなんだ．．． あの人は何？」

とりあえず．．．いつもの事というのは置いて．．．

いいのかな？

「ああ、変態あれはお兄様だ。毎日毎日抱きついてきそうなのでな、あ  
あでもないと言わないんだ。」

さも当然のように言い切るめだかちゃん。

「へえ……お兄さんなんだ…… 変わってるって言っかなんと  
言うか……」

「めだかちゃんのお兄ちゃんか」 なら 大丈夫だね！」

横で聞いていた善吉は笑顔になった。

何がなら大丈夫なんだろう？

まあ……いいや。

「うむ 私もほとほと困っておるのだ。」

めだかは笑っていた。

（本当にいつもの通りなんだね……）

その様子に苦笑いするしかなかった。





第13箱 「なんかよくわかんねーが、不幸へいいもの《もってんだな?》」(前)

よろしく願います!..

第13箱 「なんかよくわかんねーが、不幸へいいもの《もってんだな?》」

さあー トランプ勝負だあー・・・

「よし!では もう一度だ!!--」

「うん・・・」

さて 時を少しさかのぼろう・・・

・・・  
・・・  
・・・

めだかちゃんのひろーいお家のひろーいお部屋でとりあえず、善吉が「トランプしたーい」といったので、

始まりましたのはトランプ対決。

もちろん、めだかちゃんは僕を標的にした・・・

「うづう・・・ 2人とも強すぎだよう・・・」

負けてばかりの善吉は涙目になっていたが・・・

めだかは相変わらず・・・

「流石 劉一だ！」

の一言。

ちょっと休憩したいなあ・・・

「あ・・・めだかちゃん！！僕トイレ行きたいんだけど！！」

苦し紛れっぽかったけど・・・

「む・・・？ 仕方あるまい、ならば一時休戦だ。」

とりあえず 見逃してくれた 苦笑

「ありがとー！じゃあ 行ってくるね？」

「うむ。ところで、《ボタンツ》・・・」

行ってしまった。

「劉一はトイレの場所はわかっておるのか？ まあ あ奴なら 大丈夫だろう！」

「めだかちゃん！僕と勝負！！」

善吉がそう言った。

「よし！かかってくるがいい！善吉、私は誰からの挑戦もつける！」

凜ッ！

劉一がいなくなった為、

めだか VS 善吉

カードバトル大会がスタートした。

「困った・・・ トイレの場所はわかったけど・・・ 広すぎだよ、この家・・・ どこだったっけ？めだかちゃんの部屋・・・」

とぼとぼ歩いているのは劉一くん。

どうやら道？に迷ったようだ。

そこまで広いのね・・・ココ。

「うう・・・ん とりあえず、こういう迷路に迷ったときは左手法で・・・ ちょっと効率悪いか。 はぁ・・・しかたない 片っ端から部屋をあけていこう！もし 家の人に会えれば事情を話して案内してもらえばいいんだし！」

よし！空元気だぁ！！

はぁ・・・

一部屋一部屋開けては訪ね開けては訪ね・・・

中々人の気配がしないな・・・

「家は広いんだけど・・・あんまり人がいないんだね・・・」  
「どうしようか・・・このまま見つからなかったら・・・」

そう僕は心配していた・・・

「めだかちゃんに怒られそうだ・・・」「遅いぞ!!どれだけ勝負を待たせる!!」「つとか言ってる・・・」

そうそつちをね・・・

帰るのは時間がかかっても構わないけど、めだかちゃんはそうもいかないからなあ・・・

勝負数を倍にする!ツとかいいそうだ・・・

ゾワッ・・・

「それはきつい・・・早くしよう・・・」

劉一は歩く速度を上げた。

そして調べに調べぬいた15部屋目!!

多ッ!

ってツッコムのはやめます・・・

何やら・・・薄気味悪い部屋だった・・・

異常に暗くて・・・そして　あたりは本で埋め尽くされてて・・・  
人の気配はする・・・

呻き声みたいな感じが不気味だけど。

「あー・・・すみませーん・・・」

恐る恐る奥へと入っていった。

声が・・・する方へと向かって。

そこには机があり、そのみが明るくなっていた。

机もちろん本で埋め尽くされてるかのように積み上げられ、

そこで勉強をしている人がいた。

勉強っていつかどうかわからない・・・

自分自身を鎖で縛り上げていた・・・

「あ・・・あー」

声を掛けたその時、

「くそっ！！恵まれた生まれ！恵まれた養子！恵まれた才能！恵まれた環境！どれもこれもクソ喰らえだ！」

そう言いまわりの本・文具を辺りに投げつける！

「もっと！もっと！！不幸を！地獄を！！もっと！！！！」

狂ったかのように叫び続ける・・・

その所為か、頭上から降ってくる物に気がつかなかった・・・

「あ！危ない！！」

咄嗟に劉一は彼女を押し倒し庇う。

ドガア！！バサバサバサ・・・

降ってきた物、それは重量感がたっぷりとある百貨辞典のような本数冊だった。

とりあえず本棚そのものが倒れてこない事には喜んでおこつ・・・

「あたた・・・だ・・・だいじょーぶ？」



緊急事態とはいっても女の口を押し倒している事には変わらないから、

ちよつと悪そうに言った。

「！！誰だ？お前・・・？」

女の口は驚きながらこっちを見た。

「あ！ゴメンね？押し倒しちゃつて、すぐに退くから・・・」

そう言つと、体を起こし彼女を引つ張りあげた。

「ふう・・・改めて大丈夫だった？君・・・」

心配そうに言つと・・・

「勝手な事しやがつて・・・ ほつといてくれればよかつたんだ！私ほもつともつと地獄を見なきゃならねえんだ！こんなもんなんでもねえ！」

そう言つて、机に戻つた。

「・・・君はなんでそんなに自分を追い込んでいるの？」

劉一は助けた事を罵倒された理由より、そつちを聞いてみたかつたみたいだ。

「・・・幸せ者テメーみたいな奴に言つても理解されないかもしれねえがな、素晴らしいものつてやつは地獄からしか生まれないんだ！それ

は歴史が証明してる！こんな恵まれた人生じゃ私は駄目になるんだよ！だからだ！」

歴史上の多くの天才達は不遇を送っていて偉大な発見は大抵劣等感から生まれている。

それは間違いないのかもしれない・・・

「なるほど・・・確かにそうかもしれないね・・・」

しっかりと彼女を見つめながらそう言った。

「はっ！わかんのか？ ならもうジャマするんじゃないねえ！」

そう言い机に向かった。

「でもね・・・それは少し違うと思うんだ。机に向かったままの姿勢でいいから 僕の独り言聞いてくれるかな？」

机に向かったままの彼女に言う。

「確かに・・・偉大な発明や発見は・・・そう言う劣等感からとか、不幸とかから生まれてきているのかもしれないね・・・だけどね。それは糧であって、最終的には努力が実を結ぶんだと思う・・・そこは地獄だとか幸福だとか関係ないと思う。だって・・・この世にはたくさんの方が劣等感や不幸を背負ってるんだから・・・君の言い方だったら・・・この世に天才が沢山生まれちゃうと思うよ？それだけでひどくくりしちゃうたらさ。」

そう続けていくと・・・

彼女の指が止まっていた。

「どんな不幸からも這い上がれる努力、どんな幸福な人生を送っていたって、それに満足せず・・・慢心せず・・・努力を積み重ねる事・・・それがすべてに繋がるんじゃないかな？」

そして彼女がこっちを見た。

「てめーの言葉・・・口だけじゃねえな・・・なんかわかんねえが真いいものに来る感じだ。不幸いいものを持ってんだな？」

彼女は初めて笑った。

それと羨ましそうな目をしていたなあ・・・

「ふふ・・・そうだね・・・僕も不幸を持つてる・・・でもね、救われたんだ。そこから、だから生きていられるし、毎日楽しいことストイックでいっぱいだよ。禁欲な君にとっては要らない物ストイックって思っただけだ。」

そう言っ上を向いた。

「んで？なんで私と話してんだ？なんで私に構うんだ？お前は、自分の主張を聞いてもらえる奴いいものがないのか？」

救われたといってもまだ不幸いいものもってる感じがするためか 笑いながら話していた。

「そんなこと無いさ、僕はめだかちゃんと遊んでいたんだけど、ト

イレに行つてたら帰りがわからなくなつて……でココについたつて感じたよ。君に話したのは唯のおせっかひさ。(僕……記憶力いいと思つてたけど……そうでもなかつたんだね……苦笑)「劉一も笑いながら話した。」

「妹と……? ああ んじゃ お前が劉一って奴か? 毎日のように妹がめだかいつてた奴だな。」

「何を言つてたかは……聞かないけど……劉一であつてるよ。よろしくね。君のはめだかちゃんのお姉さんなんだね。名前は?」

今度は苦笑しながら話していた。

(あの化け物じみた妹めだかの上に行く男だったな……確か、ちよつとばかり興味が湧くな……)

「???」

なにやらじつくり見られているけどなんだろう?

「私はくじらだ。 お前がおせっかひなのはわかつたが、そのついでに、私を説得でもしよーってか? 生憎幸せになるくらいなら死んだ方がマシツつて考えだからな、それは無駄だぜ!」

そう言い手を振つた。

「いいや、説得するつもりなんて無いよ。」

「そうか、なら良かった。」

そう言つて再び机に向いた。

「でもね・・・死んじゃあだめだよ。それこそ何も生まないし何も残らない・・・残るのは残された者に残る悲しみだけ・・・この世には生きてかつたのに生きられなかつた人がたくさんいるんだ・・・自分からそれを絶つような事はしちゃだめだよ・・・でも・・・僕がいつても説得力ないかな・・・僕は・・・んだんだし・・・」

隣に立つ。最後の方は聞えないほど・・・声が小さかつた。

「はっ！余計なお世話だ！」

そう言い唯ひたすら勉強を続けていた。

「あ！これ・・・確かジユグラ―定理だね？」

一枚の紙を取つた。

「ああそうだ、数学界での難問だよ最大のな。」

こちらを向かず唯淡々と説明をした。

しかし、くじらがこんなに話す相手なんて兄妹でもいなかったのに・・・

（なんだろうな、こいつと話していると不思議と楽になんだわ。不幸いいものをもつてる奴と話しているからか？わかんねえな・・・）

自分の変化を自分自身で観察していたら、

横にいる男が何やら呟いていた。

「……定理から、「 $n > q > 2n$ 」となるような素数  $q$  が存在する……つまり任意の自然数  $n$  について  $n$  より大きく  $2n$  より小さな素数が必ず存在する ことが証明されており、 $x$  は必ず存在することになる。よってこのような数の組は存在しない……か……」

そう言い紙に纏めていった。

「ふう…… まあこんなところかな？」

解いた紙を机の上に置き、

ぐっと背伸びをして、更に欠伸を1つ！

「さつきから何をつぶやいてたんだ？」

くじらが不思議に聞いていた。

「いや！何でもないよ。たd「劉ーイイ！……」」

ビクッ……

恐る恐る振り返ってみると……

後ろに立っていたのは阿修羅のようなめだかだった…… (汗ッ

！)

「え……っと どうしたの??」

「……………まっけたのに……」

???

顔を俯かせて何やらプルプル震えている。

「ずっと待っておったのだ!!!いつまでたっても戻ってこないのはなぜだ!!!」

泣き顔のように抱きついてきた!

抱きつくというか……壁に押さえつけられてる?

「……………めっ!!!」  
「……………すぎてる……迷ってたんだよ……」

苦しい……

「なら何故!くじ姉と仲良く遊んでおるのだ!? 今日私は私と遊ぶ約束であるっ!!!」

更にヒートアップ!!!

「いたたたた!!! くじらさん!!!何とか言っつてよお!!!」

くじらにヘルプを求めただけど……

「いついつ・・・ 最難間の定理をこんなに速く・・・ ブツブツブツ・・・」

何やら呟いていて全く弁護してくれない・・・

「さあ！...どついつわけだ！...?」

めだかちゃんの力が更に入る！

「わあー！...ごめんごめん！」

とりあえず謝り倒した。

といつより・・・いつもより力強くないかな・・・?

骨がミシミシいつてるよー・・・



第13箱 「なんかよくわかんねーが、不幸へいいもの《もってんだな?》」(後

めだかちゃんの リユウイチくんに対する執念は凄いですねえ)

苦笑

善吉君はまだ小さい(みんなもだけど)から嫉妬なんてしないと  
思  
うけど・・・どうだろう・・・

では!ありがとうございました!!

第14箱 「妹とのふれあいだ……」 (前書き)

よろしくおねがいますー！

第14箱 「妹とのふれあいだ……」

暫く、めだかと壁のサンドイッチ地獄を受けていた劉一は……

「うう……痛かったなあ……」

つと呟いていた。

やっと、めだかちゃんは放してくれたのだった。

謝ったのが良かったのか気が晴れたのかはわかんないけど……

「……………」

まだ怒ってる……

「め……めだかちゃん！本当にゴメンね！？くじらさんとは道案内をしてもらおうと話していたわけで、遊んでいたわけじゃないんだ！！ お詫びに何かしてあげるからさっ！！」

必死に自分自身を弁護！！そして お詫びをすると約束！

嘘はついてないよ？

そんなせこい大人じゃなく純粹な子供なんだから！！

お詫びといえは・・・めだかちゃんのことだから多分勝負関係かな  
あ・・・???

って思ってたら、

「むう・・・よし・・・なら詫びに・・・」

顔をグングン近づけてくる・・・

「えっ?」

目を見開いた!

めだかちゃんの顔がどんどん近付いてくるんだもん・・・

で、あわてて顔を手で抑える。

「む?なんだ?この手は?」

「いやいや!こっちのセリフ!!何しようとしてるの?顔を近づけてきてさ!!--」

息が合ったツッコミあいだなあ・・・

「詫びをするといったらう? それをしてもらってるだけだ!」

普通に答えるめだかちゃん。

「ええっと・・・お詫びって?何をしようとしてるの?」

力がどんどん入ってるめだかの顔を頑張って抑える・・・

「キスだ。」

!!!!!!!!???????

「キ・・・キス??」

「そつだ！知らないのか？唇と唇を合わせる行為だ、」

しれッと答える。

「いついや！知ってるけどさ！！ちよつとまって！！」

とりあえず隙を見てバツクステップ！

「む？何故逃げる？詫びをしてくれるのではなかったのか？それとも・・・私の・・・ことが嫌いなのか・・・？」

最後の方は・・・声が・・・ウル目が・・・

真骨頂？が来たよ・・・

「いやっ！そうじゃなくって・・・めだかちゃんのこととはもちろん好きだよ！でも・・・キスって本当に好きな人同士が・・・恋人同士がすることなんだよ？ちよつと僕らには早いよ！」

慌てて涙目のめだかを慰めつつ、行為を思いとどませようとした。

「私は劉一のことを好きだよ！大好きだ！！！」

しれっと・・・告白だね・・・いやいや・・・

「う・・・うれしいよ。それは」

そう言つと顔を輝かせて、

「ならば問題あるまい！！！」

再び顔を近づけようとする。

「めだかちゃん・・・」

劉一はふう・・・つと落ち着いた顔で話す。

「！！！！／／／（今の顔・・・何やらカッコいいな・・・）な・・・なんだ？」

「もし・・・大人になって・・・そうだね。中学・・・いや高校生くらいになってもその気持ちが変わらなくて・・・僕も君の事を好きでいたら・・・その時にしない？今は体も心も成長段階だから・・・これは嫌だからとか嫌いだからじゃなくて・・・めだかちゃんを思つてのことだから・・・ダメかな？」

最後に微笑む。

「つゝゝゝ！／＼／」

めだかは顔を真っ赤にしていた。

ボンツ！

つて擬音をつけたいなあ・・・

「めだかちゃん！！大丈夫！！」

つて駆けつけようとしたら...

「おお！めだかちゃん！大丈夫かい？？顔が赤いよ！僕が看病してあげよう！！」

どこからとも無くやってきたのは・・・

めだかの兄・・・

「あ！」

名前知らないや・・・！

そして 兄がめだかに抱きつこうとした瞬間！

「ふんツ！！！！」

一瞬で正気を取り戻したためだかの右ストレート！！

ドスン！！

腹部にヒット！！

「げふー！！」

体が・・・くの字に！！

続けて・・・

黒神 ローリング・ソバット！！

ドガアア！！

「ぎゃああー！！」

「じじじ・・・痛そう・・・」

さっきの僕の比じゃないや・・・

って思ってたら・・・

ガッシャアアン！！

吹き飛んで窓を突き破って落ちていった・・・



って！

「ええええええー！ちよっ、めだかつー！！めだかちゃん！ちよつとー！やりすぎだよー！！」

慌てて身を乗り出して兄を確認したら・・・

「ああ・・・妹<sup>めだか</sup>ちゃんとの触れ合い・・・」

昇天はしてたんだけど・・・何やら満足そうだ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええつとお・・・」

「お兄様はいつもああだ、気にしても仕方あるまい。」  
所謂変態という奴ね・・・

「あははは・・・うん　そうするよ・・・」

そう言っって苦笑した。

「劉ー！」

めだかちゃんがこちらを見る。

「ん？」

「約束だぞ！高校生になったらだな？私は忘れないからな！」

そう言いきった。

「……うん！約束だね。」

好意を……こんなにもってくれるのは……かなり久しぶりのよ  
うな気がする……

自然と笑顔になり、指切りをした。

でも……めだかちゃんって確か人間みんな好き！っていうんじゃない  
なかったっけ……？

まあ……いつか！めだかちゃんはそうでなくっちゃね

その後……

すーっかり忘れられていた善吉はというと……

「2人とも酷いやつ！！僕をほうっておいて！！」

涙目になり……そして怒っていた！

「じっ！ごめんごめん！！」

それで……

めだかちゃんに続き、善吉君までフォローを入れる羽目になったんだ。

つ……つかれたなあ……

第14箱 「妹とのふれあいだ……」 (後書き)

ありがとうございましたー!!

第15箱 「わあ〜い！お出かけお出かけ」 (前書き)

よろしく願いします〜!!

この幼少期のエピソードはどうしても入れたかったの・・・苦笑  
他のにじ小説作品とかぶるかもかもしれません・・・ 展開が・・・

不快に感じてしまったら・・・

ごめんなさい・・・

では！

第15箱 「わぁ〜い！お出かけお出かけ」

【人吉家】

今日は日曜日。

昨日はめだかちゃんの家に行って遊んで大分疲れ・・・もとい楽しかったため、

今日は家でのんびり過ごそうと考えていた自分がいました！

病院ももちろん休みだからね。

でも……………

起きたら……………そこは……………不思議な場所でした……………（千と〇

〇の神〇し??違うか……………苦笑）

「ええつと……………なんで僕……………車に乗ってるのかな？」

目を覚ますとそこは車の中……………

布団から上半身を起こすと、

めだか、くじら、????兄がいた……………

「やっと起きたか！劉一！……」

「けっ！起きるのがおせーよ！」

「妹2人と・・・あああ 幸せ・・・・・・・・」

それぞれご挨拶・・・

いやっ 1人は違う世界に行っちゃってしまいそうだね・・・

「あつ そつか！なるほど！！これは夢なんだね？ やー よく出来た夢だね！ そうだよ 昨日あんなにインパクトあったんだから、こんな夢見たってしかたないや！」

そう言っつて布団をかぶる！

「さっ 今日日は曜日だし！ もうちょっと寝よう・・・・・・・・zzz」

あっという間に布団にもぐりこみ・・・ 睡眠に・・・

「「起きろ！！」」

入れなかった・・・ 苦笑

「ふえ！？」

ベッドからたたき出される・・・

「夢などではないぞ！劉一！今日は一緒にお出かけだ！その為人吉家に向かったのだが、瞳先生がまだ寝ていると聞いていたので、こうして布団ごと車に乗せたのだ！」

肩を掴まれて頭を振らせながら経緯を教えてくれた・・・

「そうだぜ？それにこんな可愛い美少女に囲まれて起きただけでいいもんだろ？男として。」

そこに入ってくるのはくじらさん・・・

「・・・・・・・・これ・・・夢？じゃ」「じゃない！」「」

キーンキーン・・・

耳の痛みで確信した・・・

「ええええ！！ 布団ごとって・・・いつからそんなに強引になったの?? あ・・・最初からか・・・」

頭をかきながらそう言う・・・

「わかってんなら言うんじゃないよ!!」

くじらさん・・・大分丸くなってるような・・・

あんな事言ってたのに・・・

「あ・・・そういえば善吉君は??」

そう言うのと・・・

「僕はここだよ!!」



声が聞えた先に・・・善吉がいた。

美味しそうにジュースとお菓子を食べてて・・・

「おっでっかけ おっでっかけ」

かなりご機嫌でした

「ははは・・・」

なんでこの状況でそんな笑顔なのさ・・・

まあ ところが善吉君・・・かな？

「さあ！さっさと起きろ！！」

めだかちゃんがグイッと引っ張りあげる。

「目覚めのキスでもしねーとおきられねーのか？」

くじらも笑いながら言う・・・

何か怖い・・・

獲物を狙う肉食獣みたいだ・・・

「なっ！何イ！！ 目覚めのキス！！！！！！！！！！」  
（その手があったか！合法的に自然に・・・キスが出来る！！！！）

その言葉に反応したのはめだか&くじら兄！

「えっ？えっ？？」

混乱中です・・・

突然のことなので・・・

んで、まず????兄さんが・・・真っ先に行動をしていた・・・

「さあ！！僕も寝るから！！それで起こしてくれたまえ！！愛しの妹達よ！！！」

そう言っつて布団に潜り込もつとした兄を・・・

「ふんッ！！！」

バシンッ！

めだか 右ストレート！

「グフッ！！！」

ベッドに吹き飛ばす！！

「オラア！！！」

ドカンッ！

くじら エルボー・ドロップ！

「ぐええええ！」

串刺しに!!

つて!!

「いたああ!!!!!!」

僕の上で………

「あつ……悪い。劉一。」

「ふむ、すっかりしてたな。劉一すまなかった……」

とりあえず僕には謝罪を……でも……

兄には何もなし!

「いたたあ……… 僕よりなんか かわいそうだね……」

お兄さん……」

同情の目で見ていた……

「きゅっ……」

目を回して気絶してるお兄さん……

でも、

「お兄さんが悪いと思うな。やっぱり。」

過剰な愛だからね・・・

こんなドンパチがあったというのに、

「おいし〜」

善吉君はまだ幸せそうに お菓子を頬張っていた・・・

それで・・・

「では目覚めのキスだ！」

今度はめだかちゃん・・・

「ふえ!!！」

ビックリ!!

似た者兄妹か・・・

「おいおい！提案したのは私だけ？姉に譲るのが普通だろ！」

「いえ！これは譲れません！くじ姉!!！」

くじら VS めだか のにらみ合い・・・

このままじゃ・・・

「あー！ー！ー！目が覚ー！ーめたっ！ー さっ！起きたよー！ー！ー」

わざとらしく大きな声で言いながら体をベッドから起こした！

まあ・・・

2人とも露骨にいやな顔をしていたのは言うまでも無いだろう・・・

(怖かったよ・・・)

さてさて・・・

色々ありましたが、

目的地を改めて聞くと【動物園】だそうでした。

あ！それと、吹き飛ばしたお兄さんの名前知らなかったので、

2人に聞いてみると、  
黒神くろがみ 真黒まぐろさん だそうです。

はあ・・・ めだかちゃんにくじらさん・・・ そしてまぐるさん・・・

魚のお名前だね・・・？

まあ つつこまないつつこまない・・・

それはそうと・・・

動物園には無事着きました。

「さあ！愛でるぞ！動物たちを！！」

めだかちゃんは一目散に飛び出し、

「僕も！！」

善吉もそれに続いた。

「けっ・・・ガキかよあいつらは・・・」

とか何とか言いながらも、くじらも後に続く・・・

「あははは・・・皆楽しそうだね！」

そう言い、後に続こうとしたら・・・

「あ！ちよつと待って！」

まぐるさんが呼び止めた。

「ん？？何ですか？」

「君に一言お礼が言いたくてね。」

???

お礼？

僕に？

「ええつと……何をでしょうか？」

正直……子の人には何もしてないし……ぶっ飛ばされた場面<sup>シーン</sup>が殆どだからね……

……それもまたすごいと思うけど、この人の生命力というか凶太さというか……いい加減あきらめないのかぁ……

「……何か失礼な事考えてないかい？君……」

引きつった笑いを浮かべながらまぐるさんが答えた……

この兄妹は皆読心術をマスターしているのかな！？って思っちゃいました。

「いえいえ！なんでもありませんよ！それよりお礼って何がです？」

慌てて否定し、聞き返す。

「妹たちの事さ、めだかちゃんね、病院に行く前は本当に笑顔が無かったんだ、色々あってね。病院で君にあってなかったらこんな可愛い笑顔の妹に会えなかったって思うほどだよ？それとくじらちゃんも、君と会ってから少しだけ……部屋から出て

くれるようになったし、食事も僕たちと話をするのもしてくれようになったんだ・・・僕の愛しい大切な2人の妹を救ってくれてありがとね！」

「いつ　いえ！そんな大したことでませんよ僕！」

真剣な顔だし・・・優しそうな顔だ・・・

これで変態じゃなかったら本当にいい兄だと思っただけど・・・ねえ・・・

「・・・」

また顔が引きつっている・・・

「あつと　くじらさんはともかく、めだかちゃんにきっかけをあげたのは僕じゃなくて善吉君ですよー！」

またばれてると思い、急ぎ目で話題を変えた。

「え？」

「善吉君が言った一言で彼女は変わったんだと思います、実際僕も、善吉君のお陰で今がありますから！」

笑顔でそう言う、

嘘じゃない・・・

それほどにまで、彼には救われたんだから・・・



「そっか、うん 善吉君にも伝えるところよ」

「そう言い・・・」

「よし！僕たちもそろそろ行くわー！」

動物園へと向かい、入っていった。

第15箱 「わあ〜い！お出かけお出かけ」 (後書き)

ありがとうございました！

第16箱 「元気出してめだかちゃん!・・・痛い・・・」(前書き)

よろしく願います!..!

第16箱 「元気出してめだかちゃん!・・・痛い・・・」

「ううう・・・グスッ・・・」

誰かが泣いている・・・

そして、程なくして・・・

動物園の異常性に気付きました!

なんていったって・・・

「動物いない・・・」

そう!動物園!という名前の施設の癖に動物がまーったくないのだ!  
だ!

ナマケモノでさえ見当たらない・・・

「何?これ・・・?ここって動物園だよね?まぐるさん?」

「う・・・うん、入り口にはZOOって書いてあったし、間違いないと思うよ?」

しかし・・・

これはまたどういうわけか・・・

大災害が起きる前の予兆かな??

「原因はアイツだ。」

ぐじらさんがこっちにきて 指を刺した。

さした先には・・・

めだかちゃんが泣いていて、それを善吉君が慰めているという状況だ!!

ええ・・・

「どうしたの??めだかちゃん!!」

めだかがこっちを振り向くと 抱きついてきた。

「りゅうちゅー!!!!どう どうぶつがあゝ!!!!どうぶつがあああ!!!!」

ポロポロ泣いていた・・・

めだかちゃんがこんなに泣くなんて・・・

「これは・・・どういうことだい?」

「全く動物が出てきてくれなくて泣いてるみたいだ。 さてなあ・・・  
アイツの圧倒的な威圧感のせいってゆーか、単なる偶然か、まっ

後者はありえねーから前者だな。動物は強いモンには服従するしかねえから。しかし まあ・・・異常だからな・・・興味深いぜ？・・・フッフ・・・」

「くじらちゃん・・・」

あの変態まぐる引いてるほどの・・・表情かおだったのだろう・・・苦笑

「うっ・・・なんで出てきてくれない・・・」

泣き止みはしたんだけど・・・まだショックのようだ。

「めだかちゃん・・・」

善吉も動物がいないことより、めだかちゃんが悲しそうな顔をしているほうが辛いようだ・・・

異常な子供といっても、やっぱり子供だ。

本人からしたら動物に完全に無視されているようなものだからね・・・

「さあおいで！めだかちゃん！僕が抱きしめ 慰めてあげよう！」

そこへやってきたのは、まあ大体わかると思いますが、変態まぐるさん。

めだかちゃんは変態まぐるさんを見るや否や猛ダツシユ！

「おお！ついに妹と抱き合うことが！！」

変態まへうさんは大喜び!!

だけど・・・

めだかちゃんの勢いは止まらぬまま・・・そのままの勢いで・・・

めだか 真空跳び膝蹴り!!!

ドガン!!!

「ぎゃふう!!」

哀れ・・・

変態まへうさんは吹き飛ばされた。

その先には・・・

「くっ くじらちゃん!お兄ちゃんを抱きとめておくれ!!!」

くじらがスタンバイ。

「ふんっ!!!」

ズガン!!

「ふげっ!」

ネリチャギ・・・所謂、かかと落としがグッド・タイミングで決ま  
っちゃって・・・

そのまま変態まぐるさんは地面にめり込んでしまっていた。

「・・・・・・・・彼女達は武芸百般なのかな?? ねえ 善吉君・・・  
?」

「もうなれちゃったよ! まぐるさんもすごいや。」

さっきは全く元気の無かったためだかちゃんだが・・・ 活発に動い  
てくれて? 善吉は嬉しそうだ・・・

でも、ボコられているまぐるさんを見て喜ぶ善吉・・・

性格悪くないかな?

いやいや純粹に遊んでいると判断したんだろう・・・

そう思いたいなあ。

でも・・・

まずはめだかちゃんだね。

泣いてる姿をいつまでも見たくないし・・・

「うっ・・・うっ・・・」





「大丈夫……？落ち着いた？」

「う……う……」

ほんの数分間……

劉一はめだかを抱きしめていた。

くじらさんは流石に空気を読んで黙っていてくれた。

まぐろさんもだけど……

(視線が痛いよ……)

メンチビーム……光線！絶賛直撃中……苦笑

「う……うん……大丈夫……」

めだかはいつもどおりとはいかなくとも、涙と体の震えは止まっていた。

「今日はきつと、タイミングが悪かったんだよ。きつとね！」

笑顔でそう言う。

「ほ……本当……かな……」

まだ赤い瞳をこちらに向けながらめだかはそう言う。

「簡単に諦めるなんて……めだかちゃんらしくないじゃん！」

僕との勝負中・・・ 負けたらめだかちゃんそんなに落ち込んだか？・・・ 違うよね！ これまでか！！ って感じで何度もやってたよね。」

そう言うとき・・・ めだかの表情は徐々に明るくなっていく・・・

「うん！ 何度でもトライ！ それが・・・ めだかちゃんだよ。」

笑顔で・・・ 言った。

「劉・・・ 劉ーイイイ！！！」

めだかは感慨極まったのか、再び泣きながら・・・ 抱き返してくれた・・・

(うん・・・ たまにはこういうめだかちゃんも可愛いかもね・・・  
でも 泣き顔は見たくないかな？ やっぱり・・・ って・・・ あれ？)

・・・？？？

・・・う・・・

・・・う・・・

ミシリッ・・・

「い・・・ いたい・・・」

ミシミシいってるけど・・・？

「いたたたた！！！めだかちゃんちよつと！強すぎだよ！！いたいいたい！」

めだかは無意識に抱きついた為か、力のリミッターを外しているようだ……

んで、結構大きな声で泣いてる為、こちらの声は聞えてないみたい……

「いたぁーいーいー！」

ひええええっ！！と叫ぶ 劉くん。

「うわぁーいーん！！！」

感慨極まり、うれし泣きをするめだかちゃん。

暫く……サバ折りを喰らっていたのだった……

痛い…… 感動のお話じゃなかったんだね…… ぐすん……

まぐるさんとくじらさんに悲痛な視線を送り…… SOSをして……

何とか解放してくれた。

解放の際に…… まぐるさんから凄まじい殺気に襲われたのはいうまでも無かった……

で・・・

「めだかちゃん!!僕が!!」

って抱きつきにいったけど・・・

バキッ!!

一蹴・・・

哀れ・・・変態まぐろさん・・・

とりあえず・・・

今日は動物が見られなくみんな残念そうだったけど・・・

めだかちゃんが元気になってくれたのは良かったとほっとしている  
ようだ。

これが後でいう、スキル「動物避け」なのである・・・

でも、そのスキルより・・・まぐろさんの妹命の方が怖いかな・・・

あのさっき凄かったからさ・・・

劉くんは良く考えたら無理やり連れてこられて、慰めたのに 攻撃を喰らって・・・

ちよつと悲惨な1日に感じました・・・

本人はまんざらでもないようだけどね！

「うう・・・本当に疲れたんだよ・・・ からだ・・・イタイ・・・

」

第16箱 「元気出してめだかちゃん!・・・痛い・・・」(後書き)

ありがとうございました!

第17箱 「僕も・・・ 負けないよ！」（前書き）

よろしくお願いします・・・ 遅れちゃってすみませーん！！

はぁ・・・ 夜勤かぁ・・・ 苦笑

愚痴はおいといて・・・

駄文ですがどうぞ！！



第17箱 「僕も・・・ 負けないよ！」

動物園で色々あって・・・

何とかめだかちゃんは、元気になってくれたんだけど・・・

「うづう・・・ からだ・・・ イタイ・・・」

そう体中が・・・ 節々が・・・ メチャクチャいたいのだ・・・

「我慢しなさい。あのめだかちゃんにMAXパワーで抱きしめられたのにこの程度で済んでよかったわ。」

そう言っつて、介抱してくれているのは、瞳先生。

介抱っつていっつても、良く効く湿布を体中に貼っつてくれるだけだけどね・・・

「痛いものは痛いですよ... なんで加減してくれないんですかぁ・・・  
めだかちゃんは・・・」

つとウジウジ言っつてしまつのも無理ないと思ひマス！はい・・・

苦笑

常人（同い年）なら体中の骨が折れてても不思議じゃないからねえ  
）・・・

「ほーら！これで大丈夫！はいッ！」

最後の一枚を・・・

ペシンッ！

っと貼ってくれて・・・

「いたー！ーい！！！」

悲鳴が木霊していた・・・

「りゅうくん！大丈夫？」

そこへやってきたのは善吉、

心配そうにしながら顔を覗き込んできた。

「あ・・・はははは・・・大丈夫・・・じゃないかも・・・」

つと言いながらもVサインをする。

結構心配性な感じの善吉君に更に心配をかけたくなかったのかも知

れない……

「うーん……よかった、」

Vサインが功をなしたのか……

心配顔だった善吉の顔が明るくなった。

「明日の幼稚園は大丈夫??」

動物園に行っていたのが、土曜日!んで、今は日曜日!

休みでよかった……

「うん! 大丈夫だよ。休んじやったらめだかちゃんに何言われるかわかんないし……」

苦笑いしながらそう言い、再びVサインを!

善吉は更に嬉しそうな顔をする。

「そっか! あははは! そうだよね! めだかちゃん がっかりしちゃうからね」

笑いながら……そう言った。

「がっかり……だけじゃなくて 怒られそうだよ……」

はぁ……っとため息をしながら呟いた。

「……ほんとに大丈夫？りゅうくん……」

ため息を出しているのはしょっちゅうなんだけど……今日はちよっと心配モードになってるみたい……

「瞳先生が【良く効く瞳印のサロンパス】をはってくれてるし……  
（苦笑）明日にはきつとよくなってるんじゃないかな？ だから心配しないでね！……ね！」

ぐっと腕に力を入れる、

すると、善吉は……

「……うん！」

先ほどよりも明るい笑顔で頷いた。

んで……なにやら取り出し……

「りゅうくん！」

そう言ってそれを差し出した。

「ん??何……? トランプ？」

差し出されたのはトランプ。

プレゼント?…… なわけないか。

遊ぶんだね。

って思ってたけど、それも間違いでした。

「僕トランプ強くなりたい！ 教えて！」

そう言った・・・

「え？」

ちよつと戸惑ってしまった。

でも、翌々考えると当然なのかも知れない、

まだ小さいとは言っても、連敗に次ぐ連敗じゃあちよつと悔しいんだろう・・・

でも、トランプを強くする方法・・・

ん~~~~~。

僕の場合は、直感力とポーカーフェイス。後は定石やらなにやらだから・・・善吉君には厳しいかも・・・

今はこの姿だけど、僕・・・100歳超えてるんだよね・・・まあ精神年齢は10代後半くらいだと思っけど、

でも。折角の善吉君の頼みだし！

「いよっし！ 僕と練習をしよう！ 僕が考えてる事を教えるよ！」

そう言ってトランプ・ゲームを開始した。

.....  
.....  
.....

「ううう.....」

悔しそうにしている善吉君がいます・・・

「ほら！元気出して！きっとできるようになるよ！」

とりあえず、フォローは入れているけど・・・

って言うか・・・ 僕たちの年代の子に、確立やら記憶力やらを言  
つても そう易々とできるわけないんだよね・・・

とりあえず 練習していたのは真剣衰弱とババ抜き！！

・・・記憶力と直感がモノを言うゲームです・・・

めだかちゃんの記憶力はハンパないので、あまり参考になりません。

そして劉一の記憶力も。

「あれ・・・？　ここにあったと思ったのに・・・」

一枚めくるごとに・・・　何やら悔しそうな表情かおをしてるよ・・・。

それに・・・　疲れてるかも・・・　だって1時間以上してるから。

「・・・善吉君　ちょっと休憩しよっか？」

そう言つと・・・

「ダメ！僕！強くなりたいモン！」

頑なに拒否！

真つ直ぐで頑固者の人吉善吉に繋がってるのかもしれない・・・

ちよつとやさつとじゃ、やめそうにないね・・・

「善吉君。　このゲームは、記憶・・・　脳を思いっきり使つんだ。  
だから無理して連続でやっても旨くならないよ。」

そう、勉強もそうだけど・・・　適度の休憩は絶対に必要。

後は積み重ね・・・　努力だけだ。

「でも！めだかちゃんとりゅうくんはずーっと・・・ずーっと  
やってるよ？」

・・・う

そついわれたら・・・返す言葉が無い・・・

めだかちゃんと僕と比べたらまずいよ・・・

って困っていたら・・・

「善吉ちゃん。」

瞳先生がヒョコッと顔を出してきた。

「ん？なに？お母さん。」

善吉は顔をそちらに向ける。

「りゅうくとめだかちゃんに追いつこうと思ったら・・・ちょ  
ーooooooooooooと大変だよ？」

長いね・・・ちよつとが・・・

「う・・・うん。」

善吉は俯いた。

母親が言った事にこれまで間違いは無かったからだ、その母親が言  
っているのだから・・・

「だからさ！1日・・・頑張る！　ってやってたら、体が持たな  
いよ？　毎日・・・ちよつとずつでも頑張る！！つが、追いつく秘  
訣・・・　一番の近道かな？」



笑いながらそう言う。

「お母さんが言った事に間違いはないでしょ？それにお医者様が言ったんだから、ちゃんと聞いてね。」

そう言い・・・最後は善吉の頭に手をおき。

「そんなに無理しなくて大丈夫！善吉君には善吉君のいいところがいっぱいあるんだよ。頑張ったら頑張っただけ力になるよ。」

頭を優しく撫でた・・・

善吉は初めこそは俯いていたが・・・徐々に顔を上げ表情もよくなっっていった。

そして、劉一の方を向き。

「う・・・うん！僕も頑張る！！りゅうくん！負けないよ！！きつと！おいついて見せるからね！」

そう言った。

(さすが・・・瞳先生だね・・・)

善吉の事は一番よく知っている・・・それは当然だ・・・母親だから。

「うん！僕もめだかちゃんも！まってる！めだかちゃんだったら、いつでも挑戦は受ける！凜ッって言いそうだね。」

そう返した。

その後、瞳先生と目が会い・・・先生はウインクをした。

この家族・・・やっぱり暖かいなあ・・・っと改めて感じた一日だった。

・・・お陰で体の痛み・・・取れた

そして・・・

「だから言ったでしょ！【良く効く瞳印のサロンパス】だって！」

胸を張って瞳先生は言っていました！

第17箱 「僕も・・・ 負けないよ！」 (後書き)

ありがとうございました！

第18箱 「From hope to despair」 希望から絶望へ

よろしく願いします。遅れてすみませんこちらも・・・

では、無茶な展開だけど、

・・・はっはっはっ と笑ってスルーしてくださいね・・・

苦笑

毎日毎日……

ハチャメチャドタバタ……（死語？）

最早親も同然の人吉瞳先生…… 友達・親友の善吉君。

そしてライバル？ 苦笑 のめだかちゃん。

いろんな事が

でも……毎日充実してる。

本当に……充実してる。

ずっと忘れていた幸せを感じている自分が実感できる……

めだかちゃんとのバトルは大変だけど……

「おい！勝負の最中だぞ 何を思いふけている！」

「わあああ！！ゴメンゴメン！！」

そつだ・・・勝負の最中だったんだ・・・

なぜか今回は柔道だそうです・・・

指南したから勝負！とか・・・

既に赤帯取得クラスとか・・・

あれ？年齢とか実績がいるんじゃないかなかったっけ？帯の取得って  
と 貢献とかいるんじゃない・・・

つてツツコムのは止めよう・・・めだかちゃんだし・・・？

「・・・む？何やら馬鹿にされているような気配が・・・？」

「違う違う！！めだかちゃんは凄いな～って思ってたの！！」

忘れてた・・・読心術をもマスターしてるんだっただね・・・  
確  
か。

「ははは・・・考えるのも止めとこう・・・」

「何をだ・・・？」

「なっ なんでもありません！！」

声に出しても勿論駄目。普通だよね～～～～～ 苦笑

そして、柔道の時間が始まった！

.....

「はあ はあ・・・ やはり 流石だな。 劉一！」

最後はこうなるのです。

「めだかちゃんも・・・ね。 つかれたあ・・・」

五分の勝率だった。

めだかちゃんはそれに大分満足していたようだ。

「めだかちゃんって・・・ 何でもできるんだね・・・ 君も流石だっと思うよ？」

苦笑いしながら答えた。

「ふむ。だが、私はこれまで・・・ 貴様に会うまでここまで私と張り合い、尚且つ私を追い越すものになどあったことも無かったんだぞ？」

笑いながら答えた。

「あははは。 光栄だよ。 でも… 追い越せてるかなあ？ 最近じやめだかちゃんに遅れを取ってるようなきがするけど？ 先に参っちゃうし」

「ふん！何を言っておる！劉一とやっているスポーツの勝敗におければ ほぼ五分、参ったといつても、それは自己申告だろう？嘘ついてるように見えるんだぞ？私は！」

ちよーつと目を睨ませながら…言われちゃったよ…

「う…嘘なんか言っていないよお！！ ほんとに疲れたんだって！！」

急いで否定！ そして最後には互いに笑っていた。

暫くバトツて…

もう…外は真つ暗。

「ははは… もうそろそろ、おいとまするよ！ 瞳先生 心配すると思つし。」

12試合ほど…して、そう提案した…

そろそろ、限界だと思ひマスはい…

「むつ、そつだな。 気がつけばこんな時間だ。 また明日にするか、めだかちゃんも納得してくれたみたい。」



めだかちゃんのお家はちょっと遠いし車でお迎えしてくれるみたいだ。送っていいこうか？って言っても意味無いんだ。

僕の家・・・と言うか 善吉君の家に帰る時間の方が遙かに早いからね。

でもとりあえず・・・

「迎えが来るまで、一緒に待ってるよ！」

「うむ！」

恒例だけど・・・とりあえずそう言うことにしていた。

めだかちゃんの笑顔が見たいからって言うのは内緒だ。

何だかんだで・・・めだかちゃんのこと、大好きになってるみたいなんだ。

勿論善吉君も・・・ 瞳先生も・・・ 幼稚園の皆も・・・ この世界で出会った皆・・・全部ね。

「？ 何かいい事でもあったのか？ 何やら素晴らしい笑顔だぞ？」

めだかが笑顔で聞いていた。

「ん？ いいや、何でもないよ！めだかちゃん、唯・・・毎日充実してるなあ〜 って思ってたただだよ。」

笑顔で答えた。

「そうか… ならば明日も気合を入れて充実させよう！」

めだかも笑顔になり グツと拳に力を入れていた。

「！！そつ それは穩便にね…？ 体がもたないかもだから…」

ブルツと体を震わせてしまっていた。

「ふふふ… 私はまだ 劉一。お前の力の底を見れてないような気がするんだぞ？」

めだかは笑っていた。

力の底…？

何の事だろ？

「… 僕… 結構全力だよ？ 精一杯中の精一杯なんだけどね…」

苦笑しながら答えた。

「ふむ。詳しくは分からないがそう感じていただけだ。気にしないでくれ。」

めだかはそう言い、笑っていた。

彼女が言っている事は… ひょっとしたら、この世界で言う… 力…

アブノーマル  
異常の事を言っているのかもしれない…

それを100%理解、支配した劉一と勝負をしてみたいという事なのかもしれない…

真意は定かではないが…

劉一の異常アブノーマルの正体は…

「ははは… 気にしない方が難しいけどね。」

劉一は笑っていた。

彼は薄々は自分の能力スキルに気付きつつあるようだ。

過負荷… マイナスについては幸せである自分には無いと思っているようだった。

楽しい事ばかりだもんね

っと色々してたら… お迎えが来たようだ。

「めだかちゃん、そうじゃない?」

指を刺しながら言う。

「ああ、迎えの様だ、名残惜しいが、私は行く。ではまた明日、劉一!」

そう言うと、車の方へ。

「うん！じゃあまたね！」

劉一はめだかに手を振り…

そして 幼稚園を後にした。

家に帰っている途中…

不吉な気配に襲われていた、

「……………」

後を付けている人がいるみたいだ…

普通はこんな年齢の子どもが夜道を歩くなんて不自然極まりないからそれで、後を付けているとかそんな感じは全くしない、

悪意しか感じられなかった。

「……だれ？ 僕をつけているの？」

そう振り返ると…

黒服で包まれた男が立っていた。

2人だろうか…？

「ほう…よくぞ気がついたね。流石だ。」

薄気味悪い笑顔を向けながらそう言う。

「そんなに分かりやすく後をつけられたらわかるよ、で？僕に何か用？」

「普通は…ノーマル普通ならばわからない絶対にな、君は素晴らしいアブノーマル異常者のようだ。」

再び男は笑う。

「……だから、何の用なの？僕帰りたいんだけど、」

少し…イライラしながら言う。

「フッフ… 申し訳ない、私は玲人という… 君のことは…あの病院で目をつけていたよ既にな。」

そう言い、男は更に続けた。

「君は知らんと思うが…あの病院は全てある学園で行われているあの計画に加担している病院でね… 我々はその学園の対抗組織なのだよ… 君に事細かに説明しても混乱するかもしれないから簡単に説明させてもらう、学園に対抗する為に君の異常がちから欲しい…それだけなんだ。」

…恐らくは箱庭学園でのフラスコ計画の事だろう、安価で天才を量産するという計画…それに対抗する別の組織…？が彼ら。

「…こんな子供を捕まえて意味がわからないことを…嫌だよ！そん

なの」

きっぱりと断る。

断ったところで・・・見逃してくれるとは思わなかったけど。

「フフツ 君の事は良く見させてもらったよ。最初はその黒神めだかを狙っていたのだが… 彼女よりも君のほうが優れているようだったから乗り換えたんだよ、君が断るといふならば仕方ない。」

そう言うと、男は邪悪な表情をし、

「あいつに乗り換えないといけなくなるなあ…」

そう呟いた。

「ツ!!! そんなのさせないよ!!」

ヒュン!!!

一瞬で間合いを詰めた。

「!!! 流石に早いな!」

男はそれを見るや否や、バックステップで下がり…

また別の男が捕らえようとしたが…

「捕まらないよ! 今まで僕が誰と鬼ごっこをしてたと思ってるんだい!?!?」

そう、あのめだかと今まで鬼ごっこをしていたのだ、既に、身体能力は並みの大人を遥かに超えていた、そして武術も・・・  
だが・・・

「くそ！このガキ！！」

男は捕まえられない事に憤怒したようだ。

男の雰囲気が一気に変わる・・・

「もう手加減しねえぞ！」

ガシィ！！

男が捕まえたのは・・・

劉一の影だった。

「な・・・！ う・・・動けない・・・」

影が捕まっている部分は両足、

自分自身の両の足も掴まれているような感覚に襲われた。

「へっ 遅いぜ。玲人よ、ライトつけんの・・・ ちょこまか逃げられて腹が立ったぜ。」

そう言つと・・・

後ろの車から先ほどの男が出てきた。

「悪い悪い、でもまあ 捕まえられたからよかったじゃねえか。」

そう言っただけで笑っていた。

「何……これ??」

劉一は動けない足に睨み付けながら言った。

「これはオレのスキル……シャドウ・マスター影法師 影を捕らえたり逆に自分の影で相手に攻撃できたりする異常さ……アブノーマルこの力はけっこう特殊なんだ。異常というよりは異質みたいなんだぜ。いくら貴様でも簡単には抜け出せないだろ?」

男は勝ち誇るようにそう言い放つ。

そして…… もう1人の男が近寄ってくる。

片方の影使いは劉一を動かなくさせるのに集中してるのか動いていなかった。

「さて…… 我々のところにつてきてもらえないかな? 別に拒否しても構わんよ。捕まえといてなんだけどな。オレは……君が思ってるより残酷な性格なんだね。とびっきりの結末を用意してあげるよ……」

悪意の塊のような瞳で見られていた……



人の目じゃない・・・

そう感じていた。

「く… 僕をどうするつもり？」

拒否してしまえば… ひよっとしたら…

いや、この男達だったら絶対に、人吉家をまず狙うはず…

そんなの…

捕まった時点で最悪の事だったんだ…

「フッフ… 君の異常性アブノーマルを知り… それを研究して更に増やすのさ、君のような有能な人材をな… それができりや不知火なんざ目じゃねえ。」

そう言って… その表情は悪意から一転、まるで子供のように笑っていた。

純粹な悪党… そう認識を改めたのだ。

「まあ… 今はたった2人の超ちっちゃい組織なのが玉にキズだけどもまあそれは追々増やしていくし。」

「って！ 対抗組織って言うてたくせに2人なの！？」

思わず突っ込んでしまった、

だって…こんなに悪いオーラをバンバンだしながら、純粹悪っぽいし、捕らえ方だって、異常だしながらなのに。

もって大組織だと思ってたよ！ 苦笑

「ん？ まあ これで3人になったんだ、細かい事は気にすんな。」

また無邪気に笑っていた。

そして…無邪気な顔から邪悪な顔に…

「まず君の異常性を聞いておこうか」

男は…劉一に聞いたです。

「僕の…異常性…アブノーマル 唯の万能型だよ。いろんな事を常人以上にこなす事ができる。」

「常人以上ね… 異常人以上だろう？ パーフェクト 完璧ってことかい… いいね…」

薄輪笑みを浮かべた。

あらゆる事をこなす能力…それはあらゆる分野… 学力だろうが体力だろうが… そう…

戦闘力をも直ぐにこなす事ができるということだろう。

「利用できそうだな… お前は、その後に… 黒神めだかだな。」

そう男が言ったその時…

感情が一気に高ぶる。

「おい！僕が捕まっているんだ！皆には手を出すな！」

影を縛られながらも叫ぶ。

「善吉って奴は置いといたとしても…めだかの方は利用価値があるからな、捕まえないわけ無いだろ？ とことん利用してやるよ！」

「この… 最初に言ってたことと… 違うじゃないか！！」

体に力を込めながら…

男を睨みつける。

「ははは！大人って奴は嘘つきなんだよ。 ひとつ勉強になったただ  
パーフェクト完璧と言ってもその拘束は影を捉える アブノーマル異常性… 見たこと無いものをいきなり破るなんて無理だ。諦める。悪いようにはしないさ。お前もあのガキも… まあ 多少は人体実験もさせてもらうが  
な…」

プチンッ…

何かが… キレた。

「うわああああああ！…！」

叫びと共に…劉一の雰囲気が変わる。

「叫んだところで…状況は変わらんよ。まあ 近隣の住民が気付いたところで、普通ノーマルが何人集まったところで変わらんしな……ん？…なんだ？」

男は…

周囲の異常に気が付いた。

地面にヒビがはいつていた。

さっきまでは無かったものだ。

「なんだ…これは？」

ヒビが…どんどん伸びていく…

「おいおい！こりゃいったいなんだ？」

影を縛っている男も驚きながら叫ぶ。

「……………」

劉一は唯睨みつけていた…

影の男を…



そして… だるまの様にされ地面に崩れ落ちる。

ザッザッザッ…

劉一は男に近づいていく…そして 狂気に包まれたような…冷たい目で男を見下ろしていた。

「う… なん…だ… おま…え… ばけも…の…」

そして…

ズガアアアーン！！

男の体が地面にめり込んだ。

「お前… 一体…」

もう1人の…玲人と呼ばれていた男は、僅かに震えながら… 聞く、

得体の知れない力を目の当たりにし…

その場を離れないのは、逃げるのは不可能と悟ったからだろう。

いや…初めて感じた恐怖心で動けないのかもしれない…

「ぼくは… オマエをユルさない。スベテをこわす… 怒リニスベテをマカせて…」

右腕を上上げる。

「ひいー!」

全身が震え上がる…

「ルイン・ンウア破滅想…」

そう叫ぶと…

男の…体が一瞬震える…

そして…

ドシャアアアッ

男は 人形の糸が切れたかのように…

地面に崩れ落ちた…

そして… 劉一も気を失った…

第18箱 「From hope to despair」 希望から絶望へ

・ 流石に幼稚園・小学校・中学校と書くのは・・・きつかったので・・・

原作へとテイクオフです！

テキストにスルーしちゃって下さいね  
でわ！ありがとうございます！



第19箱 壊れかけた心（前書き）

よろしくお願ひします。 駄文ですが！ 苦笑

## 第19箱 壊れかけた心

目が覚めると…

そこは…見知らぬ天井…

「あ…あれ…？　ここ…は？」

体を起こす。

そしてあたりを見渡す、

どうやら、小さな部屋だった。

ベッドがあり…そして　頑丈そうな扉…　監視カメラが取り付けられていた。

「…ここは…一体…　僕は…どうなって…　ッッ…」

頭を抑える…

そして…鮮明に記憶が…　戻ってきた…

見知らぬ男達に捕まり…

そして…その男達を…

「う…うあ…」

膝をつき…

口元に手を押さえる…

「僕…僕は… 人を…コロ… うわああああ…!!」

そして…思い出すと同時に…叫んだ…

自分がしてしまった取り返しのつかない出来事を…

ガチャ…

扉がゆっくりと開いていく…

「おや…目が覚めましたか…」

老人がゆっくりとした足取りで…劉一に近づいていった。

「うわあああああ!」

劉一はそれに気付かず…唯々…叫んでいた…

そしてしばらくして…

叫ぶ声も無くなった時。

「落ち着いたかね…？」

その老人は…劉一に語りかけた。

劉一は目を真つ赤にし… まだ体が微かに震えていたが…頷いた。

「それは良かった。君を捕まえていた男達はね… 私の学園でいた関係者でね… 情報を持ち出し逃げ出した。」

そう言いながら劉一の肩を掴む。

「君が… 止めてくれなかったら、君の様に何人も犠牲が出ていたんだよ… 彼らは過激派だったからな。君が…それを止めてくれたんだ。気に病むことは無い。」

そう言い肩を離す。

「その…人たちは… どうなったんですか…？」

「現在緊急集中治療室だよ。命に別状は無いとはつきりとは、まだ言えないがね。」

…この言葉で多少は気が軽くなったかと思ったのだが…

まだ表情は暗いままだった。

「そう…ですか…」

「あまり気にすることは無い、とはいっても今じゃ無理のようだね…  
…これからどうするんだい？ 彼らの処理は我々が執り行った。  
起こったことは世間には知られていないよ。唯…君が行方不明にな  
っていることだけを除いてはだけどね。」

そう言いつとすつと立ち上がる。

「行方…不明？」

劉一は首を傾げながら聞いた。

「うむ。悪いとは思ったが状況が状況… 君とあの男達は秘密裏に  
処理したんだ。まだ君の家族にも伝えてはいない。家に帰ることは  
可能だ。但し条件はあるがね。」

.....  
.....  
.....

どうやら条件とは、将来…箱庭学園へ入学して欲しいとの事だった。

「どうかな？ 入学金などは全て免除の特待生として迎えよう、学園  
に入学してくれるのならば可能な限り君の要望にも答えるが…」

元々身寄りの無い劉一にとっては最高の待遇だろう。

人吉家に世話になっていることは既に不知火は調査済みだった。

故にそういう待遇にすることで、入学を促す策だった。

だが…

「…僕は 人吉家にはもどりません… 僕を… 別の施設に…入れてください…その要望を…入れてくれませんか…？」

暗い表情でそう話す。

「…それは容易い事です。 ですが、なぜ戻らないのですか？人吉家は君の家族同様なのでしょう？」

そう聞く…

「……………」

暫く劉一は涙を眼にためながら… 目を閉じていた。

そして、口を開く。

「…あの人たちは、僕に光をくれた… 毎日毎日… 暗闇を彷徨つてた僕に… いや… 暗闇から抜け出れるか出れないかの瀬戸際に… あの人たちが手を差し伸べてくれたんだ。…それなのに…僕は…闇に…心の闇ブラックボックスに囚われて…暴走してしまったんだ… あの人たちの…傍にいる資格なんか無いよ…僕は…」

涙が止まらない…

命を奪おうとした… その事に深く… 傷ついているようだ。

例え、彼らが助かったとしても… もはや 関係ないだろう。

奪おうとした心には変わりはないのだから…

この世界に来て… 毎日が幸せだった。

彼は… 精神状態… で変化する異常性…

あの時は… そう言う精神状態だったのだろう。壊したいっていう…

い、<sup>アフノーマル</sup>異常性というより<sup>マイナス</sup>過負荷…

不知火は今ほそつとしておくのが得策だと考えていた。

(彼の異常性は明らかに群を抜いています… それでも<sup>ベース</sup>基本は子供… 心が壊れてしまつては元も子もありませんね…)

「わかりました… 今の君に必要なのは心のケアです。本来ケアが必要な子に直接心に傷があると言つものではありませんが… 君は良く分かっているみたいですね。心の傷は… 直ぐには治りません。時間をかけるといいでしょう。施設の方は喜んで提供させてもらいますよ。」

そう言つて微笑みかけた。

「…ありがとうございます…」

そう言っつて、ベッドの上に横になった…

不知火はその部屋を後にした。

.....

不知火 side

不知火は笑っていた…

「ふふふ… これで私の悲願達成に向けてまた前進しましたね…」

笑いが…止まらない様子だ。

不知火はある情報を耳にしていた。

その情報は、普通の人ならば何のことか分からない、相手にもしないような情報だ。

だが、情報の内容…は勿論、それより…その情報の提供者…これが一番確信できるものだった

情報とは… 黒神めだかの情報。そして…それを上回る存在…

情報提供者の言い方によると、



『黒神めだかは勝てない存在だ。1000年に1度くらいは生まれてくる事が有る… まあ 分かりやすく言うと この世が週間少年ジャンプだと言う設定と考えると、彼女は所謂主人公なのさ。理屈とか抜きに勝者であることを決められている… 体質？って事かな？ だから 考えなくちゃ。そういう絶対値の持ち主を倒す？方法をさ… いろいろ考えているんだけどね 不知火君 僕が悠久の彼方を見て回ったけど… 彼さ… この僕が痺れたんだぜ？それに惚れちゃった 一目見てさ… 何だろうね？分かんないんだけど 異質…というか変則と言うか…この世のものじゃないって言うか… 大げさじゃないんだぜ？こんな感覚初めてなんだぜ？人外である僕が。全てを平等と考える僕がさ。でも、彼の心は…基本は <sup>ベース</sup>ありふれた人間なんだな、』

…黙って聞いていた。普通なら眉唾だ。

だが…彼女が言うのなら話は別。

多少は聞いておかなければ…

『多少は無いだろう？不知火君…』

「いえいえ、冗談ですよ。」

心を読むことなど造作も無い者… だと言うことを忘れていた様だ。

『彼を引き込む事が一番だね。万が一にもさ。もし…できなかつたら…めだかちゃんより厄介なことになるからね？ まあ 僕も計画はするけど、有る程度は頑張ってくれよ？不知火君。』

それを最後に…その人物は姿を消した。

「あの方が言われることだ。だが…私は私の理念を持ち教育というものを行います。…それを踏まえて…考えてみるとしますか。プランは私の中では既に出来つつありますからね。彼に頼らずとも…」  
そして老人はその場を後にした。

第19箱 壊れかけた心（後書き）

ありがとうございました！

第20箱 残された者たち（前書き）

ちよつと短いです!!

ごめんなさい!!

ストックはあるんですが・・・違和感あつたんでここで区切りまし  
た・・・苦笑

では!

## 第20箱 残された者たち

後日…

【人吉家】

「…ええ… そういう格好で…最後にいなくなった日には…幼稚園の服を…はい…よろしく願います。」

瞳先生が電話しているのは… 警察にだった。

なぜなら…

「うっ…うっ… りゅっ…りゅっ…くん… りゅっくん…」

善吉は夜通し泣き続けていた…

泣き声は収まりつつあったが… 涙がとまる事は無かった。

泣き声が収まったのはただ…叫びすぎで声が出にくくなってしまったからだ。

泣いている理由は唯一つ…

「どっくに…いっちゃったの… りゅ…くん…」

そう…劉…

人吉劉一の行方不明…それが理由だ。

毎日と一緒に過ごし…

最早兄弟同然だった…

「善吉…今必死に皆で探しているから！大丈夫！きっと直ぐに見つかるわ！安心して。…ね？大丈夫！あの劉一君だよ？きっと大丈夫！信じて、」

瞳は善吉の頭を撫でながら慰めた…

でも…彼女も心配でいても立ってもいられない状況だったのだ。

彼の…劉一の優秀…異常性は誰よりも知っていた。

子供とは思えない学習能力の高さ…知性の高さ…そして身体能力…

全てにおいて、大人にも引けを取らない。

幼い子供が…だ。

その…子が…音沙汰も無く姿を…消すなんてありえない…

理由があったとして…

善吉には内緒だったとしても…私には絶対に言う。

そういう子なのだ。

十中八九… 何かに巻き込まれた…

「さっ！善吉…！元気出して！ご飯！たべよっ！　っとその前に…  
手を洗わなくちゃね？ほらっ！」

そう言い、善吉を洗面所へ。

「…劉一……」

1人になったその時だけ…

人吉瞳は…

心配する…母親の顔に戻っていた。

### 【黒神家】

「そっだ！何としても…何としても探し出すんだ！」

こちらにも…電話で誰かと話をしている。

黒神家の執事をしていた男性だ。

劉一が行方不明となったことは、もう既に黒神家にも伝わっていた  
ようだ。

「全員出てくれ！なんとしても…劉一を探してくれ！」  
めだかが激を飛ばしていた。

「……劉一… 何処へいったんだ… 私に黙って…」

今でこそ、平静を装ってはいるが…彼女も、善吉と同様…

一晩中泣いていた。

その雰囲気には変態まぐるさえ近づけない程に…

「必ず… 見つけ出すから… 私に勝つたままなんだ！お前は！それに… 約束した… 答えを聞いてないんだ！」

まだ、涙は涸れてはいない様だ…

その瞳は薄っすらと…滲んでいた。

「今のめだかちゃんには… 何言っても聞かないだろう… それ程、彼の事が心配なんだね。勿論僕も… 心配だよ。何せ…彼は妹の恩人だしね… 嫉妬しちゃうけど。」

まぐるも…涙を流し指示を出しているめだかを見ながら呟いた。

「でも…泣いているめだかちゃんなんて見たくないな。」

そう言うと、彼も搜索に乗り出した。



「けっ… なんだよ… アイツ… 私にあんな説教みたいなことし  
といて…」

ここはくじらの部屋…

いつもどおり禁欲ストイックに勉強しているところだった。

彼に出会って…

彼女ひじくも家族と食事したり、会話したりと…

徐々に心を開くようになって言ったのだが…

彼の… 劉一の失踪を聞き… 以前の彼女に戻ったようだった…

「くそっ… なんでこんなに嫌な思いをするんだ…!! ……  
これが、不幸… なのか？ ククク…」

くじらはそう呟くと…

再び机についた…

劉一の行方不明… それは… 皆の懸命な搜索の成果も上がらず…

見つからなかった… 何年… 何年立っても、彼の生死すら分からない。

そして… 長い月日が流れた…



第20箱 残された者たち（後書き）

ありがとうございました！

第21箱 「高校生かぁ……って！なんで！！」（前書き）

よろしくお願いします！！

連続投稿できた……苦笑

では！！

第21箱 「高校生かぁ……って！なんで！！」

13年後……

### 【箱庭学園】

そこは大きな時計塔が印象的な学園。

その歴史は1000年を超えており…… 学園という名に帰る前は  
塾と言っ名だった。

その頃を含めれば200年の歴史を持つ……

なんとまあ……壮大な……



校長のお話が終わっていたけど…

僕はそれどころではなかった…

なぜなら…

「ふむ… これからの学園生活は有意義にしないとな！」

長い青つばい髪に… 整った顔立ち… いや美人だね…

「…んで なんで当然のように俺の後ろにいるんだよ！」

こちらは金髪の男…

どちらも… 見覚えがある…

それに… 面影も有る…

決定的なのは… ネームプレートだ…

【黒神】に【人吉】…

「なっ… なっ… なっ… なあああ！…！」

滅茶苦茶同様していた。

「あつ！ そういえば、箱庭学園って！！ そうだよ！！！！ 当然じゃないか！！！！！」

もう、この世界は僕にとって現実と何一つ変わらない。

別の世界に来ている…転生しているなんて…もう実感が無い…

何年もたってるし…

「む？」

女性…めだかがこちらを見た。

その瞬間！顔をそらした！！

あぶな！！

「どうしたんだ？」

善吉がめだかに聞く。

「いや… なにやら視線を感じたんだ。」

そう言って まだ視線がした方を見ていた。

「そりゃ 入学式だったのに、あれだけ喋っていたら注目集めるだろっ？」

善吉は呆れ顔でそう言った。



「ふむ… それもそうか…」

そう言っただけかはこちらから視線をはずした、

.....

.....

「よかった…」

気付かれてはないようだ。

「……あわせる顔なんて無いよ僕に…」

長い年月もあってか、

人を傷つけた事の罪悪感は大分なくなっていた。

彼らは一命を取りとめているという事実も幸運だ…

だけど…

やはり、合わせる顔なんて無いようだ…

人を傷つけたこともそうだけど…

何よりも何年も失踪しているんだ。

もう… 会う資格なんか…無い…

「彼らに…善吉君とめだかちゃんにバレない様にしないと…」

そして、その日の入学式は終わった。

後日、クラス分けがあるようだ。

.....

同じクラスにならないことを…願おうか。

「どうしよう…名前… もう入学式で登録してるし… 御神…はいとして、劉…はまずい… 漢字変えてないし… めだかちゃんなら… 絶対接触してきそうな気が… でも、もう10年以上たってるし… いや！警戒に越したことはないね。」

そう言つと…

帰りに、ドンキ・ホーテによって、カツラを購入しました！

……でも 使えませんでした… これじゃ宴会芸だよ… 苦笑

なので… カツラ専門のお店に…

購入したのは、目元まで隠せる長い前髪のタイプ。

髪の毛で大分その人の印象は変わるものだ。

それに、声は問題ない、現に彼女達も、大分声変わりしてたし。

入学式もあまりまわりの人たちと話さなかったのも良かった…

この程度の変化なら分からないだろう、そもそも皆初対面だったし、

「でも… 一番は明かすことって言うのは分かってるんだ… でも

…」

やはり…

合わせる顔が…というより勇気がもてないね…

「冗談抜きでボコボコにされるかも…」

そっちかよ！！と突っ込みたい。

当然これは冗談だと思いたい…

これくらい冗談を入れるほどに… 回復したのだと！

「大人になって… 2人とも…善吉君はかつこよくなってるし、めだかちゃんも凄く美人になってるね… もちろん力もかなりアップしてるよねえ… 善吉君は僕に負けない！って凄くまっすぐな目で見てたし… もちろんめだかちゃんは…」

やっぱりそっちなのか…？

ははは… まあ 気持ちは…分からなくもないね…

苦笑

「…とりあえず、明日から頑張ろう… 高校生だしね。」

そう言い、就寝についた。

そして… まあ、いろいろありました。

大きな大きな生徒会長が引退してね。

僕が見つけたらスツゴい驚いてて…

いろいろ話をしてたら…めだかちゃんに遭遇しそうになったから、いつそいで逃げました!!

見つからなかっただけ奇跡だよ…苦笑

何やら…めだかちゃんが生徒会長になったみたい…

支持率98%の規格外で、

そして、僕は1年1組に!

てつきり13組だと思ってたけど、

めだかちゃんも13組だからそこは良かったと思う。

理事長とも何も話してないし、何やら理由があるみたいだけど、聞

かないしあってもない。

唯、13組じゃないけど、学費免除の対象には入れてくれているみたいだけど。

それはよかったかな…

そして… 朝礼が始まった。

「世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？…安心しろ それでも生きることは劇的だ！」

それは…生徒会長の挨拶…？

「そんなわけで 本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで 悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい！ 24時間・365日！私は誰からの相談でも受け付ける！！」

高らかに宣言した。

…めだかちゃん

「豪快になっちゃって… いや、元からかな…？」

そんな生徒会長を見ていた。

「…それにしても悩み事…ね。ずっと バレない様にはどうすればいいか… とか？ 無理だね… 本人だし 苦笑」

とりあえず、教室に戻ろう。

善吉君がいるとこに…

「隠すのが大変だけど… まあ、頑張ろう。」

そう言い、朝礼も終わった事だし…教室へ戻った。

第21箱 「高校生かぁ……って！なんで！」「（後書き）

ありがとうございました！

第22箱 「絶対生徒会には入らない!」って ぎゃあああっ!」 (前書き)

よろしくお願ひします!!!



第22箱 「絶対生徒会には入らない！って ぎゃあああっ！！」

【1組】

ザワ… ザワ…

あたりはざわめいていた。

内容は当然。

「ねえ 聞いた？ 新しい生徒会長…」 「私たちと同じ入学したての一年のくせに」「冗談みたいな態度、それこそエルみたいなんですよ？知ってる！」

あちこちでうわさに… そりゃあ、あんだけ言っちゃったらね…

「引くほど美人なんだけどやることなすこと滅茶苦茶に型破りでさ・  
・・・」「だろうな… それで先生もビビッててえ出せないんだろ  
？」

ははは…変わってないな…

「 「

ん？」

「あはは！よく啖呵されるもんだね？あのお嬢様！」

話しかけてきたのは…不知火半袖。まあ、クラスメイトの1人。

「すっごいよね… あんなのまね出来ないよ僕には…」

苦笑いする。

「あは　それが普通でしょ？つて言うより、人前に立つの慣れてるんでしょー？あのお嬢様はさ！」

2人で話してたのは問題なかったんだけど…

「カツ！」

傍で寝てた善吉が目を覚ました。

と言うより席・・・直ぐ隣なんだよね…　彼は。　危険な事に…

でも　めだかちゃん見たく鋭いわげじゃないからね。良かったさ。

「あのな、お前らありゃあ　人の前じゃねー。人の上に立つのに慣れてんだ！」

「んー　あー　そりゃそーだね！そーでなきゃ1年で生徒会長なかなれっこないか」

不知火がにやつつとしながら言う。

「ははは…でもそれはそれで異常だよ…支持率にしてもね。」  
苦笑いしてるのは僕。

「ははは！そうだね〜ぶっちぎりのナンバーワンだもんねー！  
かくゆう あたしもあのお嬢様に清き一票をささげたわけですが  
全国模試では常に上位をキープ！偏差値は常識知らずの90を記録！  
手にした賞状やトロフィーは数知れず！スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態！実家は世界経済を担う冗談みたいな  
お金持ち！で、全長263メートル 高度6万フィートをマツハ  
2で飛行！インテル入ってる！」

「……………最後まで言い切ったと同時にとりあえずハリセンで  
軽く叩く！」

「もうちょっと分かりやすい規格外を言ったほうがいいよ！ 凄い  
のは伝わるけど途中から分かりにくい！」

「いやいや、途中から人類じゃなくなってるじゃんかよ！そこを突  
っ込んだんじゃないのか？劉ー！」

ビクッ！

善吉に名前で呼ばれるのはまだなれてなかった、

でも、とりあえずは平静を保ってるから、問題ないと思う、

前髪で大分印象が変わるんだね… 実験してみたけど、分からない  
よ！って言うてくれた人！10人中9人！

善吉も気付いてないし！

めだかちゃんて実験は・・・したくないな・・・不吉だ・・・  
嫌な予感がするからね・・・苦笑

「ははは・・・ まあまあ 的を射ているジャン！ ちょっとはね。」

「マツハだとか高度とかがか？」

馬鹿話をしていると、

「んでさ！人吉はどうすんの？ お嬢様が当選したって事は と  
ーぜん人吉もはいるんでしょ？」

そう・・・彼は何度も何度もめだかちゃんに誘われている。

教室までは来てないが、

校内放送で呼び出してた時はびっくりした、

まあ 僕としたら好都合だけどね

「カツ！なわけねーだろ！これ以上アイツに振り回されてたまるか  
つてのー！」

そう言っつて善吉は立ち上がる！

「ははは・・・ っつて！！！！！！！！ッ！！！！！！」

それどころではなかった！

善吉がこっちを振り向いた時…

いつの間にか…

「オレは絶対！生徒会には入らない！！」

指差す善吉と全く同じポーズをするめだかが立っていた。

ガタツ！

思わずオーバークションを取ってしまったなあ…

善吉は 気付いてないみたい。

「まあ そう連れないことを言うものでないぞ？善吉よ！」

頭を鷲づかみにしていた。

そこで初めて気付く！！

「ギヤアアア！！！！」

でそのまま持ち上げる、

凄いね、女の子のパワーじゃないね、

「って… 感心してる場合じゃないか…」

ちよっとでも、目立たないように…ゆっくりと、その場を離れよう

としたら…

「む？待て！貴様。」

なぜか…ご指名を！

「へっつ！ なっ 何かな？」

いかん！！平常心平常心… こんせんとれーしょん……

「貴様…名はなんと云う？」

善吉をポイツッと放って… ひど！

「ええつとお… 御神ですが…」

前髪で目は見えないのが良かったよ…

「そうか、御神同級生。名字は分かった。名は？」

ひっつっつ…

そこに行く？やっぱ

「…」

ボソツと言っ…

「何！？聞こえないぞ！？」

めだかちゃんの<sup>プレッシャー</sup>圧力は強くなる一方だ…

「おいおい…オマエがそんなだけ圧力かけりゃ… 誰だって萎縮しちまうだろ？」

善吉が助け舟を！

なけるよ…ほんとに。

命の恩人だね。今度何かおごるよ！

(コイツの名がアイツと同じ劉一って知ったらめだかちゃんのことだ… 暴走するかも知れねえからな… とりあえず、オレが頃合を見て話したほうがいいだろ。そもそも コイツすっげえ、びびってるし。)

って事だったんだ…

で、この場は落ちつきそうだったんだけど…

「名前くらい言ったっていーじゃん！劉一！だよね」 前髪がイカスさー！

そう言い放つ空気を読めないお嬢さん…

「(不知火！！！！！)」

「何！！劉一！だと！！！」

めだかちゃんは…大声をだし、こちらを見た。

「おい… 御神同級生。」

「はっ！！」

敬礼のような声を出す。

「私や善吉に合ったことあるか？」

尋問…？

「いっ…いえ！合ったことは…この学園が初めてです！！」

「…では 何処出身なのだ？」

うっ…あの幼稚園の名前を出さそうとするつもりか… 誘導尋問？

ふふ…だけど、もう名前はばれてるし、もう恐れるものはない！  
「…でもないけど… 苦笑

心理戦で僕に勝てるかな？めだかちゃん…

とぼけきつてあげるよ！ かつこ悪いけど… 苦笑

「僕… 孤児なんです。 有る施設に幼少期よりずっといて…出身  
と言われても… この不知火理事長なら詳しくは知っていると思  
います。」

そう言った。



「孤児…？そりゃオレも初耳だな。何か悪い、連れがそう言わしてな。」

善吉が割って入ろうとしたけど・・・

めだかに防がれた… 苦笑

「ふむ。それはすまなかつた御神同級生。では、その髪をちょっと捲ってもよいか？」

ドキーン！！

ええ！そつくるの！！

結構平常心で・・・ ポーカーフェイスだったと思うのに！！

「む？どうしたのだ？」

めだかがにじり寄る…

その時、善吉がめだかの肩を掴んだ。

「…その辺にしとけよ。もう、アイツは いないんだ…」  
肩を掴んで揺さぶる。

「……………」

めだかは少し表情を暗くしていた・・・

「オレに用があるんだろ？さっ さっさど行いっせー！」

そう言う。めだかは無言で善吉と共に立ち去った。

「…なんだったのー？今のさ？」

「さっ…さあね。」

苦笑するしかない。

でも、善吉には感謝しかないなあ・・・

### 【生徒会室】

「…なぜ とめたのだ？善吉よ。」

めだかがそう言う。

「…もし アイツがここにいたら… 直ぐにお前には話すだろう？  
つてことはアイツはいないんだ。同名の別人ってことだろーよ。」

「ふん！」

とりあえず、その話は終わりのようだ。

「んで…それよか 普通に現れて普通に連れてくることはできねー  
のか？生徒会長さん」

「それについては貴様が私の誘いをすげなくし続ける貴様が悪い。それによそよそしい呼び方をするものではないぞ！ めだかちゃんと呼ぶがよい！」 ツ凜

そして、鏡の前に立つ。

「そりゃーよ！ キツイのはわかる！ でも だからって巻き込むなよ！ お前って奴は昔からそうなんだ！ 子とあるごとに当然のように俺を道連れにする！ オレの気持ちとかオレの迷惑とかちつとも考えなくてねえ… 付き合いきれねーんだよ！ 実際！」

そついろんな反応リアクションをしながら善吉が語っているが…

全く聞いてないどころか、服を脱いで鏡の前でポーズをしていた。

「大体お前なら一人で生徒開業ぬをやり続けることも出来るだろ

って うおおおおおいつ！」

やっと善吉も気付いたようだ。

「あつ！ 当たり前前みてえに人の後ろで着替えてんじゃねえよ！ もつと恥じらいをよーー！！！」

後ろに後ずさりながら言う、

…が。

「？」

何をいつてんの？見たいな表情をする。

それどころか、

「私と貴様の間に恥じらいなど何の意味がある？」

続いて…

「少なくとも小6まで私と一緒に風呂入っていた男の言うことではないな」「昔の話だ！！！」

あははは…

幼少のころの話って結構効くみたいなんだ…

「まあ、私は劉一とも入っていたかったのだが…」

一瞬だけ寂しそうな顔をしたが、直ぐに顔を元に戻す、

「それに善吉 私は仕事を手伝ってもらうために貴様を引き込もうとしている訳ではないぞ？」

「ああ？」

善吉は暫く顔を背けていたため、一瞬のめだかの表情は見てなかったみたいだ。

「私は仕事がキツイと思ったことなど生まれてこのかた1度もない！ 私には貴様が必要だから！傍にいてほしいだけなのだ！」

「!!!!」

善吉は顔を赤らめていた、

彼女を…

劉一がいなくなっただけで、彼女と一緒にいたのは善吉だ…  
その為だろう…

一瞬混乱した善吉だが、直ぐに分かったみたいだ。

「で さしあたってはこの目安箱なのだ…」

そう言って、業務に入っていったのだ。

S i d e o u t

第22箱 「絶対生徒会には入らない！って ぎゃあああっ！！」 (後書き)

ありがとうございました！

第23箱 「矯正し、強制し、改善し、そして改造してやるぞ！」（前書き）

よろしく願います！

このにじ小説は書きだめしてるので… まだあるんですが！話と話の区切りが下手なので… 長かったり短かったりしちゃうかもです… ご了承… してくれたら嬉しいですノノノ

でわ！

第23箱 「矯正し、強制し、改善し、そして改造してやるぞ！」

【1組】

善吉が身を挺して？劉一を救った後… 苦笑

「まあ、とりあえず人吉に救われたね」 劉一！

クラスで残っていた不知火が、笑いながらそういった。

「まったくだよ… 怖かったなあ。」

苦笑しながら答える。

「結局のところ、アンタって、ほんとにしらないわけ？あのお嬢様のこととかさー？」

不知火がニヤニヤしながら聞いてくる…

「しっ しらないよー！」

突然のことで驚いてしまった。

「でもさっ 劉一ってあのお嬢様の話になる時結構関わるまいとす



るじゃん！なーんかあやしーんだよねー」

…するどい。

善吉なんかよりずっと…

「はあ…何か食べたいものでもある？」

そう言いつと…

「あひゃひゃ ラーメン！」

ピタッと納まるんだ。

有る意味めだかちゃんより厄介かも…

とりあえず、今日はおごるとしよう。

「OK。さー！食堂いじ。」

「はあーい」

そう言い、食堂に。

その後たらふく食われて… 財布の中身が大変になっちゃったのは別の話だ… …ぐすん

食事が無事終わり…

とりあえずブラブラと歩いていた。

「はあ… 一体 体の何処にあれだけの量が入るのかな？ 不知火は…」  
呆れながら、財布をひらひらさせながらそう言う。

「えー お腹の中に決まってんじゃない」

あひゃひゃ と笑いながら言う。

明らかに食べた方の体積の方が多いと思うのは僕だけじゃないと思  
うなあ…

「ん？ あれは…」

ふと見てみると…

「人吉だね〜 それにあそこは今は不良のたまり場になってる剣道  
場だね また巻き込まれてるみたいだね〜」

すごい笑顔でそういう不知火さん。

「あははは… 助けてあげればいいのに…」

「あたし？ やだよやだ！ あたしは親友が酷い目に遭うのを安全圏で  
眺めていたい人間だから！！」

全力で否定!!

「なははは…　そこまで言い切ると清々しいものが…　随分と高尚な…」

有る意味凄い…　真剣な顔で言っているところも凄いな

本人の前でも言っんじやない？平然と…

「ってな分けで〜覗きに行こうよ!」

そう言って制服を引っ張る。

「え“…　なんで僕も??”」

そう引きつった笑顔で返す。

「いいじゃん　ほらあ〜　じゃないとあたし、いろいろ喋っちゃ  
う」

脅し!!

「んー!えつとねー　剣道にスゴク興味があつたんですー　イコー  
かなー!!」

「あひゃひゃ　そうこなくっちゃ!」

うう…　不知火の鬼…

そして、2人は剣道部へと向かった。

んで覗いて見ると…

タタタタタタタタタタタタタタ

分身の術!!

そして驚いているヤンキー達のシーン!

「見て!劉一!忍者がいるよ」

不知火楽しそうだ…

「ははは… 久しぶりに見たね… 錬度が上がってそうだ…」

声に出してしまった…

「んー?久しぶりってえ〜??」

ニヤニヤ…

「あ……」

しまった…

あまりにも懐かしすぎたから…

「甲賀忍者の時代劇でね、それで 分身の術！があっただよ！不知火！」

笑いながら…なるべく自然に返す。

「ふう〜ん… まっ いや 今お腹いっぱい出し」

……要求は飯のようだ… 苦笑

で…馬鹿言ってる間に…

「…それでもタバコは控えておけ 貴様達の健全な成長の阻害するし 何より将来の楽しみがなくなるぞ！」

めだかが持っていたセンスの上にピラミッドのように積み上げたタバコを見せそうだった。

「……………!!」 「え…オレのタバコ!!」 「何なんだ！今の!？」 「忍法か!？」

不良たちは驚きながらざわめいていた。

だよね…

「あれは、一応剣道だよ。送り足と継ぎ足を交互に使ったね。でも、あれだけ早かったら、そうみえるだろうけど…」

一通り解説を…

「おっ！御神。よくわかってんじゃん。ってか何で「」に？」

善吉がよってきた。

「あつ いや不知火がね…」

そう言つて横を見ると…

「不知火？どこに？」

いつの間にかいない…

「あれね… えー いなくなつてるし…」

肩を落としながらそういう。

「あいつはアンタツチャブルな奴だつてしてんでんたる？テキトーに飯でも食わしてりゃ無害なんだからよ。」

「わかつてるよ…その飯を食わせたばかりなんだけどね…」

更に更に肩を落とす。

「そりゃ… 気の毒に…」

善吉も苦笑していた。

そんな時…

「なんだよ！！セツキョーかよ！お呼びじゃねーんだよ！生徒会長

さんよおー!!」「いい気になってんじゃねーぞ!」

何やら怒号が聞こえてきた。

そして…

「哀れなことだ。貴様達もかつては真つ直ぐな剣道少年だったに決まっている。何か重大な理由があつて挫折を経験し道を踏み外してしまったとしたか考えられん」

ずくずん…

えつと…

こういう人たちつて…木刀が好きでタム口しているヤンキーじゃ…

苦笑

「これが…これこそが黒神めだかの真骨頂『上から目線性善説』…」

「なつ…ナルホド…」

2人してずくんな表情に…

更に続く…

「親に見捨てられたか?よき師に出会えなかつたか?友に裏切られたか?安心しろ私が貴様達を更生させてやる。剣のこと以外何も考えられないようにしてやる、矯正してやる強制してやる改善してやる改造してやる。」





不良たちの叫びが木霊する…

「さあ！善吉！貴様もだ！」

当然のように…善吉も呼ばれた！何で！！

「なんでだつぎゃあああ！！！」

頭を鷲づかみにされて放り込まれる…

「む… 御神同級生もいたのか…貴様も混ざりたいのか？」

よかった… どうやら善吉だけのようだ。強制参加は…

「いついえ！！ 偶々酔っただけなんで！！シツレイシマス！！！」

「おい！！！」

呼び止められる！！

「ふえっ！！」

「よるの漢字を間違えておるぞ！」

すみませんでしたあ…

とりあえずその日は…

他に沢山改造？しなくちゃいけない人たちがたつくさんいた為…比較的簡単に抜け出れた…

前髪・・・が取れたら最悪だからね…

翌日…

### 【食堂】

「前から思ってたけどさー人吉って頭悪くない？なんで毎回毎回お嬢様のシゴキに付き合ってたんだよー部外者の癖にさ！」

不知火と善吉、そして劉一も不知火に誘われて昼食を取っていた。

「うるせえ！」

「不知火は酷いよね… 僕を巻き込もうとするし… 昨日もさ…」  
それぞれが発言を…

「あひゃ〜？何か言ったのー？劉一君〜？」

「なんでもないよー」

やば… 喋り方がちょっとつった…

「そついや、劉一は不知火にいっぱい食わされたっけか？」

「食わしてあげたのにね… 返されちゃったよ…」

苦笑いする。

「そりゃー おれーはしないとさ」

笑いながら言っていた…

お礼の意味を辞書で調べて来いと言いたい…そして書き取り100  
回だ！

「そつれよつりさー！ 人吉！」

不知火が口元を拭きながら言う。

「ん？なんだよ。」

「劉一って名前にさー なーんか ご執着あるの？」

「！…！！」

なんでこのタイミングで…！！

「ん？ああ そのことが… そつだ。御神劉一わるかったな。この  
間は。」

善吉は劉一の動揺には気付いてなかったようだ。

それになぜかフルネームで名前を呼ぶ。

「え？」

「…劉一って名前で昔親友がいたんだ。あのめだかちゃんと張り合  
つて、それも互角の戦いをするよーなやつがな、」

そう言うと不知火は笑いながら驚いていた。

笑いながら驚くって…

「……………」

劉一は黙っていた。

「そいつは…失踪してしまっただ。突然な、前触れもなく、それ  
でめだかちゃんは狂ったみたいに搜索をずっとしていたんだ。  
でも…見つからなかった。手がかりすら0だ。それでも、めだか  
ちゃんはあきらめ切れなかったんだろうな。今でも学業…生徒会業  
務が終わった後、黒神グループで搜索しているアイツを探すために  
色々やってるみたいだな… だから、お前に… 同じ名前の過  
剰に反応してんだろう。それに 何か似てる感じもするしな。」

そういつて善吉は外を見た。

善吉も…手伝っているようだ。

「そう…なんだ…」

「へー ツ見つかるといいね」

何やら不知火は再びニヤニヤ…

悪い予感しかしないような笑顔でニヤニヤ… 苦笑

「まあな… 見つかったら…とりあえずオレは一発ぶん殴る！オレの母さんも心配してんだ！何で音さなしなんだ！つてな！…一発…重いのをな。」

そついつて寂しそうな顔をする…

(善吉…君…)

やはり…罪悪感がある…

あの時は…本当に苦しかったから…

何もいえなかつたんだよ…

「……………」

「わるいな！辛気臭くして とりあえずまあ めだかちゃんも昔っからどつかずれてたんだよ。搜索つつた話だつて、幼稚園くれーの歳でそんなことするんだぜ… その上自分の優秀さをまるで自覚ないし… そのくせ周囲には自分と同じレベルを強要しやがる…でそれが今回はたまたま上手く行ったわけだ あんなひでえ目に遭つちゃ、あいつらもう剣道場にちかよらねえだろ。」

そういつて 持っていた、ご飯を頬張る。

とりあえず… 本当のことを言つと… 今すぐにも誤っちゃいたい。

すぐく心配かけたし… 本当に悪いと思つてる。

でも…それ以上に…

バレるの結構…と言つか、かなり怖いから… 特に某生徒会長が…

そのせいか…誤りたい気持ち…より強く！結構この場を離れちゃいたいって思うくらいの気持ちなんだね… 苦笑

でも… 僕の横の…ね…

「にやりん」

つてな感じなんだ。この不知火半袖は…理事長の孫だから、僕の事知つてても不思議じゃないから…

つて言うより、この不知火のキャッチフレーズは この世に知らぬことなし！らしいから…ね。

怖いなあ…

「まあ それは置いといて… 人吉つて案外分かってないよね」  
「あのお嬢様のコトさあ」

善吉にグサグサツ！と突き刺さる… 苦笑

「何を置いとくんだよ…」

刺さってる」「？」を抜きながら答える。

「ねえ〜？劉」

「え！？僕？？」

なぜに！！！？？

「えー？わかるでしょ」「ワルい奴やっつけてめでたしめでたし？あれがそんな簡単な女なの？」

「……じゃないと思う。」

確かに、この部分は賛成だ。

「でしょでしょ そんなだったらあんたも苦労しなくてすんでるでしょ？」

なにやら… いいコンビ？

「お前らオレを差し置いて仲いいなー！！」

「そんなこと」「にやっ」「あるよ」「

下僕だよ… これじゃ… 苦笑

んで…馬鹿騒ぎをしていたら。

「冗談じゃない…めでたくなってもらわなきゃ困るんだよ…」

ボソツと声が聞こえてきた。

聞こえるように言っていない？ってツッコみそうになっちゃった…

「んん？今後ろに誰かいなかったか？後ろってか後ろの席？」

善吉が振り返る。

「え？ うん同じクラスの日向がうどん食べてたよ〜」

「だね。なんか怖い顔してたけど…それがどうしたの？」

とりあえず 聞く、

「……………いや 別に… 多分気のせいだ、」

そう言うと、食事が終わった事だし、片付けに…

「そだ とりあえずまーいーじゃない？あんたも、もうすぐお役御免なんだし。」

不知火が笑いながら言う。

「あ？」



善吉はいみが分かってないみたいだ、

「あれ？知らないの？今日の放課後学園側主催の役員募集かいがあるんだよ？2年3年の特待生を集めてね。っというか… 言ってたじゃん… HRでさ、」

「あ…寝てたからなあ…」

だそうです…

あんなに真面目そうな子供だったのにね〜

遠い目

「…なんだよその目？」

聞こえないふり〜… 苦笑

「まーまー 人吉もよかったじゃん！ 生徒会のメンバーが決まったら振り回されることなくなるしさ！」

それについては… 複雑そうだなあ…善吉…

そして… 善吉は剣道場へと行く為別れた。

でも…悪夢が待っていたんだ…

善吉もだけど、実は劉一も…



第23箱 「矯正し、強制し、改善し、そして改造してやるぞ！」（後書き）

ありがとうございました！

第24箱

「しくしくしく……うじゅっ……」

(涙) (前)

よろしくお願いします！

タイトルがわけ分かりませんが……スルーしてください！ 苦笑

善吉は他の2人とはなれて… まあそこそこぶらぶらした後、

剣道道場へ向かっていた。

「ったく… 不知火の奴 「人吉って案外分かってないよね」 あのお嬢様のコトさあ」 「だとお！？ それに劉一も知ったげだったし！ オレは2歳のころからずっとあいつのそばにいるんだ！ あいつのことは… おれがいちばんわかってんだよ！ カッ！ なんだかしらねーけど 無性にイライラするぜ！」

ほんとにイライラしながら、

ガラッ！！！！

乱暴に道場の扉を開けると…

「なっ！！！何イイ！？」

ピッカピッカ~~~~~

つて感じな道場の姿だった…

えええ！！昨日まで廃墟みたいだったのに！！善吉も同様だ。

「どうなってんだ こりゃあ… 昨日まで廃墟同然だったはずなのに…」

つて思ってたら…

「遅いぞ！善吉！！」

めだかちゃんが、清掃のおばちゃんみたいな格好で参上！

「！！？はあ」

で善吉が驚いていた…

なぜなら…

「しくしくしく……」（涙）

劉一が…なぜか縛られていた。

「何してんだよ… お前… いや！違う、めだかちゃん！何してんだ？」

とりあえず、善吉がめだかにツッコミを…

「ふむ、掃除の最中だったのだが、水を替えに外へ出たところばかりあってなそれだ。」

……？

「いや、わけわかんねーわ……………」

善吉はあきれていた…

助けてよ…

「ふむ、実を言うとな、目が合ったとき露骨に反らされたのでな、何か悩みがあるのかと、連れてきたのだ。」

……………

「そうなのか？」

「…みたいだよ、僕は何もしてないのに…」

シクシク…って感じですよ。

縛る理由あるのか？

不知火は？って思ってたけど 入り口で

ケラケラ笑ってたなあ…

多分あいつのせいだろう…

って善吉は考えていた。

「しかしまあ、剣道部の連中も遅いな。最近は時間にルーズな者ばかりだ。ちゃんとしかってやらんな。」

縛られている件はもう終わりみたいです、

「縛ってるのは解いてやれよ、めだかちゃん…」

善吉が…話題を戻してくれた！

神様へ 苦笑

「ふむ、大事なことだったな、御神同級生。貴様の仕草、そして雰囲気、私の知る男にあまりに似ているのだ、前にも言ったが、顔を改めさせてもらえないか？特に前髪をだ！」



うっ…

これは…まずいよ…善吉君

善吉の方を見るが…

「まあ…顔をさせるくらいいいんじゃないか？なあ？劉一？めだかちゃんかココまで言うんだからオレもちよっと気になってきた。」

えええ！！

善吉 寝返った！！

状況が状況のような気がするけど…

「ふむ、では意見もまとまったことだ。確認させてもらおうぞ？」

「えええ！僕何も言ってないよ！！僕の意見は！？」

何やら獲物を見るようになって来る猛獣がもー 一匹増えたみたいだ。

「却下だ！」「あきらめてくれ… ちょっと見たら終わると思うから…」

.....

無理だよー 全て終わっちゃっ…

THE END...? YOU ARE DEAD...?

などが頭の中をよぎっていた...その時!!

「こんなにボロボロにされて 引き下がれるか!!」「コラアアアア  
ア!! たのもー!!」「更生なんざしねーぞー! やれるもん  
ならやってみるやー!!」

つと言いながら、三年生方が入ってきた!

んで、勿論この状況に...

「.....(なぜこの状況!?)」「」

フリーズしてたみたい... 苦笑

めだかはと言うと...露骨に嫌な顔を... いや、邪魔されて怒ってる  
顔だね。

「...いいだろう。私は誰の相談でも受けるし誰の挑戦も受ける...」

信念があるから…先に挑戦してきた、3年生の方を優先したよ  
うだ…

って…よし…!

「いまだね…」

縛られたままで!この場からエスケープ!!

「!」「あ!」

脱兎のごとく逃げ出した劉一を不覚にも逃がしてしまった、めだか  
ちゃん…

「……………」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……………」

なにやら道場が揺れて…る?

「なん…だこれ?」「地震か!?」

ざわめいているね〜

「貴様らのせいだ……………」

めだかが呟く…

「「「?????」「」「」

何のことが分からない…様子…　そしてさっきのプレイ？もよく分からないし…

「…まあ…今回はこれくらいで…ふむ、よかるう。では今日は素振り100万回だ!!」

「はあああ!!!3ヶタ増える!!!今日中に終わるのかよ!!!」

これはもう講義!!!桁が半端ないしね〜　苦笑

「貴様達!邪魔したから特別にボーナスステージを設けてやったのだ!当然だ!!」

( ( (なんだそれ!!!) ) )

そして…

ぎゃああああああああああ!!!

マタマタ…悲鳴が木霊していた…

善吉　s i d e

で…　善吉は…

(劉一の件はとりあえず置いていたとしても…(いいのか?) 剣道部の連中見ると これじゃまるで 俺が間違ってるみたいじゃねーか)

善吉は本当は、めだかちゃんに…めだかちゃんを否定しようとしてきたんだった。

みんなお前見たいに才能に恵まれてるわけでもない!

絶対にいつか痛い目見ると…

しかし、実際はあの3年生達はなんだかんだ文句言いながらも…更生しないと言いながらも…

道場に戻ってきていた…

だから間違ってるみたいと感じたようだ。

そして。生徒会室での言葉を思い出していた。

《私には貴様が必要だから そばにいてほしいだけなのだ》を…

「ち…馬鹿げてる…」

アイツにオレが必要だったことなんかない、思えば昔から気付けば人の上に立つ奴だった。その圧倒的なパラメーターゆえに絶対王政さながら振る舞いゆえ妬まれながらもやつかまれながらも清濁併せ飲むその見事な生き様に結局は誰もがアイツを好きにならずにいられなかった…たとえどんな痛い思い、痛い目を見たとしてもきつと

あいつは意にも介さず それからも…同じように生きていくのだから。

本当はわかってんだよ！

間違ってるのは確かに俺なんだ。

以上…善吉君の回想でした！ 長い？ 苦笑

しかし…

考え込んでいたからこそ…

ドガッ！ グシャアアアッ！！

後ろからの襲撃に気付いていなかった。

「ったく… ホンツトアテにならねえ… 生徒会は！ 僕は追い出せつつって頼んだんだぜ？ 雑草育ててどうすんだよ アホが！！」

襲撃したのは… 同じクラスの日向だった。

S i d e o u t

第24箱

「ししくしく……しゅう……」

(涙) (後)

ありがとうございました！

善吉君が……！……どーなるんでしょ…… 苦笑

第25箱 「いたい いたい いたいよー！めだかちゃん！」（前書き）

よろしくお願ひします。例によつてこの話は少し長いです。  
毎回こんな長さにはならないと思つたので。。。

苦笑

ご了承ください・・・

でわ！



第25箱 「いたい いたい いたいよー！めだかちゃん！」

不知火が、口笛を吹き吹き 廊下を歩いていると、めだかが歩いているのに気がついた。

「あれえ お嬢様ア どこ行くんですかあ？」

ぼきゅ ぼきゅ ぼきゅ っと走る。

「…………… ああ不知火か 役員募集会で演説を打たねばならんで 南校舎の第4会議室へ向かうところだよ。」

ため息を一つそう呟く。

「得意の演説！あたしも聞きたいなあ~~~~」

「私としてはそんな方法で人員を増やす気はないのだがな… 気を遣ってくれた先生方の顔は立てねばならん。」

そうは言うがやはりまだ、ため息がこぼれる…

「あひゃひゃ けど 人吉の奴は生徒会に入る気なんて更々なさそうですね？ それに、劉一もなんと！お嬢様から逃げ切れてるみたいだし」

ケタケタと笑いながら言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何だ不知火 私の事が心配なのか？」  
センスを構えながらそう聞く。

「まさか！完璧超人の黒神めだかを心配する無礼者なんてこの世にいるわけないじゃないですかあゝ あっそだ！ 人吉の奴には聞いたけど、なーんでお嬢様はあんなに劉一にご執着なんですゝ」  
面白おかしく聞いていた。

「ふむ…あやつは私が長年探している男に似すぎてならんだ。劉一と言う名、そして雰囲気などを含めてな、確認できてないのは素顔だ。あの前髪が邪魔なんだがな。」

ムスツとした表情で話す。

「へえゝ でもゝ 人吉にも聞いたけどゝ そんな 仲のよかった幼馴染だったら再会で喜ぶんじゃないかな でも 劉一ってば逃げてばかりだよ 人違いなんじゃないの??」

ケタケタ…笑いすぎ…

「ふむ… その線もあるとは思う。せつかく私と再会したというのにあの消極的な態度には気になる所だ。私は待ちに待ったと言うのにな。」

なんと言う自信家。

「あひゃひゃ 案外もう本物はくたばったりしてたりしてゝ」

なんとブラックジョーク！

「それは絶対ありえない、あの劉一だからな！私に一言もなく、くたばる奴じゃない！」

またまた…

「つつごい自信…」

流石に…不知火も苦笑気味…

「でもさあゝ 勝手にいなくなったんでしょ？後ろめたい事あったんじゃない 例えば…女とか」

ニヤリンツとめだかに言う。

「何を言う… そんなことあるわけがなかつ…」

だが、あやつはこの私の超えるべきほどの器を持つほどの男…

そして… 押しには弱い性格… 頼まれたら断れない…

「……………」

完全には否定できんな…

「ふむ… そのあたりも踏まえて、搜索するとするか、これまでの何十倍もの規模を増やしてな…」

にやり…と素晴らしい笑顔…

「……………汗ッ」

不知火も流石にココまで食いつくと思っただけなかつたのか若干…どこ  
るかかなり引いていた、

（ん） あたしは劉一がばれないよゝにするつもりだったんだけど  
ねえゝ これ 逆効果？ まっ っか）

…？本当にそう思ってる？不知火ちゃん？ 唯劉一の反応を  
楽しんでるだけじゃないの？

まあ 置いといて…

某場所では… ある人物に悪寒がかなり走っていたそうです… 苦  
笑

「まゝそれはそれでいいと思うよん でさ！剣道場の件はどうな  
ったんですか？」

これ以上は飽きたといわんばかりに、話題を変えた。

「私が戻るまでの間 自主練を言いつけておる。少々きつめにして  
やらんとな。前に邪魔もされたことだし、それに一刻も早く剣道少  
年に戻してやらんといかんからな！」

邪魔…？

「（あつ なつるほどー 劉一縛ってた時かあゝ 勘違いしたまま  
だしゝ）へー…でもその件なんですけどね そーいや

当初の差出人って一体だれだったんでしょね？」

「む？」

めだかは特に問題視してなかったため全く考えてなかったようだ。

「確かに迷惑ちゃ迷惑でしたけど、使っていない剣道場に不良がたまってたトコで実際困る生徒なんていないはずなのにねえ」

まあ…普通ならそうだと思います！はい…でも 相手はめだかちゃんです、

「知らん そして知る気もない 匿名性がなければ目安箱の意味がないし 私は誰からの相談でも受け付ける。」

そんなのなんのその、関係ないようです！

そして 不知火がそれを聞くと…

「じゃあ 例えばあたしのクラスメイトで剣道の腕は全国クラスだけど 正確に問題があって中学時代に暴力事件ばっか起こしてたって過去を持つ日向君が差出人であっても？」

まるでさ一緒ッから答えを知ってるみたいな…でも…

「一向に構わん」

だそうです。

「だったらあ…。」

不知火がウインクしながら、

「あたしの投書でも受け付けてはくれるんですよね」

そう言って笑っていた。

場所は変わり…

### 【剣道場】

溜まっていた…じゃなく、自主練習に励んでいた、男子全員が血まみれで倒れていた…

「ったくよ〜　高校じゃいい子ちゃんに通じたかったんだけどナ〜」

そう言って眼鏡を上上げる…

「だ…　誰だ…お前は…」

1人が…頭から血を流しながらも…立ち上がろうとしていた。

「僕？僕は真面目な1年生ですよ…　真面目に剣道がしたい、真面目で真面目な男です。」

そう言い起き上がるうとした男を蹴り倒す。

「だけど聞いてくださいよ！ 僕団体行動とか上下関係とか苦手です  
してね…先輩とか顧問とか揉めていっつもボコっちゃうんですよ。  
それで試合でねーの、」

そら出れないと思うね…

だって…ねえ… 真面目？

「ぐっ… それでか… 剣道部休部中のココに来たのか…」

「ピンポン！ココでなら1人で好きに出来ますからね。でも計算  
外！立派な剣道場には招かざる先客が！だから例のバケモン女と  
と生徒会長に草むしりをお願いしたんですけど いやいやうまくは  
こばねーもんですねえ！！ あっ 助けを期待しても無駄ですよ？  
今頃あの女は役員募集演説の真っ最中ですから」

用意周到だ…でも 演説後どうすんだろー？

まあいつか…

.....

1人叩きのめされたの男は…これまで…といってもたった1日だが、  
めだかとの練習を思い出していた。

自分達の…初めて頑張った姿を見てくれていた。

こんな俺達にかまう奴なんか教師にもいなかったと言っのに…

「ま…までよ…」

立ち上がる。

「勝手なこと…吼えてんじゃねえよ！ たった今思い出したわ！ オレは昔 剣道少年だったんだよ…！」

木刀をビシッ！と突きつける。

それに続いて…

全員立ち上がった。

オレも… あっ おれもだ… オレなんか日本一めぞす…

つといいながら…

「うぜえ…ドロッパアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじゃねーよ…！」

怒号と共に木刀を構えなおす！

「剣道三倍段ってしてつか！？ 僕はあんたらの3倍強いって意味だ！」



そして更に声を上げる。

「…簡単に改心しちゃ悪いの？」

日向の後ろに…男が立っていた。

「ああ…!!誰だ!!」

振り向く。

「改心する…って簡単なことじゃない。弱い自分を認めて、それでも立ち上がるってことだよ。…立ち直って何が悪い。」

劉一が立っていた。

「お前!!…いつの間にそこにいんだよ!!」

木刀を突きつけながら叫ぶ。

「…不知火の情報、凄いな、的中したよ。」

そして、倒れてる善吉を見る。

「僕の友達に何をしてくれてんだ？日向！」

そして、日向を睨みつける、

寒気が走るかのような瞳だったが、今の日向は頭に血が上っており…

「うるせえ！邪魔をすんじゃねえ！！僕は学園施設を不当に占拠してる雑草どもをむしってやってんだ！正しいのは僕だろうが！！」

そう言い、

劉一に木刀を振り上げた。

その時、

ガシッ！

日向の木刀が止まる。

「何！？ 人吉！！」

木刀を握り締めていたのは善吉だった。

「無刀取りはムリっとな… たりめーか…」

「どうやらめだかちゃんの技を真似ようとしたらしい…」

「ちょーっとなと難易度高いと思うけどな… 普通に奥義だし…？」

「善吉君！？ 大丈夫？」

「驚きながら、善吉の方を見る。」

「ん…？ああ、大丈夫…だ。…（善吉…君？ この感じは…まさか…！！）」

「呼ばれ方が気になったのか…一瞬考え込んだが、今は考えるのをやめた。」

「へえ…劉一の奴は予想外だったけど、お前の妨害は予想してたぜ。でもよー寝てりゃ良かったのによ。」

日向は後ろに下がり、劉一・善吉どちらにも仕掛けられる位置へと立つ。

「さっき…言ってたことだけどよ、お前は正しいよ日向。ただめだかちゃんも正しいよ…めだかちゃんのやることはいつも正しいんだよ。オレは2歳の頃からその正しさをずっと見てきた。後そこの劉一も知ってるはずだ。」

「うん… そうだね。 僕もそう思うよ…」

「うん… うん… 頷きながら… そう言っ…」

.....  
.....  
「……やっぱりめだかちゃんは正しかったな……お前……あの劉  
「……なのか？」

「ああ……！！！」

しまった！ 痛恨の……ミスだ……

まさか……善吉に、いっぱい食わされるとは……

「まあ……それについては後で追求するとして……」

善吉はめだかに負けないほどのにやけ顔をつくった後……日向  
の方を見る。

「ってなわけだ、俺達はいいつの正しさをよく知ってる！他人のた  
めだの人助けだの高尚な気持ちは持ち合わせていないが、もしも  
めだかちゃんの正しさを否定しようってんなら、オレはゆるさねえ  
！！！」

そう言って日向の方を睨みつける。

「……ケツ お前が許さねーからなんだっつーんだよ！」

日向も木刀を握る。

そして善吉も拳を握り締めた。

「善吉：カッコいい事言っただけ、ココは剣道場… 素手よりは剣道だろう？」

後ろで… ちょっとトリップしていた、劉一が再び始動すると… 苦笑

木刀を持って、日向と善吉の間に立つ。

「っておい！オレの見せ場取るなよ！」

「やかましい！！元々僕のほうが先だったんだし！何より！引っかけなんてするじゃないか！！誘導尋問だ！！」

「ずりーってなんだよ！それを言っただけと逃げ回ってた劉一のほうがずつとずりーじゃねーかよー！！」

「めだかちゃんにバレたらどうなるか 身を持って知ってるじゃんか！ 僕も知ってるんだ！！」

やいのやいのと口げんか…

仲の良いことで… 苦笑

「……………」

日向はせっかく臨戦態勢に入ったと言っのに…無視されてることに腹が立ったのか、震えていた。

「てめーら！！僕を無視するんじゃない！！！！」

ぐわー！！と切りかかる！

劉一は一瞬目を細め・・・

ヒュン……

間合いに入る！

ビシッ！ドガッ！！ツズギヤン！！！

さっきまで…善吉と言いつつ合っていた、劉一がいつの間にか・・・日向の後ろにいた。

「がああああ！！……！」

そして日向は…崩れ落ちるように倒れた。

「なんだ…今の…」 「あいつ何かしたのか…？」 「こっちは妖術か…？」

忘れられていた剣道部の皆さん… 苦笑

突然のことに驚いていた。

「妖術って… はあ… 今のも剣道だ、面、胴、小手…全ての場所に打ち込んだ一撃だ。あの速さなら…何が起きたのかわかんねーかもだけどな。 ってか 九頭 閃？」

善吉君解説ありがとう…でも9発もいれてないよ…

下手したら死んじゃう… 苦笑

「ふう… でも 剣道なんて久しぶりだよ。」

そう言つて木刀を元に戻した。

「…」

善吉は…信じられないようなものを見る目が変わっていた。

「…あんた達 自力で保健室にいけるかな？」

そう 聞くと皆「馬鹿にするな！」と言つた様子だ…

流石、一日とはいってもめだかちゃんに鍛えられただけはあるなあ…

ゾクッ… 苦笑

そして…善吉に肩を貸し、剣道場を離れた…

保健室へ向かう途中。

善吉は暫く無言だったが…

「……………本当に…劉一…なのか…？」

保健室へ行く間際… 善吉が確かめるように…聞く。

「…見逃して…って言っても無理だよね…？」

逆に劉一は聞き返した。最早確定って事だ！

「見逃すかよ！！一体何年探したと思ってるんだ！！馬鹿野郎！！！」

そう言っ…

善吉はうつむいた…

「善吉…」

その両目からは…光るものが…落ちていた…



「くそっ… オレはお前に一発重いやつを入れるつもりだったのに…」

善吉は…暫く、無言で泣いていた…

### 【保健室】

「…じゃあ、怪我 先生にちゃんと診てもらってよ?」

そう言っつて、保健室を出ようとする。

「お前…また消える気じゃないだろうな…」

善吉は…出て行く劉一に問いかけた。

「消えないよ…何処にも 僕だつて… 悪いって思ってるんだ…でも、めだかちゃんに明かすのはちょっと…心の準備が欲しいだけだよ。」

そう言っつて苦笑する。

「いわねーっつてんなら!オレは許さねーぞ!めだかちゃんだつてどれだけ探していたと思っつてんだよ!」

「言わないわけない… ちゃんと言っつよ。『ただいま』つて…」

そう言っつて保健室を出て行っつた…

善吉は・・・安心していた。

彼の目は・・・劉一の目は嘘をついていない目だ。

そもそも、人を傷つけるような嘘を言う奴じゃないことは一番よく知ってる。

なぜ・・・姿を消したのか・・・

「それはまた今度だな。てってーてきに問い詰めてやる！」

善吉はにやけ顔をつくり、

そして・・・

安心して・・・暫く横になっていた。

「善吉には・・・あー言ったけど・・・やっぱり怖い・・・なあ・・・」

でも・・・善吉の反応を・・・見ると・・・やはり罪悪感が劉一を襲つ・・・

傍にいる資格なんてない・・・そう勝手に思い、姿を消したのに・・・そのせいで・・・

「言わないわけには・・・いかないね・・・とりあえずは・・・」

そう呟く・・・

で！あることを思い出した！

「っとその前に！日向に木刀返さないと、あれ 多分自前のだと思  
うし！」

そう言つて、木刀を取りに剣道部のほうへ…

ん？現実逃避じゃないよ！！

ほら…あれだよあれ… 苦笑

剣道少年にとっては、木刀って宝じゃん？

.....

「さっ…いっつと…」

すたこらと 剣道場へ向かった。

「くそ… 御神劉… 無茶苦茶じゃねーか！なんだよ…あれ…  
剣道で… 僕を…」

日向は壁にもたれかかりながら、歩いていた。

「…いっつも、不知火の奴に…服従してんのに… 反則だろ！！…

・だが！」

そう言うのと気合を入れなおし、拳を握る、

「絶対に！！このままじゃすまねえ！！  
いつかギッタギッタ  
ンにしてやるぜ！！」

グググ…っとリベンジオーラを…

「いつかって、言わず 今でもいいよ？僕は、」

すぐ後ろで、劉一が立っていた！

「ひええええ！！おっ おまえ！！！！」

びっくりして 後ろに倒れこむ、

「そこまで驚かすつもりじゃなかったけど… まあいいや、はい！  
これ、」

そう言うって倒れてる、日向に木刀を返す、

「ッツ！！」

「これ 君のдаро？手入れも剣道場にあつたやつより遙かにいいし、  
手入れも良くやってる。よっぽど剣道好きなんだね？ちゃんと持っ  
て帰りなよ。」

そう言つと…

日向に背を向ける。

「まっ… まちやがねー！ー！じょーとーだ！ー！今からリベンジだ  
あー！ー！ー！」

そう言つて…木刀を振り下ろす！

なぜなら、相手は丸腰！！

今なら！！つて思つたんだろう…

でも…

フサア…

劉一の前髪を掠らせた程度で、木刀は空を切つた…

「うん… 一撃の早さも踏み込みも悪くないと思うよ。でも、道  
がついてる武道をこれ以上汚すもんじゃないよ、日向。」

そういつて、日向を見なおす。

「て…てめえは宮本武蔵かよ！！一寸の見切り！！??？」

更に驚いていた…日向君。

「はあ…だれが…武蔵… まあいつか、君には後でめだかちゃん  
に説教をしてもらつた方が良さそうだ、僕より、効き目があると思  
うしね、」

そついうと露骨に嫌がっていたのは日向君、

まあ、知らないけどね

匿名で目安箱にでも入れておこう！

「さて… 木刀も返したし…善吉も保健室、情けをかけるのは日向に失礼だし… よし 帰るかぁ！」

ぐーっと…腕を伸ばし…

歩いていこう…っとしたその時…

だれかが… 帰り道をふさがんとするよーに…

立っていた…

わなわな… っと体を震わせて…

え“え”…

「りゅ…りゅういち…」

めだかちゃんだ…

あれ…

何度も…顔を合わせてるし…

初対面じゃあるまいし…



抱きしめながら… ただただ泣き続けた…

ミシミシミシ…

ミシミシ…

ミシ…

ボキ？

「いたいいたい！…いたいよー！…めだかちゃん！…」

前も…あつたなあ… こんな…あの時の比じゃないけど…

つと薄れ逝く意識の中で…

ひええ！ 気絶できない！！

「いたあー！ーい！ー！ー！」

ひええええっ！…！！…！！…つと叫ぶ劉くん。

「うわあー！ー！ーん！ー！ー！」

感慨極まり嬉し泣きを続けるめだかちゃん。

この…パワーアップ版、鯖折は…

暫く続きました…



・  
・  
・  
・  
何せあの時と違い、止めてくれる人がここにいないしね・・・

第25箱 「いたい いたい いたいよー！めだかちゃん！」（後書き）

ありがとうございました！

ついに・・・ばれちゃいました・・・

早いかな？ 苦笑・・・

まあ・・・このタイミングくらいしか・・・思いつかなくて・・・

苦笑

第26話 「言い話だよ?でも… 僕の状態はちょっと…」 (前書き)

よろしく願いします!

ばれちゃいましたけど・・・ 何とか頑張ると思えます!きっと!  
!・・・多分・・・ 苦笑

でわ!

第26話 「言い話だよ?でも… 僕の状態はちょっと…」

「今まで… 何処にいたのだ!劉一!!」

暫くして… やっと落ち着いたのか、力が緩むそれでも抱きしめながら話す。

「いたい…」

シクシクシク……………

うっ…

っと泣いてるのは劉一くん… 苦笑

「いたいの分かっておる!私も劉一とはずっと一緒にいたかったのだぞ!」

そのいたいじゃないよー！

って言いたかったけど…

今日はもういいです…はい…

とりあえず…

痛みは我慢我慢… 苦笑

「ごめんね…？めだかちゃん… いや…」

そして、劉一もめだかを抱きしめる…

「ただいま…めだかちゃん…」

「…！おかえり…劉一…」

暫く…

泣き続けるめだかちゃんを 抱きしめていた。

本当に鯖折されたところは痛かったけど…

僕は…本当に、なんて愚かだったのだろうか…

いる資格がないと勝手に決め付けて… こんなに…皆に心配かけて…

そして… ただいまの後は… 暫く誤り続けた…

そんな僕に…

めだかちゃんは頭を撫でてくれた… 撫でてあげてたように…

そして…

その後、

日向の説教が始まったのは暫くたった後だった。

勿論してたよ？めだかちゃんなら当然だと思っ…

日向の悲痛な叫びが木霊していたなあ…

その後…

どんなやり取りがあったものか…

剣道場は皆で仲良く使う事になったらしい… 剣道部（仮）！ってことで 苦笑

なんと日向が指導を勤めているそうだ。

まあ、妥当なところかな？

更に言うと、「いつか 劉一を越えてやる！ それに あの女…  
・ いやっ！別にあの女に頼まれたわけじゃないからな！！」

わかりやすいツンデレ・・・劉一とめだかの影響のようだ。

めだか生徒会長就任後本の数日でそんな顛末・・・その上劉一の帰還・・・

それは善吉にとある決心をさせるのに十分だった。

「・・・あれ？この花はなんだ？」

ここは・・・

### 【生徒会室】

善吉が昨日まではなかった花を見てめだかに聞く。

「うむ これから生徒会業務を行ううえで指針としてな 案件を解決することに花を一厘飾ろうと考えた。とりあえず2輪だ」

センスを構えながら言う。

「は 女の子らしいところあるじゃねーかよ。失敗した時は動すんだ？枯らすのか？」

善吉は苦笑気味にそう言っていた。

「失敗などしない・・・しても考えない・・・」

めだかは笑顔になり・・・

「いつか 見渡す限り一面に花を咲かせるのが・・・今の私の夢だ・

「」

本当に・・・素晴らしい笑顔・・・

うん・・・善吉が見ほれるのも無理はないな・・・

でもね・・・

「・・・良い事言ってると思うよ？いやぁ・・・本当にさ！でも・・・  
なんで僕・・・縛られてるのさ・・・」

ぐるぐる巻きにロープで縛られている劉一君が哀愁を・・・漂わせながら呟く・・・

「劉一はこれ位しておかないと、また消えるかもしれないのでな！  
当然だ。前叶った夢をいきなり消すのは絶対いやだからな！」

めだかはセンスをビシッとこっちに向ける・・・

「・・・消えないよー もう絶対にさ・・・ 善吉・・・」

しくしく・・・といった感じで善吉を見るけど・・・

「諦める・・・」

当然だ！っといわんばかり・・・

さっきまでの空気は何処へ？

「でも・・・めだかちゃん？あの・・・ 昨日の募集会でなかった



んでしょ？結局役員は増えなかったそうだよね？不知火が言ったけど……」

言っても解いてくれそうにないから。

まあ 先に進めようか・・・ 苦笑

「構わない もとより 私は貴様たちを置いて他の誰とも組むつもりはない！」

スパっと言い切る！

「劉一はともかく、お前は何でそこまでオレにこだわるんだよ 俺なんか唯の幼馴染で言っちまえばあいつらと同じ他人じゃねーか！」

「なんで、僕はともかくなんだ！ 家族のようだったじゃないか！  
……ちよつとの間だけけど……」

最後の方は・・・少し声が小さくなったなあ・・・

まあ 失踪してたからね……

「おかしなことを言う・・・ 私は貴様が他人だと思った事は一度もない、劉一もだ。・・・善吉 貴様は私が2歳のときからずっと私の心配をしてくれている、貴様だけは代わらずわたしの事を守ってくれている・・・ あの時からずっとな・・・そして、劉一は私が超えるべき男だ、そして、失われたときは戻らない。これからはお前たち2人は常に側にいてほしいのだ。」

.....

善吉も・・・劉一も・・・顔を赤くする・・・

ここまでストレートに言われたらネ・・・でも・・・

「超えるべきって・・・」

嫌な予感しかしないよ・・・

「つたく・・・振り回されてやるよ！もちろんお前も一緒だろうな！？劉一！」

善吉はOKだ・・・もともと、善吉もめだかちゃんのが大好きなのだ。そして、劉一のことも・・・

「はぁ・・・まずはこれほど欲しいけど・・・僕もOKだよ・・・ずっと探してくれてたし・・・恩返ししないかね？」

劉一もOKをだす。

「やりやーいんだろーがやりやー！その腕に巻いてる奴よこせ！俺が・・・俺達がこの箱庭学園ガーデンを花畑にしてやっからさっさとよこせ！」

照れ隠しだね・・・

「・・・ふん ひねくれ者どもめ ずいぶん気を持たせてくれたではないか、だが、礼は言っておくぞ！ ありがとうっ！！！！2人ともおっ！！」

そう言っ  
て抱きつ  
いてきた  
!!

真骨頂その？ 『ツンデレ』発動だ・・・

そして・・・劉一・善吉ともつれ合いながら・・・抱きつきながら  
倒れこむ・・・

「あらためて お帰り。劉一・・・」

耳元で・・・めだかはそう囁いた・・・

劉一は黙っていた以前までの自分を本当に愚かだったと感じていた。

「あ、でも ちゃんと庶務トッケッからなのな。」

善吉に渡されたのは庶務の腕章。

「うむ！手柄を立てて這い上がれ！っで・・・劉一はこれだ！」

なんと！副生徒会長！？

「いやいやいや！早いつてそれは！」

「なんでだよ！劉一だけ！！！」

それぞれの反応・・・

「む？私が渡す腕章が要らないというのか？そして 善吉は不満があるのか？」

何やらジト目のめだかちゃん・・・

善吉はうつ・・・って感じの表情だ。

「ええつと・・・副って生徒会長の対抗勢力だよな？役職的に、」

「うむ その通りだ！私の超えるべき男に相応しい役職だろう？」

凜！つといってるみたいだったな・・・

「僕が・・・めだかちゃんの対抗勢力になると思うの・・・？たぶん ギブアップするよ・・・ これ？単純な話じゃないんだからさ・・・」

昔やってた格闘の組み手とかゲームとかと違って・・・

「貴様が本気になればどおってことなかるう！」

・・・うつ。

「僕は・・・めだかちゃんの味方でいたいだけなのに・・・ 対抗

勢力なんて……」

ちよっと……悲しそうな目をする……

「ツツ！！！」

めだかちゃんが動揺していた……

あの時のような目！！

劉一 真骨頂！哀愁目！？

わけわからんわああ！つと突っ込まれそうだけど……

「ふ……ふむ……」

めだかちゃんは考えていた……

「カ……オレの話しは終わりかよ！」

善吉は1人どくれていた……

「そーだ、めだかちゃんの補佐？的な立ち居地じゃ駄目かな？ あ  
るのって会計と書記……そして副生徒会長だよね？ どれも当て  
はまらない気がするんだ、」

劉一は善吉の事は置いて……話を進める……

へ？縛られてた時助けてくれなかった事を怒ってるわけじゃないよ？

多分ね．．．．．

とりあえず劉一がそう提案するが．．．

「だが、決まりはこの5つの役職だけだぞ？決まりを破るのは関心せんな。」

「大丈夫、理事長ならOKしてくれるから。」

サラッとそう言うのは劉一くん。

この学園に入るなら要望は叶えるといっていたし、これくらいなんでもないだろう。

「ふむ．．．理事長が問題ないというのなら．．．学園のトップだからな．．．だが、駄目といわれたら、貴様は副生徒会長だぞ！？」

「ん．．．そうなったら．．．仕方ないね．．．わかったよ。できるかわかんないけどね。」

そう言う結論となった。

ルールとは変わっていくものだ．．．

不知火理事長は。

「特に問題はありませんよ？」とあっさり、OKを出してくれた。

．．．．．

劉一を仲間に引き込む・・・

そう言っていた時を考えれば、何やら不自然な気もする・・・

でも、これで・・・生徒会は、

生徒会長・黒神 めだか

生徒会長補佐・御神 劉一

庶務・人吉 善吉

その3名となった！

善吉は・・・隅っこでブツブツ呟いていた・・・まだ どくれてた  
んだね・・・ 苦笑

第26話 「言い話だよ?でも… 僕の状態はちょっと…」 (後書き)

ありがとうございました!



第27箱 「今日中に突き止めてやるぞ！」（前書き）

よろしくお願いします!!

さてさて…

生徒会業務を…

頑張れ！みんな！

でわ！

第27箱 「今日中に突き止めてやるぞ!」

とりあえず…善吉と劉一がなし崩し的に生徒会の役人となって、一週間が経過した……

んで…何やら善吉は鏡の前で…

「うーん ーんー」

何やら唸ってる…

「何やってんの？ナルシストに目覚めたとか？」

そこに劉一くんが、

「ンな分けあるか！ でもよ… やっぱりサマになんねーだろっ？うー  
大体オレって黒の制服はな…」

だそーです。

「ああ だから制服白のこじにね、でも 黒も似合ってると思うよ  
？」

「そーかー？」

とりあえず… ファッションに疎いんでテキトーに言ったんだけど  
ね。

バレテなくてよかった！ 苦笑

で… そこになにやら影が…

「ふむ テキトーは良くないぞ？劉一、 だが的を得ておる。私も  
善吉には黒が良く似合うと思う！」

！！！！！！

「どうわっ！！」「ええええ！！」

びっくり！！急に後ろに立たれると！！

「だからなんでいつもお前はいきなり後ろにいるんだよ！！それと  
！！劉一！！お前テキトーだったのか！！」

「ええつとおーなーんのことかなあ？？」

ひゅ〜

口笛を吹き吹き

「こつちを見やがれってんだ！」

「めだかちゃんか読心術使えるの…忘れてたよ…」

「話をそらすな！！」

善吉君…ご立腹だ〜

「む？私はそんなもの使えないぞ？」

え？

「ええー 嘘だ！だって…僕のことバレてるじゃん！」

「まあ お前は顔に出るからな、だからだ！」

！…！！

そーなんだ…

「オレを無視してんじゃねーって！」

善吉君まだまだご立腹！

「落ちて着け善吉よ。後できつく劉一には言っておく。それに見てく

れが気になるなら内側にジャージでも着てみればどうだ？きつと格好良いであるっ」

劉一を睨みつつそう言っ…

「へっ…」

きつく… やだなあ…

「？ 何を馬鹿な…」

凹んでいる劉一にちょっとだけ…同情の目で見る。

まあ、ちょーっただけだけッポイけどね。 苦笑

「ん… それはどうだ」「デビルかっけえ!!」「…ええ?」

反骨精神の塊みたいだー！っとか何とか叫んでる…

いや…ファッションセンスあるかい？って聞かれたら…ちょっと困るけど…

「それはないと思うよ？善吉。」

「ああ、それもテキトーか？」

「これはほんとー！」

「へっ！お前にはこのセンスのよさがわからねーのか？」

「うん。」

「そんなストレートに言うな！！オレは気に入ってる！！」

「まあ…本人がいいなら…いいんじゃない？」

「なんで「？」が入るんだよ！」

とま—色々言ってるよ…

「ひとまず 善吉は落ち着け、で、劉一…」

ガシッ！

頭をワシづかみ…

「……！！」

「テキトーなコトを言うのは感心しないぞ？私が自ら説教をしてやるぞ。」

「うわー！ーん！ごめーん！ー！」

劉一の悲痛な叫びが木霊した…

善吉は流石に… 止めてくれたけどね… 暫くしてだけど…

で…

めだかちゃんはずっきりしたのか…

仕事に戻っていった。

「さて、説教も終わったことだ、目安箱のチェックだ。明日からは目安箱の管理は善吉、貴様の仕事だぞ。本生徒会の最優先事項なのだから、くれぐれも手を抜く出ないぞ？ ……で劉一！貴様も善吉をフォローしてやってくれ。私の補佐だと思ってやってくれ。」

「…はい…」

劉一はげんなり…しながら返事を…

善吉は若干苦笑気味だった。

で…… 記念すべき最初の依頼は…

今回は匿名じゃなかった。

「ふむ…どうやら今回はきちんと記名してあるようだ。」

そして依頼者を生徒会室に呼んだ。

「あの…ごめんなさい。本当はこんなこと下級生のあなた達に相談するようなことじゃないかもしれないんだけど… 剣道場のこととか友達から色々聞いて…」

申し訳なさそうに聞いてきているのは依頼人である。

2年9組 陸上部所属 有明先輩。

「あはは… 問題ないよ！逆に、僕達なんかでいいのかな？って思ったりしちゃうくらいだよ…」

苦笑しながら劉一が答えた。

「／／あつ…いえ… そんな…」

顔を赤くしている有明先輩。

「…ん？」

不思議そうに見ていると…

ドゴン！！

めだかちゃんの拳骨炸裂！！

「い…痛いよ… なんでえ…」

頭を抑えながらダウン！！哀れ劉一君… 苦笑

「さあ！遠慮はいらんぞ！！ 構えるな！私は誰の相談でも受け付ける！」 偉っ



「う…」

(なんで…こいつは上級生に敬語使わないんだろ？それに 劉一は大丈夫か？結構すげー音してたし)

(なんで…私…睨まれてるんだろ… ちょっと 彼がカッコいいなって思っただけなのに…後なんでこのコは制服の下にジャージ…？)

それぞれの思いを胸にしまい… 苦笑

まあ…とりあえず、話が進まないの…

めだかにちよつと怖がってたけど…

「ええつと… それで…相談はね、このことなんだけど…」

そう言って取り出したのは…

ボロボロのスパイクと「リクジょう部ヤめ口」と書かれた紙…

「これは…」「酷いな…」

復活を果たした劉一とめだかが紙とシューズを見ながら呟いた。

「私 今度の大会で短距離走の代表に選ばれて… 二年生で代表に選ばれるなんて滅多に無いことなんだから… 凄くうれしかったんだけど…」

顔を少し暗めながら…話す。

「三日前… スパイクがこんな風にされて…」

「…そ…うっ！！」

ギロツ！

で… 劉一が何か言おうとしたら… めだかちゃんに睨まれた…

「仕事だから… 勘弁してよ… てかなんで叩くのさ…」

「ふん！ま！仕方あるまい！！」

露骨に嫌そうだ。

「だが、次いちゃいちゃしたら許さんぞ？」

「いつそんなのしたのさ…」

(うっ… カッコいいのに 見たら… 彼が怒られちゃう… 下手したら… 私も？ 気をつけよう…)

つてまあ… そんな話だったっけ？

話を戻そうとしてくれたのは…

「…で？犯人の心当たりは？」

善吉でした

「あつ！ああ…それが…わかんないの…スパイクなんて…更衣室だし置きっぱなしだし誰にでも出来るし…てゆーかみんな怪しいし！この箱庭学園の部活動は伝統的にレギュラー争いが激しくてさ…レギュラーに選ばれたとたん皆からシカトされるなんて通過儀礼なんだよ…？だからあたしも…覚悟はしてたけどでも…まさかここまでされるなんて思わなかった…」

たしかに…陸上とは個人種目。

その協議には1人しか出られない、成績のよいものが出されるのは当然だ…

そして…妬むものも…出るだろう。

「随分長い間愛用していた靴のようだがこんなことをされては練習がきんのではないか？」

めだかが…そう聞いていた。

「…今はスニーカーで代用してるわ。こんな事顧問の先生には話せないし…問題抱えてる生徒なんてレギュラーから外されちゃうかもしれないし…」

そして…涙を流した…

「第一あたしこんなことしたかもしれない人たちと一緒に練習なんか出来ないよ！皆怪しくて！誰も信じられなくて！不安で不安で…夜も寝られないんだよ！？」

それは…

確かに… その部活動にかけていなければならないほど… 好きでいなければならないほど…

不安感が増えていくだろう…

「有明先輩… めだかちゃん！善吉！！」

「うむ」「ああ」

劉一が2人を見ると頷く、

「安心しろ有明二年生眠れぬ夜は今夜で終わりだ この黒神めだかが今日中に犯人を突きとめてやる！！」

第27箱 「今日中に突き止めてやるぞ!」 (後書き)

ありがとうございます!

第28箱 「何で伝わんねーかな…」のカッコよさが…」（前書き）

よろしくお願いします!!  
ちょっと長いですが…苦笑



んで…

「なんつーか スポーツつてのも案外爽やかじゃねーんだな 生徒会選挙の時も怪文書 出回ったりとか色々あったけどさ…」

「そんなのあつたんだ… まあ めだかちゃんには効かないだろうけどね。」

うん… 間違いなくね。

「まあ、それはおいといて…「善吉からふつたんじゃん…」…うるさいな…とにかく！今日中にとか大丈夫なのかよ めだかちゃん。また大言壮語しやがって この程度の材料じゃ犯人特定なんてまずムリだぜ？ 代表選手に指名された直後の犯行つてとこを見ると まあ 陸上部の女子の誰かなんだろーが そんなの何人いると…」

まあ…普通はそうだけど…

「善吉つて…やっぱ不知火が言つてるとーりあんまわかってないじやん…」

「んだとー！」

「何… 劉… 貴様… 不知火と…？」

なにやら…また怒ってる…



「何にもない 何にもないよ!!!それより!!!犯人のこと!!!」

「ふむ… 貴様については後に聞くとしよう。」

ひええ!!!

「で…犯人のことだがそれは「陸上部女子」で「陸上歴はそれなりに長く」「短距離走を専門」とし「左利き」で「文車新聞を購読し」「23地区に住んでいる」…誰かだ」

「…はあ…?なんだそりゃ。」

善吉はチンプンカンプン…

「ん… そうだね。 後は有明先輩の同種のシューズを使っていると  
思うよ。 後、有明先輩の先輩って可能性もあるね。」

付け足しているのは劉一。

めだかちゃんはやちょっと怖いけど…仕事はしないとね!

「はあ? 劉一までなんでだそりゃ…」

善吉はやっぱりチンプンカンプン… 苦笑

「ふむ… そうだな、見逃していた。やはり流石だ劉一。」

「まあ 先輩の先輩ってのは唯の勘だけだね。後輩に抜かれる…って言うのは結構効くらしいからさ。」

劉一は苦笑、めだかは久しぶりの流石だ！がでた。

で…劉一は大丈夫なんだけど… 善吉が追いついてこないから、めだかちゃんが説明を。

「この靴はハサミで切り裂かれておる。その切り口を見ると一目瞭然だ、左利き用のハサミが使われておる。そして 劉一が言っておった愛用者の根拠はこれだな… 的確に縫い目に刃を入れて履き古した靴が何処から傷んでいくか…熟知しておらんとこうはいかん 自らの足で長期間同じスパイクを同じようで使用しておらんな、そして なにより…これだけボロボロに切り刻んでおきながらメーカーのロゴに傷一つない おかしな言い方だがこの靴に対して愛着を持つものであることが伺える…だろう？」

「そ！僕もそう感じたよ。メーカーにこだわる人も多いしね。」

うんうん頷きながら答える。

「…で それはそうと 文車新聞がどうとかつてのは？ 大方その切り口から推測したんだろうがこんなパーツだけで何が分かるんだ？」

善吉が聞く…

「ちょっとは考えようよ…」

あきれてると…

「わかるかあ！！」

力いっぱい反論を… 苦笑

「まあ、仕方あるまい。それはだな、「オモテ」は一文字ずつでも新聞は「ウラ」にも記事がある。透かしてみる。」

そう言い善吉に渡す。

善吉はそれを透かしてみる。

「んん… ああ、まあ… 見えるけど？」

「それぞれの切り抜きの裏面の十数文字から特定する限り一日分ではなく、ここ一週間ほどの文庫新聞がアトランダムに使用されておる。この手紙を作るためにわざわざ新聞を買ったのではなく… 家にあつた古新聞を使ったのが妥当であろう。」

… 善吉は… そろそろ、汗が… 苦笑

「家が… 23地区つてのは？」

「だーかーらー… ちょっとはs」だからわかるかっての!!」「

割り込まれた… 苦笑

「ふむ… では 劉一が説明してやればよい。」

「え？ 僕？ 仕方ないな… えつとね 新聞って言うのは印刷する時間帯によって記事の差し替えが行われるんだ、もら！ 事件がおきて… それを報道したんだけど… すぐ犯人が逮捕されたりしたりしたら記事の差し替えとかしないといけないでしょ？ で、切り抜かれた

のは23地区のみに配られてる奴だつてめだかちゃんは言いたいつて事だよ。」

「うむ、その通りだ。」

.....

(こいつら…推理力がありすぎて 気持ち悪い!! つーか全新聞の全記事を覚えてるのかよ…)

「？」

「あれ…？めだかちゃん読心術使えるんじゃないの？」

善吉がなにやら あきれた感じでみてたから… 苦笑

「使えるわけなかつ。だから 貴様は顔に出るのだ！」

「えええ…」

僕限定なのかな… はた迷惑な…

「…迷惑？」

「いえ!!ウソデス!!！」

ほら… 僕だけだ… (涙)

「まあ、それはともかく これらの条件に当てはまるものの数はさほど多くあるまい 探し出して 見つけ出そう… 他人の努力を否定する行為 頑張る人間の足を引っ張る行為 私はそういう行為が大嫌いだ！」

そういうと…めだかちゃんの怒りの熱気が…持っていた珈琲に！！

珈琲は沸騰している！！すっっ… 苦笑

「私は怒っているぞ！！劉一！善吉！ 目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！！！」

「うん… 穏便にね… にしても… 確かにめだかちゃんの意見には賛成だね。 他人の成功を…努力の結晶を否定して…踏みにじるなんて許せないよ。」

劉一も珍しく… 少し…怒ってるようだ。

「うむ！！！」

「（2人ともすげー熱気だね。 まっ）さっさとやっちまおう。」

そして部活動の時間…

「陸上部所属 3年9組諫早先輩 有明先輩と同じで短距離を専門とするアスリートで 利き腕は左 同じスパイク履いてるのは見ての通り！」

タオルで顔を拭きながら歩いていた先輩を見ながら…言っているのは不知火!

「お住まいは23地区で3年前から文車新聞を好悪毒中… だってさ」

「あはは…さすがだね。」

「ってか いつも思うんだが 不知火 お前 どころか、そういうの調べてくんの?」

それ聞いちゃうの?

それは…

「あひゃひゃ 人吉が正義側のキャラでいたいのなら それは知らない方がいいね」

「この世に知らぬことはないらしいからね、そこは軽くスルーしよ。」

「そゆこと」

.....

「貴様ら…仲が良いようだな…」

.....

「ええええ！ちょっとまった！ 友達だよ！ね？ね？」

「えええ どころかなあ」

不知火がそう言うのと…

めだか・パンチ発射体勢…

「えええ！めだかちゃん！今駄目… 見つかったっしょよ！！！」

両腕で×のポーズを！

「これを終えてから… 聞くとしよう。」

とりあえず… 今は見逃してくれたみたい…

(不知火…勘弁してよ…)

(あひゃひゃ ラーメンでいいよ)

(分かった…よ…)

(良い様に使われてんなあ 劉一…)

善吉は苦笑い…

「まあ 犯人はきまりだな。劉一が言ったことも当たったな、三年が二年に抜かれちゃ屈辱だろうしな、意外とあっけなかったな」

ん…でもね…

「しかしだな 善吉、コレは実質的な証拠はまだ何も無いのだ。ほとんどと言つ言葉の意味は絶対ではない 状況証拠だけで他人を悪人と決め付けるのは良くないな。」

その通りなんだよね…

まあ… 99、999999…%だけど、100にならないのは物的証拠がないからだ。

「上から目線性善説もいーけどさ 物的証拠なんて集めようがねーだろ 俺ら警察じゃねーんだからよ！」

「まあ…そうだね。で…? 不知火は何わくわくしてるの?」

不知火が何かを期待してるような目で見ている、

「えー なんでもないよー」

説得力無いよ… 苦笑

「んで? どーすんだ? 実際。まさか本人に聞くわけにもいかねーし…ん?」

「あ“!”」

「おお!!--」





…っの前に…

「ところで人吉！」

珍しく不知火がキリッとした表情を！

「あ!？」

「ん?どしたの?」

珍しいな〜と思っていたんだけど…

何かと思ったら…

「なんで制服の下にジャージ着てんの?ヘンだよ?」

それが… 今に言っていたいことって…はあ…でも!

「そつだよね!やっぱりそつだよね??」

間違っていない感性にちよつと喜ぶ!

「お前らあ!今言うことかよ!」

善吉は怒ってたなあ〜 苦笑

めだか・諫早 side

無我夢中で走る！

(ど…どうして こんなに早く私の事が…)

ひたすら全力で走る！

…で、ふと後ろを見てみると…

「！！！！ええっ！ ええええええっ！？」

いつの間にか追いついてきている我らが生徒会長！

ドドドドドドドッ！つと… グンッ！つと走る！

「ウツ ウソでしょ！？ あたしっ 100m走12秒フラットなんだよ！？」

陸上部でもない生徒会長のまさかの脚の速さに驚愕しながら叫ぶ！

「そうか やるではないか 私はフルマラソンを2時間フラットだから 100mあたりは17秒以上掛かるぞ！」

全く息も乱れぬ様子！！

距離はどんどん縮まる！

「ええええ！！ (どうしようどうしようどうしよう！この「確か新しく生徒会長になった黒神めだかじゃん！ 就任していきなり剣道場にタム口していた不良たちを肅清したって噂の！！ あ…あんなこと… あんなこと バレたら殺される！！！」)

頭に浮かんでたのは… 後輩の有明に… ロッカーに… 自分がしていたことだ…

その間めだかは！

「もっとも個人的な好みでいえば 競争ランよりは高飛びジャンプの方が好きでな」

タンツ！！

そういうと…速度はそのままに…諫早を飛び越えた！

「！！！！！！」

呆然とする…

うん… ありえないよね

「さて 聞こえなかったようなのでもう一度聞こう…  
生 貴様が犯人か？」 諫早二年

ガガガ！！ツともの凄い眼力で睨む！

（殺される！！）

まっ、そう思うのも無理はないね。

すっごい睨みだから… 眼力だけで… 苦笑

「ちっ 違う違う 知らないって！あたしそんなの！！ 有明さんのスパイクにハサミなんて入れてないし！」「陸上部やめろ」なんて手紙出してない… って！！！」

あっ…墓穴…

（あああああ！何いってんのあたし！ きかれてもないことわざわざ…！！）

もー！ツて感じだ！

それを聞いてめだかは…

「……………そうか 知らないと言うか…」

スパイクを突きつけながら… そう言う。

「ひい！（殺される…）」

目を瞑ってしまったのも無理ない…

でも 返ってきた言葉は意外なものだった。

「知らないのであればそれでよいのだ。練習の邪魔をして悪かったな。」

めだかは肩を叩き、練習を邪魔したと詫びた。

.....?

「え?...え? あ...あの ちょっと...」

意外...すぎる言葉に戸惑いながら言う。

「? どうした 何か様か?」

めだかは振り向くが...

「いつ いや そうじゃなくて...」

まさか...告白など...怖くて出来ないし... 苦笑

「ああ そうそう言い忘れていたな さっきは本当にいい走りであったぞ 貴様の普段からの鍛錬の程がうかがえる その調子で精進し続けるがよい! 私は頑張る人間が大好きなのだ!」

めだかは笑顔で...そう言った。

そして...その場を離れていった...

「な...なんなの... あのコ わっつけわかんない 人を疑うってことを知らないの...?」

残された諫早は...自然に言葉が出ていた...

その後ろから...

「やつぱ… めだかちゃんの読心術は僕のみ効果があるんだ…  
ずるいよ…」

「それについてはあきらめろ… しかたねえ。」

近づいてきているのは2人の男。

「え…？」

諫早は振り返った。

「諫早先輩 めだかちゃんは人を疑うことを知らないんじゃない  
人を信じることを知ってるんだ!!」

振り返る諫早先輩にそう伝えた。

「……………きみ… きみは なんて制服の下にジャージを?  
へんよ」

つて…

「今言うことかなあ…?でもほら 善吉!2人目だよ?」

少し笑いながら答える。

「うるさい!劉一!!それに… カッコいいって言え!!」

求めちゃ駄目でしょ… 苦笑

あつ ファスナー閉めてジャージ隠した！ 苦笑

「…めだかちゃんは行為を嫌うことはあっても人間を嫌うことはないんですよ。ま 中学時代まではあいつが見逃した悪党どもをぶちのめすのが俺の仕事だったんですけど 今の仕事は目安箱の管理らしいんでね。今回だけは俺も会長の流儀にならうときますよ。」

そう言うつと善吉も離れていく…

「あ…んたは もう二度とあんなことをしねえつて 信じといてやる！」

そついい残して…

「ん…僕もだね。他人に嫉妬したただけで… 何も自分は努力してなくて相手を妬んでるだけだったら… ちよつとお灸をすえようとして考えてたけど… 貴女はそんなことないよね。物凄くフォームも綺麗だし、めだかちゃんじゃないけど日頃の積み重ねがよく見えるよ。人は…反省は簡単に出来るけど、改心し続けるのは思いのほか難しいと思うんだ…」

そう言い…劉一は諫早先輩を見つめた。

「僕はこれからの貴女の行動をよく見ておきますね。僕も信じてます。」

善吉とともに…劉一も離れていった…



「……………あたし あたし…は…」

諫早は… 暫く泣いていた…

……………

ん？不知火はつて？

帰っちゃったよ… 走るのお腹すくし嫌やなんだって… 苦笑

翌日…

### 【生徒会室】

善吉は…鏡の前で自分の姿を見る…

「くっそー どうして伝わんねーんだよ！このかつこよさが…」

横で書類を整理中の劉一君はボソツと

「もーノーコメント！」

と一言！

「聞いてねえって…！」

そんなこんなで今日も生徒会業務中に…

「あの… 劉一君… 人吉君…。 ちょっといいかな？ あ…それ  
カッコいいよ？ 個性的で…」

あ…ついに同情の目？

「あっ！有明先輩！」

照れくさそうに隠していた。

「個性的…確かにね…」

「あ…ははは…」

若干苦笑気味…

「ど…どうしました？何かまた変わったことでも…？」

そう善吉が聞く…

まさかまた…？

気になった劉一もすつと立ち上がる。

「う…うん。それが…その… 今度はロッカーから代用してたスニ  
ーカーが無くなって…」

「…！？」

驚く表情を… 仕方ない… まさかあれで再犯するなんて…

でも それは杞憂なのだとすぐに悟った。

「それでね… 代わりに新品のスパイクとこんな手紙が入ってたんだけど… どういうことだと思っ？」

出したのは… 新品のスパイクと「ごめん」の文字の入った手紙。

「ああ……………」

「はは……………」

善吉と劉一は笑っていた… そしてもう一輪の花の準備を…

こうして事件は無事解決した 有明先輩も今晚からはぐっすり寝れるだろう。

だけど… 1人気がない人が…

「おのれ 犯人め 今度はスニーカーを盗むとは！そしてこの挑発的なメッセージ！ますますをもつて許しがたい！」

めだかちゃん…

「まあまあ めだかちゃん。」

そういつて劉一はめだかの肩を叩く。

「反省したってコトだよ、誤ってるしね。」

そういうとめだかは、

「だが スニーカーは盗まれておるのだぞ？これは挑発のメッセージとも取れえる！」

はあ…

「大丈夫…もう こんな事おきないよ。きつとね。スニーカーは…  
どうやって返そうかって悩んでるんじゃないかな？それに…有明  
先輩は…笑顔だったし。」

そういうと頭を撫でた。

「む…／＼ そ そうか…む？？有明先輩…？良…い…笑顔？？」

あれ…？めだかちゃんから…何か…殺気が…

「え…？？」

「何かあったんじゃないのか…？貴様と… それで…笑顔なんじゃ  
…？？」

怖い…

「違う違う…！違うよ…！」「

あわてて否定…！

(なんで…こいつあれだけ賢いのに 馬鹿なんだろう…?)

善吉はため息混じりに…せつせと花の世話を…

「ってか…助けてよ!」

うつつ…ん…

大変すぎだあ…って感じですよ! 苦笑

んで… 謝罪文を送り… なぜかスニーカーと新品のスパイクをすり替えた諫早先輩はと言うと…

「…スニーカーを持ってくる意味は全くなかったわね…  
どうやって返そう…コレ…」

新たな問題に…苦悩中!!

自分がしたことだけどね 苦笑

第28箱 「何で伝わんねーかな…」のカッコよさが…」（後書き）

ありがとうございました！

第29箱 「私は…貴様を信じている！」（前書き）

よろしく願いします！

実を言うと… これでストック切れです…

ちょっと更新が遅れるかもです…

でも…ガンバリマス！！

でわ！

第29箱 「私は…貴様を信じている！」

箱庭学園 第九十八代生徒会長 黒神めだかが設置した目安箱は生徒の間では『めだかボックス』などと呼ばれ早くも好評を博していた。

で… その管理は庶務の善吉とそのフォロワーに回っている劉一の2人。

「今日は3通も入ってやがる 皆色々悩んでんだな」

「うん… 僕もね… 悩んでるんだ。」

善吉の横でうなだれているのは劉一。

「あん？どーしたんだよ？」

両手を頭の後ろで組み 劉一を見た。

「毎日毎日めだかちゃんの相手してて…」

どよよーん…

「そりゃ 消えてたお前が悪いと思うぜ。13年間分を取り戻す！」



！って気合入ってたからな、めだかちゃんはな」

「はあ……」

そんなことだろうと思った…… と言う顔だね。

「……それともう一つ！」

善吉が指を立てて言う。

「お前が失踪した理由だ！今までお前が生徒会に入って…… まあ俺もだけど、大分スルーしてたんだが、その辺ははっきりさせてもらうぜ！」

ビシッ！つとめだかちゃんばりに言う善吉君……

「ええ……つとあ…… それは……ね……」

ちよつと……言いにくい。

心の傷……

大袈裟じゃないものだった。

よくよく考えたら、立ち直れたのは、それ以前の闇を抱えていた事が幸いしていたのかもしれない……

「言えないかもしれないがそこところはハッキリしておくぞ!？」

そう言いながら歩いていると……

「それについては私も聞きたかったところだ！善吉に先を越されたな！」

凜ッ！と背後に立っているのは…言うまでもない…

「…もう突っ込まない…」

「はぁ… このタイミングで…」

ちよつと逃げようか… とか思ってたたり…

「まさか…逃げようなどと考えてはおるまいな？」

…真骨頂 EX 劉一限定 「読心術」絶賛発動中…

「逃げないよ… と言うか 逃げ切れないよ。」

苦笑していた…

そして…連行されてるかのよう… 生徒会室へ入っていった。

### 【生徒会室】

被告人のような感じ…って言ったら分かりやすいかな？

めだかちゃんがさながら裁判官だね…

善吉が検事？

んで…

劉一を弁護してくれる人は…いない… (涙)

「では、説明してもらっぞ？劉一。」

めだかちゃんの…顔はいつもより遙かに真剣だ…

善吉も同様だった。

誤魔化しとか… テキトーな事を言う空気ではなかった…

「うん。わかったよ。」

劉一は…一呼吸置いて…話しました。

最後に消息を絶つたあの日…

めだかちゃんと別れ…そして、ある黒づくめの男達に襲われた事…

捕まりかけ、そして…男達の標的が…めだかちゃんや善吉になつてしまつた事…

そして…それで我を失い…

男達を…

「……………」

めだかも善吉も表情が険しくなる…

何か事情があつたのだらうとは思っていたが…まさか…そんな事があつたなんて思つてもいなかつたようだ…

「そんな時…気絶した僕を助けてくれた人がいてね…その人が僕を引き取る施設を提供してくれたんだ…僕はね…勝手に考え込んじゃつたんだ。君たちの側にいる資格なんかない。人を傷つけた僕が、下手をしたら死んでしまうかもしれないほどの怪我を負わした僕が…毎日僕に光を…幸せをくれていた人たちの側に要る資格なんかないってね…」

顔を劉一も俯かせていた…

こんな事をしたことを…軽蔑するだらうか…？

もしくは…犯罪者の様な目で見られるのだらうか…？

ひよつとしたら… めだかちゃんに怒られたり、ポコポコにされたりするより… そっちの方が怖かったのかもしれないな…

拒絶されるかもしれない事が…

「あ…はははは… 僕が馬鹿だったんだ。あんなことして… 皆の前から消えて… 逃げても した事には変わらないって言うのに… ね。」

まるで…泣き顔のような表情をしている劉一。

そして…目を瞑った。

これから…どう言われても… 何を言われても… 受け入れるつもりだった。

返ってきた言葉は…

「馬鹿者！…！…！」

めだかちゃんの…その一言と…

ギュッ…

暖かい…ぬくもりだった…

「めだか…ちゃん？」

「劉一… 資格だと？ そんなものなど必要あるものか！」  
そう言っ…包み込むように劉一に抱きついてた。

「…俺もそう思っぜ。劉一。」

善吉も…そう言った。

「資格？ そんなもん必要なのか？ 友達とつるむのにさあ…！ そんな言ったら傷つくぜ？ それに話を聞けば お前…全然悪くねーじゃん！ まあ…お前の性格からしたら… 考え込んでしまうのは仕方ねーかもしれねーが…」

「……善吉……」

善吉の方も見る…

「劉一… 貴様は私を守ってくれたのだな… 私や善吉を… そんな訳があったのなら… 私は劉一！ 貴様を許す。貴様を探し続けた13年分の事も… 貴様が抱えてきたものに比べたら易いものだ！ だかな…」

めだかは…劉一の両肩を掴み、目を見る。

「これからは、私たち黙って消えるな！どんな事があってもだ！それに、悩みがあるのなら、目安箱に要れるが良い！私は誰からの相談も受け付ける！それに受け入れる！貴様は正しいと信じている！……私は劉一……貴様を信じておるからな！」

めだかがそう言つと……

自然に……笑みがこぼれる……そして……

「ありがとう……皆……」

心のつつかえが取れた……

そんな感じだった。

「へへ！……でも何か逆に悪りーな。そんな事があつたつてのに、初め軽い気持ちで聞いてたよ……俺。」

善吉は頭をかきながらそう言つ。

「いや……聞いてくれて良かったよ。13年間、誰にも話してなかつたからさ……軽くなった……そんな気がするよ。」

「そっか！そりゃー良かった！」

善吉も……とても良い笑顔だ。

あの時となんら変わらない……笑顔だ。

「瞳先生にも… 謝っておくよ。ちゃんと僕の口からね。」

「頼むぜ？お母さんも心配してたんだしよ？ 劉一が見つかったって言っただけでかなり大騒ぎだったんだからな！」

「うん！ばつちり、怒られてくるよ。」

劉一も…笑顔で答えた。

「フフフ…」

そして…めだかちゃんも笑っていた。

この瞬間の生徒会室は…

笑顔であふれかえっていた。



第29箱 「私は…貴様を信じている！」（後書き）

お気に入り登録してくれた方、ちらっと見てみた方、ありがとうございます！

駄文に付き合ってくれて… 苦笑

更新を…遅れないようにしたいですねえ…

年末は忙しいなあ…師走だなあ…ごろごろしたいけどなあ…つとか  
逃避入ってる今日この頃…というか毎日ですが…

はい！ ほぼ恒例の愚痴です！…！…ごめんなさあーい。

では！ガンバリマスので！今後ともよろしく願います！…！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8354x/>

---

めだかボックス ~From despair to hope ~

2011年12月25日01時52分発行